

琅

琅

琅

〈目次〉

【評壇】

宴のあとに	牛村 圭	2
—— オリンピックを問う		

【短歌】

哀歓抄（17）	尾崎 文英	22
---------------	-------	----

【エッセイ】

また アイ・ラブ・パリ	松村 茂治	24
たかが川柳されど川柳（7）	上野 一彦	44
脳梗塞体験記	山本 文子	54
土産の味	浦野 裕司	60

【小説】

タイタニック委員会 =序=	稲瀬 隆	64
彼岸花	ゆとろ 満	78

【「琅」同人規約】	115
-----------------	-----

【琅への手紙】	116
---------------	-----

【あとがき】	126
--------------	-----

★ 表紙題字 宮澤 鸞州（山梨大学教授）

★ 俳句挿絵 河西 万文（都留文科大学名誉教授）

宴のあとに

——オリンピックを問う

牛村 圭

同じ名と言いながら

「君の名は。」という映画が人気だという。タイトル名を耳にしたとき、聞き覚えのある響きと感じた。竹山道雄の名作『ビルマの豎琴』が二度映画となり、その都度人気を博したという先例を思い起こし、なにかの旧作のリメイク版かな、と考えた。その旧作を思い出せないままでいたある日の夕刻、新幹線で乗り合わせた京都観光からの帰路と思しき初老のご婦人方四名の会話が、謎を解いてくれた——『君の名は』つて言うけど、真知子じゃないのよね——」。そう、真知子だ、と合点した。とはいっても私は同時進行でこの「君の名は」に接した世代ではない。にもかかわらずわが脳裏にあるということとは、「君の名は」がそれだけ昭和史に大きな刻印を残した出来事だったことの証左なのだろう。検索の労を厭わず調べてみると、一

九五二―五四年に放送されたNHKのラジオドラマと判明した。初回放送日は五二年四月一〇日というから、GHQによる占領解除（四月二八日）直前、つまり独立回復前にすでに始まっていたことになる。そののち、映画にもなり、岸恵子、佐田啓二の主演で大変な好評を博したという（一九九一年四月―九二年三月にはNHKの朝の連続テレビ小説にもなっていたらしいが、当時滞米中だったため、記憶にはない）。

同じ名ながらも、実体はまったく異なるという例は他にも多々ある。人の場合は、同姓同名というケース。大学の教室で担当した学生に、昭和四十年代の東大総長の名を見つけ一驚したことがある。ものの場合も、同じ名称を冠しながら、その中味は昔日のそれとはまったく異なるというものが多数ある。たとえば「電話」と呼ばれながらも、ポータブルコンピュータに通話機能がついている、というのが昨今の携帯電話やスマートフォンの実情だろう。「ダイヤル回しながら、『好き』とつぶやいてる」という竹内まりやの一曲（「色・ホワイトブレンド」）の歌詞を目の前にすると、二十一世紀の若者たちはダイヤルを回しているという光景を想像するのが難かろう。そういう世代には、写真を撮った直後に写り具合を確かめるのが当たり前で、フィルムを現像に出し数日後に戻ってきて初めて写真を確認し、必要があれば「焼き増し」を店に依頼する、というプロセスもなかなか理解しがたいことだろう。

さて、南米大陸初の開催となったリオデジャネイロ五輪が閉幕して、すでに一か月以上を経た。次回は東京で五十六年ぶり二度目の開催となるためか、国内は四年後に向けての話題——希望も心配も——で既に溢れている観がある。リオ五輪はもはや過ぎ去りし一齣であり、紙誌に記録集計や総評を委ねれば良いかの如くにさえ感じられる。次期主催国としての責務を果たすためには、前を向いて進むことは必要だろう。三百万票に垂んとする支持を得て就任した新都知事は、その先頭に立っている。だが、同じ「オリンピック」と

いう名を冠しながらも、昔日の五輪とはすっかり姿を変えてしまった観があるオリンピッククを、一度問うてみてから歩むこともまた肝要ではないか。以下に、そのささやかな試みを綴ってみたい。

「五輪に集う高収入アスリート一〇傑」

リオ五輪の開会式直後の八月六日、『朝日新聞』に興味深い記事が掲載された。「億万長者アスリートは？ 錦織が五位 リオ五輪」と題されたその記事には、「リオデジャネイロ五輪に集う高収入のアスリート一〇傑」のリードのもと、その十人の名と推定年収（米ドル）を掲げた一覧表があった。一位はNBA（アメリカプロバスケットボール）のデュラント、二位はテニスのジョコビッチ、三位をテニスのナダルとサッカ一のネイマールで分け合い、そして五位に錦織圭。六位には陸上競技のボルトの名があった。八位に唯一女性のテニス選手セリーナ・ウィリアムズが入り、七、九、一〇位はいずれもNBAのプレーヤーが占めた。

「オリンピックに集う高収入アスリートたち」というこの一覧表を見て隔世の感をおぼえたのは私一人ではないだろう。十人中九名がプロ選手であること、つまり、プロのアスリートが堂々とオリンピックに出場できる世であること、そして、プロ競技団体を持たない陸上競技の競技者であるウサイン・ボルトがプロ選手と収入面で渡り合っていること等々、昭和の時代の五輪を知る者ならば、思いもよらないことばかりである。ボルトの場合は、広告収入や参加レースからの報奨金が収入源になっている。プロアマ問わずスポーツに長じれば——と言っても、世界トップレベルという類い希な才能という話だが——かなりの競技種目ではビリオネアに成れるというのが二十一世紀なのである。

もう一点、やや古い内容となるが引いておきたい報道がある。リオ五輪でメダル獲得を確実視されながら

も、カジノ賭博への関わりが判明したため五輪への道を断たれた若手のバドミントン競技者がいた。「子どもたちに（テニスではなくバドミントンでも食っていけるといって）夢を見せたい」として派手なファッションや高価なアクセサリを身につけていたことも、あらためて報じられた。「テニスではなく」と前提したとき、二十一歳というこの競技者の念頭にあったのは、錦織だったのか。そして、錦織のようにジャガーの新車の提供は受けないにしても、「派手なファッションや高価なアクセサリ」に、自らは高収入を得ているというメッセージを託したかったのか。

テニスと違ってバドミントンにはプロ団体はない。すなわち、テニスプレーヤーがテニスで収入を得ているのと、バドミントン選手が「食っていける」というのは、そもそも前提が異なるはずなのに、この若いプレーヤーにはそれが見えなかったのか。彼は真つ当な実業団所属選手である。一企業の人間として夕方まで（ときには配慮を受けて午後の早い時間まで）仕事をこなしそのうち体育館で練習に励む、というのが実業団選手の通例だった。勤務で得られる収入は、若手社員のそれに他ならず、額はたかがしれていた。いまでも実業団所属の選手が勤務から得られる給与は、栄養費などの特例を除けば同世代の同僚とさほど変わることはないだろう。にもかかわらず、派手な生活がおくれていたのは報奨金等の多額の別収入があったことの証しだった。実績があれば、日本選手であっても、プロ団体がなくとも、昔日の実業団所属選手には思いもよらない「厚遇」を受けられることを世間一般があらためて知る契機となった一件でもあった。

「オリンピックアマチュア競技者の祭典」は過去のこと

アマチュアを続けて五輪を目指すか、それともプロに転じ、五輪を断念する代わりに自らの技能をもって

糧道とするか、という二者択一の葛藤はもはや過去のこととなった。オリンピックに関しては、アマチュアリズムは消失したのである。プロアマ問わず、もつとも強い者が出場し競い合う場が、オリンピックという四年に一度のスポーツの祭典である——これこそ、現下のオリンピックを形容するに相応しい定義だろう。

シカゴ・ブルズ所属のマイケル・ジョーダンを筆頭とするNBAのスーパースターたちから成る「ドリームチーム」と呼ばれたチームでアメリカがオリンピックに臨んだのは、一九九二年の第二十五回バルセロナ大会のことである。それからすでに四半世紀ほどを閲する。バスケットボールという同一競技種目にアマチュアとプロとが併存し、オリンピックへ出られるのはアマチュアの強者たち、という当たり前とされてきた前提が撤廃され、最も優れたプレーヤーたちがチームを編成して五輪に参加したというこの史実は、アマチュアリズムの消失の象徴的な出来事として、近代オリンピック史に向後も大きく記載され続けていくことになる。

顧みれば、オリンピックに参加できるのはアマチュアに限る、という一項が「オリンピック参加規定」に加えられたのは、一九〇八年の第四回ロンドン大会の時だった。近代オリンピックの祖であり初代IOC会長を務めたピエール・ドゥ・クーベルタンは、アマチュア資格に厳格だったと伝えられているが、近代オリンピック開始当初、IOC全体としては、参加資格について厳しくはなかったことが分かる。ちなみに、オリンピックへの参加方法も、セントルイスで開催された第三回大会までは、参加競技者が個人またはチームとしてIOCに申し込むかたちにとられた。今では当たり前の、所属国の国内オリンピック委員会（NOC）を通しての参加という形式もまた、第四回ロンドン大会に始まった。

ジム・ソープ事件を顧みる

日本が初参加した一九一二年の第五回ストックホルム大会ののち、おそらくオリンピック史上最大のプロ／アマをめぐるスキヤンダルが起った。同大会では、陸上競技男子の混成競技（五種競技と十種競技、当時はこの二種があった）を、アメリカのジム・ソープが圧倒的な強さを示して制した。主催国スウェーデンの国王ばかりかロシア皇帝からもその栄誉を讃えられた。だが、翌年一月になり、ソープが自国のマイナーリーグで野球選手として報酬を得ていた過去が新聞にスクープされた。全米運動協会（AAU）はソープの擁護にまわるのではなく、これを問題視し、最終的にIOCはソープが得た二つの金メダルを剥奪する決定を下したのである。些額であつてもスポーツ競技で報酬を得ていたという過去の事実（当初は、体育教師すら該当するとされていた）があると、アマチュア資格を失うシステムになっていた。

もともと、このソープの一件には様々な裏事情があるらしい。最たるものは、アメリカ原住民出身であつたソープへの人種偏見と言われている。抗議が行なわれるのはオリンピック閉会から三十日以内という規定を無視するかの如く、半年以上経てからのスクープに端を発する一連の抗議の動きが認められたという事実が、それを証しているかに思われる（その後一九八二年、IOCはソープの名誉を回復し、遺児に金メダルが渡された）。

歴代IOC会長の中では、第二次大戦後、二十年間にわたり職（第五代）にあつたアベリー・ブランドージも、強いアマチュアリズム信奉者だった。冬季五輪では、スキーヤーたちが使用製品の広告塔となることを嫌った。ブランドージ会長下での最後の冬季五輪は一九七二年の札幌大会だったが、今のように契約している会社のスキー板をブランド名が分かるように掲げて表彰台に立つ姿は、なかったように記憶する。

ブランデーは一九一〇年前後に活躍したアメリカの混成競技者であり、ソーブが制した一九一二年の大会では五種競技で入賞を果たしていた。ソーブのスキヤンダルを同時代アスリートとして目の当たりにしていたことになる。彼のアマチュアリズムへの強い思い入れには、ソーブの一件が作用していたのかもしれない。クーベルタンやブランデーといった先人が強い個性を歴史の上で今なお燦然と放っているためか、アマチュアリズムを死守してオリンピックの神聖を保てという主張が時に見られるものの、一八九六年に始まる近代オリンピックの歴史を顧みると、参加資格に関わるプロ／アマという区分についてさほど厳格でない時代の方が長かったことが分かる。そして、この区分が今後ますます問われなくなるであろうことは、まず間違いないだろう。

アマチュア規定廃止の恩恵に与ったカール・ルイス

ブランデーは一九七二年のミュンヘン大会ののち会長職を退き、第六代会長にはアイルランドのキラニン卿が就いた。キラニン会長治世下で特筆すべきは、一九七四年、オリンピック憲章からアマチュア規定が削除されたことである。キラニン卿は、一九八〇年のモスクワ大会直前に会長職を辞した。そのモスクワ大会は、前年の旧ソビエト連邦によるアフガニスタン軍事介入に抗議して、日本を含む西側諸国が不参加（西陣営ではイギリスは参加）を決定し、盛り上がりを欠く大会となった。オリンピックというスポーツの祭典に政治が持ち込まれたのである。

続く一九八四年の、五十二年ぶり二度目のロサンゼルスで開催となった五輪は、スーパースターの誕生を見ることとなった。陸上競技一〇〇m、二〇〇m、走幅跳、そして四〇〇mリレーで金メダルを得た米国

のカール・ルイスである。この四種目を制したのは、一九三六年のナチ主催といつていいベルリン大会で活躍した同国のジェシー・オーエンス以来であり、歴史に残る快挙となった。ルイスはその後、ソウル、バルセロナ、そしてアトランタと走幅跳で四連覇を果たす。こちらは、同国の円盤投選手アル・オーター（メルボルン、ローマ、東京、メキシコをいずれも五輪新記録で制覇）に肩を並べる偉業となった。

もし米国がモスクワ五輪に参加していたなら、ルイスはモスクワからの五連覇を果たしていたのでは？と思う向きもある。たしかに、ルイスはモスクワ大会の出場権を得るための国内選考会を通つてはいた。追い風参考で八m三〇をこえる跳躍を見せたこともあった。だが実際はまだ八m前後の実力のジャンパーであり、仮にモスクワ大会のピットに立っていたとしても、反り跳びスタイルで八m五〇を超える大きな跳躍を見せた東ドイツのドンブロウスキーを凌駕することはかなわなかったと思われる。

オリンピック憲章からアマチュア規定が削除された直後の時代のトップアスリートとなったルイスの競技者としての日々は、走れば、跳べば、それが莫大な収入に直結するというモデルケースともなった。契約しているスポンサー料、競技会への出場ギャランティー、それにCMへの出演料により巨額の富を手にした。今日のウサイン・ボルトの原点をルイスに見ることは可能だろう。陸上競技者に限定するならば、アマチュア規定の削除の「恩恵」に真つ先に与つたのは、カール・ルイスではないか、と思われる。

生まれてくるのが早かったか——メキシコ五輪のスーパーアスリートたち

見方を転じるならば、アマチュア規定廃止の一九七〇年代前半よりも前に全盛期を迎えていたアスリートたちには、この「恩恵」はなかったということである。ここでは、一九六八年のメキシコ大会で大記録を出

したアスリートたちに思いを馳せてみたい。オリンピックで初めて一〇秒の壁を破る九秒九五で一〇〇mを制したジム・ハインズ、初めて四〇〇m走を、一〇〇m平均に換算して一〇秒台となる四三秒八六で駆け抜けたリー・エヴァンス、世界記録を一気に五〇センチ以上更新し八m九〇の夢の大記録を打ち立てた走幅跳のボブ・ビーモン、といったスーパースリートを生んだオリンピックとして、メキシコ大会は五輪史に名を残している（もともと、競技場が標高二〇〇〇mをこえる高地ゆえ空気抵抗が少なかったから、という側面も多分にあったのだが）。

陸上競技にはプロ団体がなかった以上、瞬発力を要する種目で功成り名遂げたアスリートたちには、プロ団体が存在する別種のスポーツが待っていた。ほとんどの場合、それはアメリカンフットボールだった。一九六四年の東京五輪の一〇〇mを制したボブ・ヘイズはNFLで名を残すプレーヤーとなったが、ヘイズはまれな例外で、一芸に秀でても他芸にまで秀でるのは難事だった。メキシコ五輪で月桂冠の榮譽に浴した前記アスリートのうち、陸上競技を続けたのはエヴァンスのみで、ハインズはNFLへ、ビーモンは、おそらくジャンプ力を見込まれたのであろう、NBAの世界へそれぞれ誘われて入っていったものの、大成することなくやがて去ることとなった。

メキシコ大会当時二十一歳だったリー・エヴァンスは、一九七二年のミュンヘン大会での連覇を夢見たことであろう。だが陸上大国アメリカの選手層は厚い。ミュンヘンへ向けての国内代表選考会で四着に終わり出場権を逃した（五輪に出場できるのは選考会で各種目三着まで、という一発勝負なのがアメリカ流である）。加えて、エントリーしていた一六〇〇mリレーでは、四〇〇mで金銀を得たチームメイトの二人が表彰台で五輪への敬意を欠いた行為をとったとして永久追放処分を受け、もう一人の代表は決勝レースまで順当に進

んだものの大腿後部を痛め途中で棄権、こうして米国は四名のメンバーを揃えることはかなわなくなった。世界記録保持者でありながら、そして遠路ミュンヘンまで出向きながら、エヴァンスには五輪のトラックをふたたび走る機会は与えられなかった。

エヴァンス以外にも悔しい思いをした同国のアスリートがいた。メキシコ五輪棒高跳ゴールドメダリストのボブ・シーグレンである。ミュンヘン大会直前になって使用している新ポールが五輪では禁止と決定し、不利な条件で競技に臨まざるを得なくなり、東独のノルドウィックの後塵を浴び、銀メダルに終わった。個人としての連覇を果たせなかったばかりか、第一回のアテネ大会以来続いていた米国のこの種目での連勝を十六で止めることとなる、不名誉の責をも負うこととなった。

エヴァンスも、シーグレンも、失意のうちに帰国したであろう。そういう彼らを待っていたのは、新しく結成されたプロ陸上団体からの誘いだった。バスケットボール、ベースボール、フットボール、それにアイスホッケーというように米国ではプロ競技団体があつていずれも人気が高い。陸上競技にもプロ団体を設立しようという動きが、一九六〇年代後半にはあつた。そして一九七二年のミュンヘン大会直後、International Athletic Association (I T A) の団体名を掲げて活動を開始した。中心となったのは、バスケットボールやアイスホッケーの既存プロ団体に対抗する新団体を設立して名を挙げた経歴をもつプロモーターの、マイケル・オハラという人物だった。エヴァンスもシーグレンも創設メンバーとして加入した。ミュンヘンで八〇〇mを制したデイヴィッド・ウオットルものに加わった。すぐれた経営手腕をもつオハラは、所属アスリートには定期給のほか記録に応じた臨時給も支給、TVコマースシャルなどへの出演も自由とした。試合については、全米をツアーで回る形式を採った。当時アメリカでアマチュア競技を統率するの

はアメリカ体育協会（AAU）であり、オハラはITAの活動がAAUの競技日程と重ならないようにするなど配慮して、ITAの運営に腐心したという。

本格的なプロ陸上団体の試みであったITAは、一九七六年のモントリオールオリンピックのち、活動を終える。テレビ放映権を売っての収入が見込めなかったこと、新たなスター選手の獲得がかなわなかったこと、が「失敗」の原因と世上言われている。このITAに集ったメキシコやミュンヘンのヒーローたちは、一九七四年の五輪憲章のアマチュア規定の撤廃、その後のカール・ルイスたちの活躍ぶり——走れば走るほど裕福になる——を目の当たりにしてどう思ったであろうか。生まれてくるのが早かった、と慨嘆したアスリートもきつといったものと思われる。

獲得メダル数は成否の指標のすべてか

ここまでアマチュアリズムを手がかりにして、五輪史の概略を追ってみた。以下、四年後の東京大会を見すえての所感をいくつか記すこととしたい。

リオ五輪での日本選手の獲得メダル数は、金十二、銀八、銅二十一、の総計四十一個となり初参加以来最多となったと報じられた。次期大会のホスト国としては、メダル獲得総数の伸びは慶賀すべきこと、頼もしく思える成果なのは間違いない。数値は評価を行なうさいの重要な、そして簡便な指標となりうる。自分の、わが子の、あるいは教え子の各種受験を前にして、偏差値という数値に一喜一憂した経験をもつ方も多いことと思う。

学習習熟度を測る物差しが偏差値だけでないように、ものには数値では把握できない面もあるのだが、つ

いつい分かりやすい指標に眼を向けやすいのが人の世の常であろう。オリンピックについていうならば、獲得メダル数が増したと言って成功を喜び、減ったから反省を促し、また数が減っても予想外のメダルを手にしたのだから全体として成功と考えてよい、という向きが強いように思えるが、かかる単純な対応ではオリンピックという事象を捉えきれないだろう。

同じくリオの地で開催されたパラリンピックが、はからずもそのことを考えさせる契機となったように思う。日本選手団は、前回獲得した金メダル数五をこえる十個、そして銀、銅合わせ総計四十個を目標としていたとのことだが、終わってみれば銀十、銅十四を獲得し、総計二十四個となり前回大会で得た総数十六を凌駕したものの、金メダルには一つとして届かずに終わった。金の獲得数ゼロというのは初参加した一九六四年の東京大会以来初めてという。数値のみを評価指標とすれば、金メダル獲得数がゼロというのは不振の象徴、ということにもなるう。

しかしながら、この結果は、日本のパラリンピアンたちの技量が劣化したからではなく、競い合う他国の選手層が厚くなり、かつ競技レベルが向上したことに起因する相対的不振だったことは、既に新聞等で報じられていると通うと思われる。自己記録（昨今では、プライベート・ベストⅡPBと呼ぶらしい）を更新しながらも、狙っていたメダルを手になかったアスリートもいたことがその証左となる。予想外の結果を目の当たりにして、パラリンピック事業へ国がもつと助成することが必要という議論が生まれたのは自然な流れだった（隣国中国のパラリンピックへの国家としての取り組みも、わが国のジャーナリズムで報じられることとなったが、その体系立ったシステムには一驚せざるを得なかった）。

終わりなければすてよし、ではない

一方オリンピックでは、逆のケースを考えさせることにもなった。こちらはより深刻と思われる。すなわち、ある種目で思いがけないメダルを手にしたため、同競技の他種目での不振を猛省しなければいけないにもかかわらず、反省を途中で放棄してしまったかのような雰囲気が生じた事例である。閉会式も間近となった陸上競技の最終盤で行なわれた男子四〇〇mリレーの銀メダル獲得の快挙は、それまでの陸上各種目で予選落ちがほとんどだったことへの憂いを吹き飛ばすかのように作用した。持ち記録は誰も十秒を切っていなかったスプリンター四名から成る日本チームが、九秒台スプリンターを揃えた陸上大国アメリカに先んじてゴールへ飛び込んだのである（アメリカはのちにバトンパスミスで失格と判定され、カナダが三位に繰り上がった）。

オリンピックの陸上競技の最終種目は男子マラソンであり、その前に男女の四〇〇mリレー、そして一六〇〇mリレーが行なわれるのが慣例となっている。そのリレーで銀メダルを手にしたため、さながら「終わりなければすてよし」の如き雰囲気が生じ、偉業をなし得たシルバーメダリスト四名を讃える記事が紙面を大きく飾り、テレビの報道番組もこの快挙でしばらく持ちきりとなった。

リレーでの銀メダル獲得の快挙は、日本の陸上競技史、オリンピック史に残る偉業となるに相違ないが、これで陸上他種目の不振が相殺されるものでもとよりない。男女のマラソンを中継する映像では、日本選手の手姿どころか途中からは苦しい表情を写すのほとんど終始し、日本はメダルからますます遠ざかっているという冷徹な現状を観る者に突きつけたし、他種目でも自己記録に遠く及ばぬレコードにとどまった例が多数見られた。男子リレーの美談で終えてしまっていない話では毛頭ない。

陸上競技連盟に直言した陸上専門誌

さすがに、陸上関係者の緊張感は違った。専門誌はオリンピック特集号で、忌憚なく分析し、憂え、そして訴えた。

自己記録を更新したのは、男子一〇〇mの山縣（亮太）と男子四×一〇〇mリレー、男子四〇〇mハドルの野澤啓佑の三例だけで、女子は皆無だった。前回は男子二例、女子三例の計五例もあったから、それに及ばなかった。一步譲って、今季自己最高の数だが、ここでも自己新を更新した上記の三例に加え・（中略）・の六例にとどまった。前回は一二例もあったから、今回は話にもならない。これでは国際大会で記録を上げて来る他国に対抗できない。

今回のリオは前回のロンドンより劣っている、後退しているということに尽きる。男子四×一〇〇mリレーの成功に酔っている暇はない。次の東京まであと四年しかない・（中略）・と次々に国際大会が迫り、あつという間に二〇年を迎えてしまう。

『月刊 陸上競技』二〇一六年一〇月号

リオ五輪に日本は五十名を超える大選手団を派遣した。オリンピックという四年に一度の世界の舞台で戦う好機を与えられたアスリートたちの戦績は、自己記録更新は三例、今季最高としても六例にとどまるという。記録を争う競技は、その成否が素人にも直ちに分かる。入賞できなくとも、自己記録更新を果たしたな

ら代表の責務を少しは果たせたとして労いたい気は起ころのだが、この結果では代表の名が泣こう。百四年前、初めて日本がオリンピックに参加したさい、選ばれた初の代表選手たち——といっても、スプリンターと長距離選手のわずかに二名だったが——は、北欧の地への渡航費用を自弁した。物心両面で相当な覚悟での参加だった。それに比すれば、費用はすべて公費でまかなわれる平成の世の若者たちは、明治末年の大先達の覚悟への思いはあったのか、と問い質したくさえる。

陸連はもちろん派遣標準記録を設定し、記録突破者のなかから厳正に選手を選考しているのだが、少しでも多くの競技者に世界の大舞台を直接経験させたい、という気持ちで第一義と感じられ、他国の選手と競い、勝てる選手を派遣するということは二の次になっている観を否めない。別の陸上競技専門誌は、編集長の署名入りで『『世界で戦う』定義を明確にし 強い代表チーム編成を』という記事を掲げ、以下のようにこの問題を問うている。

世界で戦うことが目的だったのか、それとも一人でも多くの選手を送り込むことが目的だったのか。リオ五輪の日本代表を見ていてあらためて感じたのは、チームの方向性の曖昧さだった・・（中略）・・種目数が多いとはいえ、全競技最多の五二名もの派遣選手に対して「メダル二、入賞二」が少なく見えてしまうのは、正直なところだろう・・（中略）・・男子四×一〇〇mRや男子五〇kmWのメダル獲得という快挙で陸上のインパクトを残した一方で、これだけ予選落ちや完敗という結果を出したチーム編成では、全体として成功とはいえない。

（『陸上競技マガジン』二〇一六年一〇月号）

言葉を選んで記してはいるが、陸連の方針への強い疑義を感じさせる文章である。『陸上競技マガジン』誌は、昭和五十年代半ばより日本陸上競技連盟の「陸連時報」を毎号巻末に載せ、陸連の機関誌としても機能してきている。同誌の編集部という「身内」から出された厳しい意見に陸連幹部たちがどう向き合い、四年後の五輪開催に向けて進むのか、陸上関係者ならずとも注目したいところである。

スポーツを語るむずかしさ

メダル獲得数が目指すすべてではないなら、一体何を目標に掲げればいいのか。それは、よりよきパフォーマンスに尽きよう。レコードを競い合う陸上競技や水泳のような競技は、同じ競技会の出場者ばかりか古今東西の先達ともパフォーマンスを比較できる。さきに記した米国でのＩＴＡという試みが失敗に終わったのは、ツアーが連続し凡記録が続き、そのパフォーマンスに魅力を感じなくなった観客の足が遠のいたためではないか、と私は推察している。ＩＴＡは設立翌年の一九七四年春のシーズンに来日し、前年オールウェザー競技場へと改装成った国立競技場を駆け抜けた。だが、特集を組んだ『陸上競技マガジン』が、「豪華メンバーが勢ぞろい——しかし内容は」という記事を載せざるを得なかったように、メダリストたちとは思えないような凡記録を残して去っていった。二度目の来日はなかった。

一方、日本中に感動を呼び起こした男女の卓球のように、パフォーマンスを数値化して把握することができない競技もある。しかし、競技に臨んでいるアスリートたちの真剣さ、そこから生み出される競技レベルの高さは、素人観客にも伝わってくる。どの競技種目であっても、パフォーマンスレベルの高い競技を観た

いと切に願うのが常ではないか。そしてそのさい、アスリートたちのパフォーマンスの良し悪しを、観る者に分かりやすく伝えてくれる、よき解説者の存在も不可欠だと思う。

だがスポーツを語ることは難しい。それは、音楽や美術を評論の対象とするのと同じくらいの難事だと思う。そのためか、それぞれのスポーツには「業界語」めいたものが跋扈している。たとえば大相撲の世界には「立ち合いのきびしさ」がある。不振の力士を前に何が必要か、と訊かれて「立ち合いのきびしさはまだ足りない」ふうな回答を口にする解説者が少なくないが、「立ち合いのきびしさ」とはそもそもどういうことを指すのかを示さずに、二言目には「立ち合いのきびしさは足りない」と言い放つてみても、解説者の責を果たしてはいないだろう。「立ち合いのきびしさ」ばかりを指摘する元横綱の部屋持ち親方の解説より、現役時代はたとえ平幕止まりであつても解説者席ではバイオメカニクスふうな語りを展開してくれる若手親方の語りのほうが、聴いていて学ぶことが多々ある。

ちなみに右に記した卓球では、解説者の語り口が大変好評を博した。女子卓球の解説の多くは、ロンドン大会時に男子監督を務めた宮崎義仁が担当した。福原愛がエッジボールで敗退するという惜しい場面を前にした宮崎は、「私も選手を応援しているし、日本の卓球を応援しているから、あれはアウトだと思いたい。しかし自分の経験上、あの角度で当たって、少しでもボールの角度が変わるのなら、あれは入っているという判定で認めざるをえないと思います」と解説したという。プロの名に値する技術分析と自国選手への暖かいまなざしとが交錯する名解説が、ここにある。昨今はやりの表現を用いて、「神解説」との形容もなされているのも宜なるかな、である。

おわりに——よきパフォーマンスにはよき解説を

リオデジャネイロオリンピックをテレビで観戦していて、もの足らない解説はパフォーマンスの良し悪しを数値で捉えることが可能な競技種目に目立つように思えた。陸上競技では、短距離に二人、ハードルに一人、中距離以上の走種目に一人、跳躍と混成競技に一人、投擲に一人、そして女子の中距離以上の種目に一人、を配する解説者の布陣をとっていたが、このうち、跳躍・混成競技を担当した解説者のプロとは言い難い解説には失望した。現役時代棒高跳の日本選手権者でもあるこの国立大専任講師は、四年前のロンドン大会の折にも、「三段跳で一番大事なことは何でしょうか？」と実況担当のアナウンサーに訊かれて「助走のスピードです」と応じ、聞いていて驚いた。跳躍競技で助走のスピードが重要なのは当たり前なのにもかかわらず、である。三つの跳躍を通し助走スピードを極力落とさないようにするため、ホップの踏みきり時に高く上らず低く遠くへ跳ぶことこそ三段跳の要、この解説者は、三段跳の競技経験はもとより指導経験もないのだろうと感じたことを思い出した。

そのロンドン大会のときには、走幅跳と三段跳とで二つのメダルを得た米国人ジャンパーの出現を、五輪史上初の快挙としてアナウンサーともども讃えていたが、田島直人という大先達を知らないことにも驚いた。田島の偉業（ベルリン大会、走幅跳銅、三段跳金）は、日本陸上競技史の常識ではないか。リオ大会では、二回フールが続いた競技者が、三回目の試技で踏み切り板のかなり手前からの跳躍となり自己記録に遠く及ばない結果に終わったとき、「そうですねー、二回フールして緊張してしまったせいだと思いますよ」と口にしていた。自らの専門である棒高跳については、さすがに経験に基づく解説を時折展開してはいたものの、総じて技術解説ではなく、大雑把な心理解説に終始しているという印象を受けた。

女子の中距離以上を受け持った唯一の女性解説者は、知名度ではおそらく一番の増田明美だったが、競技者の育った家庭背景の紹介などを相変わず熱心にする姿は、芸能レポーターを想起させた。また、自身がマラソン出身だったこともあってか、熱を込めて後輩ランナーを応援するのはよいのだが、「このコースは日本選手向けです」とか「今日の天気は日本選手にとっても向いています」と断言しつつ、好結果がこれまでも一つもないままで実況を終えている。反省はないのか。

ほかに適任の女性解説者がいないのかと思いたくなるがそうではなく、八月下旬に放映された全日本中学陸上選手権で全種目の解説を担当した、走幅跳の日本記録保持者で北京五輪出場の経歴を持つ井村久美子の解説は、技術解説がたいへん分かりやすく、陸上初心者の中学生であつても聴けば益するところ大、と思わせた。井村女史の解説に納得しながら、なぜNHKはこういう優れた解説者を五輪の場で使おうとしないのだろうか、と率直に思った。

陸上競技の解説者として群を抜くのは、今回も投擲解説を担当した小山裕三教授であろう。玄人受けのするマニアックな解説、としてウェブ上で紹介されることが多い。現役時代、砲丸投を中心とする投擲種目にとどまらず混成競技でも優れた記録を残した元アスリートだけあつて、投擲種目以外に言い及ぶさいにも分かりやすい言葉を用いながら、聞く者を納得させる技術解説を展開する。ロンドン五輪時の中継では、投擲種目に加え混成競技をも担当しており、その解説を堪能することができた。

今回は円盤投の解説時に、「上手く飛ぶときは、上昇していくとき円盤は右側が下に、そして落下していくときには左側が下になるんですねー」と気持ちを込めて話していた。この語りに運よく接することができた視聴者は、円盤投をどう見ればよいのか、観戦の要を会得できたのではないか。また、砲丸投の決勝のの

ちには、入賞者のうち回転投法をとる選手が五輪史上初めてメダルを独占し、従来のグラインド投法者は少数派になったと指摘するなど、技術だけでなく競技史の視点からの解説をも展開していたことも注目された。四年後の東京オリンピックでは、解説者のパフォーマンスも向上していることを切に願いたい。アスリートたちのよりよきパフォーマンスを、よりよき解説で堪能したい、と思う。

現在のオリンピックは、この小論で紹介し、論じてきたこと以外にも、いくつもの争点を提起している。本年大きな話題・問題となったドーピング、好記録を連発する女性アスリートを前にして、女性と男性との境界とは、という広義のジェンダー問題、そして義足などの用具の改良が劇的に進行する今日、オリンピックとパラリンピアンはどう共存するのがいいのか、等々である。いずれも大きな課題であり、稿を改めて論じることとしたいと考えている。

哀歎抄（十七）

尾崎 文^{ぶん} 英^{えい}

寒風もひかりともなふ正月よ淑氣に満ちて日が昇りくる

凜と咲く花の一つに寒椿原節子なるひとのおもかげ

筆跡を辿りたどりて洛南に元政尋ぬ雪の降る日に

男みな他界したりと喪主が云ふをみなが多く冬日道行く

斧錆びてまったく錆びて雪が降るこの家にむかし祖父母と父と



冬帽を愛しと被り席に来て書物をひらく老教師居り

白髪のが様相^{なり}うつる寒水にかいつむりきて汝^{いまし}潜れり

浮寝鳥一つ目覚めて羽ばたけば按針河畔旅情身にしむ

花どきの二階に目覚め句を作る階下に叔母が鰯^なたたき音

清澄の蓮華咲きつぐ雨の中モリアヲガヘルいまを啼^なきゐる

横湯川この岸縁をなほ歩く天与の森に河鹿啼くなり

かの熱き日とも重なり空焦がす百日紅よ戦よあるな

(『日本短歌協会会員』)



エッセイ

また アイ・ラブ・パリ

― 空からパリを見てみよう ―

松村 茂治

第一話 エッフェル塔

― または、第三の矢「スイスイ入場券」 ―

話は、四年前の、初めてのパリ旅行にさかのぼる。

パリに着いたその日、セーヌ河畔まで散歩の足を伸ばしたとき、すぐ近くからセーヌ川観光船が出ていることを知って、早速乗船してみることにしたのである。桟橋付近は、たいそうな混みようだったが、チケットはすぐを買えたし、それほど待ち時間もなく船にも乗れたので、さすが世界的な観光地、人の流れをよく把握して手際よく営業していると、そのときは感心したのだが、い

ささか買い被りだったことが後になって分かってきた。

数日後、エッフェル塔の下まで行ってみて、改めて、世界の観光地の真の姿を垣間見た気がしたのである。塔の下を埋め尽くす人の列は、どこが最後尾なのか、すぐには判らない。しばらく様子を見ていたが、列はほとんど進んでいるようには見えなかった。おそらく、二―三時間並んだところで、入れるものではないだろう。夏とは言え、午後の遅い時間ということもあり、日を改めて出直すことにして、係のお姉さんに聞いてみると、朝は九時からの営業だという。早起きして開門前に並べば何とかなると思ったのだが、その後、訪れる機会のないまま、帰国してしまったのだった。

帰国後、パリ旅行を扱ったテレビ番組を見るにつけ、エッフェル塔には登らなかつたどころか、夜空に浮かぶきらびやかな塔の姿も見ずに帰って来たことをひどく悔やむ妻から、このままでは人様に胸を張って、パリに行ってきたとは言えないなどと、脅迫まがいの泣き言を聞かされ、戦略を立てる必要を感じたのである。それが、今回の旅で用意した三本目の矢、「エッフェル塔見学ツアー参加券」である。

エッフェル塔へのガイドツアーがあることは、インターネットやガイドブックを通じて薄々は知っていたが、当初は、利用しようとは思っていなかった。料金だつて馬鹿にならないし、そもそも言葉が不自由で、ガイドの説明など理解できないと思つたからだ。しかし、ネットを使つて、いろいろと情報収集をしているときに、「エッフェル塔に優先入場！長蛇の列に並ぶことなく、スイスイ・・・」の文字を目にしたのである。前回の旅行でひどい混み様を見てきただけに、「・・・スイスイ・・・」には心が動いた。

探っていくと、エッフェル塔に関しては、展望台への入場と、パリ市内の観光やセーヌ川クルーズ、ランチや

ディナーなどを組み合わせたさまざまなツアーが用意されていることが分かつてきた。もちろん、組み合わせの内容によつて、料金は異なってくる。どのような組み合わせが「お得」か、いろいろと比べてみたけれど、結局、塔に登ることが第一の、そして唯一の目的であることを思い出し、最もシンプルな、「塔見学ツアー」に決めたのだつた。

シンプルとは言つても、それは廉価であることを意味するものではない。待ち時間さえ厭わなければ、通常料金は十五ユーロ程度のものだが、この「スイスイツアー」はガイド付きということもあつて、六十ユーロほどになる。フランス語であれ英語であれ、ガイドの説明など聞いたつて分かりはしないと思うと、いまいましい値段ではあるが、あの行列を考えると、そうとばかりは言つていられない。

日本を立つ前、知人に、こんなツアーがあつて、少し高いとは思ふけれど・・・と話すと、その知人も、かつて列を作つたことがあり、その横を二十人ほどの団体が、通り抜けて行くのに遭遇したことがあるというので、「スイスイツアー」は、期待しても良さそうな気がして

きたのである。

私の申し込んだツアーは、午後二時に、現地オフィスを出発することになっている。できるだけ余計な動きはしないようにと、午前中は、エッフェル塔に近いマルモッタン美術館でモネの絵を見て、近くのカフェで昼食をとり（店の名前もよく見ずに入ったのだが、日本人夫妻のやっている店だったので、注文がしやすく、海外でのこういう店の存在は、本当に助かる）、地下鉄で二駅ほど戻って、塔を見上げる所に立ったのである。

ツアーオフィスは、地下鉄の出口からは、塔の下をぐり抜けた反対側にあることになっている。高さ三百メートルの塔を支える脚部はずいぶんと大きく、その下を通り抜けることだけでも、貴重なエッフェル塔体験なのだが、結構な時間がかかる。おまけに、通り抜けた先は、広い公園になっていて、周囲が大きな木で囲まれているために、事務所らしい建物は見えず、持っていた地図が頼りないこともあって、余裕を持って動いていたものの、最後には冷や汗をかいてのオフィス到着となってしまう。

ツアーでは、女性ガイドが、二十人弱のグループを案

内してくれるというのだが、ガイドは英語で行うということで、改めて、米英の侵略を実感する。

一般論であるが、なぜ、ガイドは（と言っても、私が知っているのは、米・英・仏くらいのものだが）、我々、東洋人がいるのにも拘わらず、早口でまくし立てるような話し方を改めようとしなのだろう。ガイドだけではない、街でちよつと何かを尋ねても、ネイティブの人に対するような応答が常である（私のしゃべり方がネイティブ並みと言うなら納得もするが、決してそういうレベルではない）。彼らは、早口でしゃべるということに、われわれ外国人には理解できないような、重要な価値を置いているのかもしれない。旅行用の英会話や仏語会話集に、「モウスコシ ユックリ ハナシテ クダサイ」といった例文を見かけることがあるが、日本語会話集には絶対に不要の一言だと思う。

塔をほぼ真上に見上げるところまでやって来て、ガイド嬢は、この塔は、ギユスタブ・エッフェルによって、一八八九年のパリ万博の際に建てられたとか、建設当初は、パリの景観を害するとの理由で、識者たちによる撤去運動があったとか、高さが三百メートル、重さが何ト

ン、ペンキが何万リットル、（そして、私たちが日本人であることに気づいて）東京タワーは、実は、これを模して建てられました・・・などと説明をしてくれていたのだと思う。

展望台に登るためのエレベーターは、塔の脚部に設置されている。脚部は、人と言えば、足を開いて踏ん張るようにして塔を支えているわけだから、そこに設置されたエレベーターは、垂直ではなく、脚部に沿って斜めに登って行くことになる。

ゲートの前は、相変わらず、人気テーマパークの入り口のような長蛇の列である。しかし我々は、強力な助手を得、本当に「スイスイ」という音が聞こえるくらいの勢いで、長蛇を尻目にゲートを通過し、エレベーター前に到着したのである。つまり、「第三の矢」は、本当に霊驗あらたかだったのである。

しかしながら、よく考えてみれば、ゲート近くにいる人たちは、半日以上も待って、「やれやれ、ようやく順番が回ってきた・・・」という人たちである。この期に及んで、鷹に油揚げをさらわれるような目に遭っているわけだから、こちらとしては、内心ではほくそ笑みながら

も、どことなく深刻な表情を作ることになる。

同じ時間にオフィスを出発したグループはいくつかあったし、別のツアー会社もあるだろうから、こうした「スイスイツアー」は、一度にかなりの数が動いていることになる。ツアー会社とエッフェル塔との間で、どのような契約が交わされていて、それがどう周知され、一般客がそれをどう受け止めているのか、知るよしもないが、小心者の日本人観光客としては、ゲートに並ぶ人たちの横っ面を、ユーロ札ではたいて順番を得ているように、居心地の悪さは否めない。

「スイスイツアー」では、下から順に、第一展望台、第二展望台とエレベーターで上ってきて、その都度ガイドが説明してくれるのだが、案の定、ほとんど理解できない。仕方がないので、以前手にしたフランス語の参考書の中に、第二展望台まで自転車で登った男がいて、かかった時間は十分だったとか、パラシュートをつけて展望台から飛び降りた青年がいたが、（パラシュートが開かず？）亡くなったとか、エッフェル塔は、何年かに一度塗り替えられるのでペンキ代が大変だなど、エッフェル塔にまつわるエピソードがあったのを思いだし、ガ

イド嬢はきつとそんなことをしやべっているのだろうと自ら補うことで、説明を理解したことにしたのだった。

第一展望台から第二展望台に登るエレベータの所で、一人、挙動不審な動きをする客のいたのが気になった。ガイドになにやら伝えて、グループを離れていったのである。英語の説明が分からないので別行動を取るということなら分からはなくはないが、英語で用件を伝えていたようだから、言葉が不自由とは思えない。「実は、自分は高所恐怖症なので、第一展望台より上には行けそうにありません。ですから、ここから戻ります」など泣き言を言っていたのかもしれない。もともと、高所恐怖症の人がエッフェル塔に登ろうと考えることはないだろうから、ガイドブックにもあった、スイスイ入場のためにだけツアーを利用する事例だったのかもしれない。

最上階の第三展望台は、三百メートルの塔の、ほぼ頂上にある。そこには、設計者ギュスタブ・エッフェルの仕事部屋が復元され、エッフェル自身が人形となつて置かれていた。当初、ここでは気象観測が行われ、その後、ラジオやテレビ用の電波発信にも使われていたと聞く。周囲を見回しても、近くに、電波妨害になるような高層

建造物は見当たらないから、今でも現役で働いているのかもしれない。

登ってしまったら、そこからの見晴らしに心は奪われてしまいが、下から見上げたとき、そこはとんでもない高さだったはずだ。その高さを感じないのは、そこが結構広く、相変わらずの人混みだからだろう。高さがある分、風が強かったが、空は薄曇りで、遠くまで（フランスの地理がよく分からないので、東京タワーを例にすれば、丹沢から筑波山の辺りまで）見渡すことができた。さっきまであった一抹の後ろめたさは何処へやら、「スイスイ」を使ってここまで登ってきたのは大正解だったと思う。

この街にいれば、常に、エッフェル塔を気にしながら歩くことになる。塔を目印にして、歩く方向を決めることがあるし、見えなければ見えないなりに、そのことが、自分たちの現在地を知るための重要な手掛かりとなる。

このように、常に眺める対象であったエッフェル塔も、この日ばかりは、塔の一部になることによって、私たちは眺められる対象になった訳であり、最上階をぐるりと回って、パリ全体を眺める対象としたのである。

下りは、第二展望台までエレベーターで降り、そこから先は歩いて降りることにした。歩くことに、まだそれほど困難を感じていなかったからということもあるが、私は、エッフェル塔の美しさは、その鉄骨の組み方にあると考えているので、できるだけ間近から、それを鑑賞してみたいと思ったのである。変哲のない鉄の構造物と言ってしまうえばそれまでだが、内側からの眺めには、外から見上げていたのとは異なった趣がある。塔を身近に感じるといったら良いのか・・・少なくとも、パリの観光案内で目にするお馴染みのエッフェル塔を表の姿とすれば、階段から見るとそれは、まさに裏側の世界なのだが、どうして鋼鉄の構造物がこんなにも優美なのか、しばし見とれてしまうのである。

こうして、ようやく妻は自信を持って、パリに行ってきたと口にすることが可能になったのである。

第二話 ノートルダム大聖堂

―または、土産物屋の不機嫌な売り子―

ときどき開くフランス語の参考書に、フランスで観光

客が集まる場所ベストテンが紹介されている。二位がルーブル美術館、三位がヴェルサイユ宮殿、四位がエッフェル塔となっている。こう書くと、じゃあ、一位はノートルダム寺院？・・・と言われそうだが、そうではない。名の知れた所としては、印象派の展示で有名なオルセー美術館が六位、第三話で取り上げる凱旋門は九位とあり、ノートルダムはベストテンには入っていないのである。だったら、なぜここで観光地ベストテンなど話題にしたのかと言われるのかもしれないが、それには、ベストテンに入っていないから、と答えることになる。つまり、ベストテンに入っていないことは、私に、ノートルダムはそれほど観光客が集まる場所ではないという先入観を与えたのである。

そんなことよりも、一位はどこか、早く教えて欲しいと・・・その要求には、ここで話題として取り上げる必要のない所、敢えてフランスに造る必要のない施設と答えておこうか。つまり、その施設に行くためにわざわざフランスまで行く必要はないような所と言えば、答えたも同然であろう。

話を本題に戻そう。何が問題だったかというと、ベス

トテン順位とは裏腹に、ノートルダムは大変な混みようだったのである。そのときには、まだ凱旋門には行っていないなかったので、第九位の混み具合は実感していなかったのであるが、ノートルダムは、その何倍も混んでいたのである。

もちろん、ノートルダムが人の集まる場所であることを知らなかった訳ではない。四年前に行ったときにも、聖堂に入るにあたって、正面の広場に長蛇の列を作った覚えがある。列は、朝の開門（開扉？）の前にだけ出来るのではなく、昼近くなっても午後になってもできていたが、ずっと待たされたという記憶はない。列はどんな建物に吸収されて行ったように思う。

立地から言って、ノートルダム大聖堂は、パリ誕生の地にしてパリの中心部、シテ島にあり、どちらかというと町外れに位置する凱旋門より何倍も人の集まりやすい所にある訳だが、そこがなぜベストテンに入っていないのか、不思議と言えば不思議なのである。

帰ってから、改めて参考書を見て分かったことだが、ベストテンについては、「大聖堂・教会を除く」との但し書きがついていた。これを見落としていたのである。

きつと、ベストテンは、チケットの販売枚数を元に算出しているのであろう。大聖堂・教会は、どこも原則的に入場無料である。心に留めておかねばならないことは、ベストテンに名前を連ねていないからといって、人が集まらないことを意味しているわけではないということである。

薄暗い聖堂内を一周して、入り口近くまで戻って来たところで、聖堂訪問の当初の目的である塔への登頂を試みようとしたのである。前回来たときには、塔の上に登れるということを知らず、聖堂だけを見て帰ってしまったので、今回は、何としても登りたいと思ったのである。「パリ・ミュージアム・パス」を用意したのも、ここへの入場を考えてのことであつた。こう書くと、不思議に思う方がいるかもしれない。大聖堂・教会は無料のはずなのに、なぜパスが必要なのかと。この点については、私見であるが、聖堂への入場と塔への入場は、同じ建物に対する行為ではあるが、別扱いと考えているのではないだろうか。要するに神様に接する場と周囲の景観を眺める場とは、全く別物ということである。

大分寄り道が長くなってしまった。私たちは、塔への登頂を急ぎたかったのである。しかし、肝心の入り口が見つからないのだ。ガイドブックを見ると、入り口は、聖堂に向かって左側の手前、聖堂内を一回りしてきた私たちが立っているすぐ近くにあるはずなのだが、案内板一つ出ていないのである。

私たちが立っていたすぐ近くに土産物の売店があったので、客足の途切れた隙に、塔の入り口はどこにあるのか聞いてみたのである。すると、年配の売り子の女性は、「ああ、またその質問・・・一体全体、一日に何人相手をしなければならぬの!」と言わんばかりの顔つきで、手元にあった、商品を入れるための紙袋を私の前に差し出したのである。そこにはボールペンで、「塔への入り口は、聖堂の外」との走り書きがあった。私の質問を受けてから書いたものではない。重要な接客ツールとして、毎日使っているものに違いない。紙袋はかなりのしわくちゃ状態だったから。もちろん、私の注目は、しわくちゃな紙袋ではなく、無愛想でつつけんどんな売り子の表情に向いてしまう。ああ、この人に尋ねてはいけなかったのだ、と思ったのだが、とき既に遅しであった。

しかし、落ち着いて考えてみるに、聖堂の中をぐるっと回って来て、塔への入り口を探そうとすれば、とりあえず彼女に聞いてみるというのは、極めて自然なプロセスなのである。なぜなら、聖堂入場は無料なので、チケット販売所もなければモギリのお姉さんも、腕に腕章をつけた「案内係」のスタッフもないのである。近場の関係者と言えば、売店の売り子ということになるのだ。しかも、後で分かったことであるが、塔への入り口は、売店とは壁を一枚隔てた所にあるのである。

私は、こちらの都合を優先して彼女を選んだわけではなく、彼女の仕事の邪魔をしないように、タイミングを選んで声をかけたつもりである。それにも拘わらず、この邪険な仕打ちは何なのか。

しかしながら、もう少し考えてみると、塔入り口の案内を彼女にさせておくのは適切なことではないというところが分かってくる。私を邪険に扱った女の肩を持つつもりはないが、彼女の本業は売店の販売員であり、案内係ではないのだ。

そのことは理解した上で、敢えて言っておきたい。もし、塔への案内が本業ではないのなら、その思い

は、私たち観光客ではなく、ここの管理者に向けるべきではないか。そして、管理者には、観光客が塔への入り口を売り子に聞かなくても済むよう、分かり易い案内板を用意すればいいのである。観光立国でありながら、そうした、細かい所とか、観光客の立場になつて考えるということが欠如しているように思えるのである。どうしても、見に来ていただくという姿勢ではなく、見せてやるといった態度が気になるのである。

売り子の仏頂面に押し出されるようにして外に出て、建物の角を回ったところで、塔入場がすっかり遠のいたことを知ったのであった。塔への入り口が見つからなかった訳ではない。お世辞にも立派とは言えない、つまり、裏口か関係者の通用門といった風情の鉄製の小さな門が、あることはあった。問題は、その門の大きさに対して、入場を待っている人の数がまさに桁外れだったのである。聖堂に沿う、幅五・六メートルの歩道には、人の歩く余地のないほどに、行列ができていて、その長さは聖堂の建物とほぼ同じ長さ、優に百メートルはあったろう。

何はともあれ、列の後ろについてみたのであるが、列

は遅々として進まない。時折、思い出したように動くことはあるが、それは、どんどん入場させているからではなく、あきらめた人が離れていくことによる前進というのが正しい認識だろう。三〇分ほど列の中にいたが、この様子では二、三時間待っても順番は来ないだろうと、昼も近かったので、すぐ目の前のカフェに入つて様子を見ることにしたのである。

食事を終え、コーヒーが済んでも、列にはそれほどの動きはないようだった。列を離れる前、私たちの近くにいた家族らしき一団は、列の半分までも来ていなかった。先にも記したように、ノートルダム寺院はそれほど混んでいるとは思っていなかったのである。他に行きたいところがないわけでもないで、この日は塔からの展望はあきらめて、他を回ることにした。登頂には戦略の立て直しが必要だった。

大聖堂から歩いて五分もかからない所、セーヌ川に架かる大きな橋のたもとに、コンシエルジュリーという、かつて監獄として使われていた建物がある。ここでもミュージアム・パスが通用する上に、地味な施設だけあつ

て入り口には誰も並んでいないのが嬉しい。こちらとしては、塔見物に代わるべき施設を探していたのであるが、実は、その裏で、次回の「塔攻略」に向けて、ちよつとした布石を打っておこうと思つたのである。

地味な施設と言つたけれど、どう飾つたつて監獄は監獄だから、開放的ではないし、だいたいイメージが良くないので、是非とも尋ねてみようという気にはならない。フランス革命の際には、かのマリー・アントワネットは、ここにしばらく監禁されたあと、断頭台に送られたとのことだから、彼女のファンなら話は別だろうが、ベルサイユに行つてしまえば敢えてここを訪れたいとは思わない。三年前、大聖堂を見物した後、ステンドグラスで有名な、隣のサント・シャペルには寄つたものの、ここは素通りだった。今回は、その、誰も行かないであろうところだが、狙い目だったのである。

カフェで昼食をとつて、出るときにトイレは済ませたので、心配するほどのことはなかったのだが、ヴェルサイユの一件（「琅」第三十号参照）以来、私たちはかなり過敏になつていた。これからホテルまで戻らなければならぬので、ここでもう一度体内の水分調整をしてお

いたほうがいいだろう。それに、ノートルダムには、改めて来なければならないので、そのための下調べも必要である。なぜ、ノートルダムに行くのに、そこから歩いて五分ほどの施設での下見が必要なのか・・・ノートルダムには「それ」がないからである。

コンシエルジュリーの「それ」は、入つてすぐの大広間の先に、すぐに見つけることができた。私の、数少ない経験からではあるが、訪れる人が少ない割には、ここは数的には充実していると思われた。パリでの「それ」の設置は、施設利用者の数によつてではなく、「それ」に適した場所があるかどうかによつて決められているように思われる。数的な充実もさることながら、訪れる人が少いので、使用頻度も少ないのだろう、清潔さが保たれているように見受けられた。この在処と使用状況を確認することが、重要な下調べだったのである。

年を取るに連れ、思い込みが強くなり、そのための間違いが多くなつて、迷惑をかけるが増えたと、機会ある毎に、身近な人たちに伝えてきた。それはパリに来て後も変わらない。

ノートルダムからの眺望を得るには、もっと早い時間から行動を開始しなければならない、これが私たちのたどり着いた戦略である。この考え方自体は間違えではなかった。早い時間というのは、具体的には開門前ということになる。開門は九時・・・いつ、そうインプットされたのか覚えていないのだが、私の思い込み時計ではそうになっていた。前日、大聖堂を離れるとき、わざわざゲートの表示板をカメラに収めたのだから、それを再生すれば、正確な開門時間は確認できるのであるが、思い込みは、カメラよりも強いのである。

地下鉄を乗り継いで、八時半過ぎには、ゲート前に到着した。前日、大デモ行進の一団かと思われるほど、歩道を埋め尽くしていた人の波がウソのように、数えてみると私たちは先頭から十一番目である。「早起きは三文の得」の諺は、ここフランでも通用すると見たのだが、しばらくしても、なかなか後ろに人が並ばないので、まさか、休館日ではあるまいと、入り口の看板を確かめると、休館日ではないが、開館は十時―十八時半とある。前日の葉が効きすぎたと言えいいのか、「過ぎたるは及ばざるがごとし」と言えいいのか、かなり無駄を含む

んだ動きだったことに違いはないが、先頭から十番目というのは、負け惜しみではなく、かなり感動的な順番だったと言える。

その感動については後で記すことにして、先に、もう一つの感動話を記しておこう。

夏とはいえ、早朝のパリは結構冷える（前日入ったカフェのお兄さんも、今年の低温は異常だと言っていた）。道ばたの縁石に腰を下ろしていると、すぐにお尻がひんやりとしてくる。下半身が冷えてくれば、当然、生理的な欲求が生じてくる。いよいよ、前日仕掛けておいた布石がものを言うときである。少し長くなりはじめた列に家内を残し、一人、コンシエルジュリーに向かったのである。

建物の前に誰も並んでいないので、こちらも開場前かとちよつと慌てたが、ただでさえ訪れる人の少ない上に、開館直後だったようだ。ここでも、例の第二の矢「ミュージアム・パス」が通用する。中に入れば、目指すところは前の日に確認済みである。敢えて見物客を装うようなことをしなくとも、誰にとがめ立てされることもなく、用を済ませることが出来た。

「ミュージアム・パス」のこうした利用法は私の創案によるものではない。パスを購入する際に見ていた、ネットかガイドブックで知ったのである。そのときは、特に気に留めてはいなかったのだが、アドバイス通りにやってみて、この利用方法は、もともとずっと大々的に宣伝すべきと感じた次第である。

先に、先頭から十番目は感動的な順番だったと述べたそれは、以下のような理由による。

入ってみて分かったことだけれど、ノートルダム寺院の聖堂は一度に何百人、いや、何千人もの人が入れるくらい広いが、塔の部分はそれほど広いものではない。展望台は、ビルの十階ほどの高さまで、狭い石の螺旋階段を上って行った先にある細い通路のような所で、一度に入れる人数は限られている。しかも、一端入ってしまったら、時間制限があるわけではないので、心ゆくまでパリ俯瞰を楽しむことになる。前日、入場待ちの行列に並びながら、どうしてもっと、どんどんと入れないのだろうと思ってたのだが、入ってみると、その理由がよく分かる。厳密な一対一対応となっているわけではないだろうが、入った人が出て来ない限り、次の人は入れない仕

組みになっているのだ。

展望台を歩いていると、ビクトル・ユゴーの小説「ノートルダム・ド・パリ」（私が子どもの頃、この小説が映画化され、日本で上映されたときの題名は、『ノートルダムのはせむし男』だった）の一節が掲示されていたので、後でゆっくり読もうと写真に撮ったつもりだったが、なぜか完璧にボケていて、読めるものではなかった。

帰ってから、その文庫本があるかと思つて探したが、今は出ていないようなので、やや高めではあったが、ユゴー全集の一冊を注文して読んでみた。そのあとがきに、「ユゴーの最初の傑作小説」と出ていたが、十九世紀のロマン主義文学を「傑作」として味わうためには、いささかの準備が必要と感じた。

小説の初めの方に、「ノートル・ダム」「パリ鳥瞰」と題された節がある。ここは、小説の舞台を説明している重要なところで、ユゴー自身、「私はこれまで、パリのノートルダム大聖堂の昔の素晴らしい姿を、みなさんにお伝えしようと努めてきた」と記しているように、丹念に書き込んでいると思う。こちらにも、実際に塔への石段をこの足で踏みしめ、この目でパリ鳥瞰をしてきたこ

とでもあり、どのように描かれているか、楽しみに読み始めたのであるが、小説が書かれたのが、今からおよそ二百年前、物語は、さらにそれから三百五十年も前のことである。当時から変わらないのはセーヌの流れくらいで、エッフェル塔も凱旋門もサクレクール寺院も、影も形もない時代のことなのである。昨今流行の、「江戸古地図の旅」さながら、パリの古地図を片手にしながらでないと、よく理解できないのが正直なところだ。

最上階まで登ってきて、まだそこに大きな鐘が残されていることに気づいた。「せむし男」の鐘番・カジモドが撞いていた鐘である。小説には、「・・・大ミサの日といえば、鐘楼からは鐘の音が響き、また結婚式や洗礼式の日には、小さな鈴を振って、ゆたかな音階を奏で鳴りわたったものであった。そして空中には、ちょうど刺繍模様のように、妙なる音という音が縦横に入り交じるのであった(二六一頁)。」とある。

それにしても。身長百八十cmの私が立っただけでもすっぽり入ってしまうような大きな鐘である。クレーンのない時代に、ここまでどうやって上げたのか、昔の人は偉かったと思う。

塔から下りて、念のために、上るときに入ったゲートの前まで行ってみた。朝、時間間違いをして、ひどい無駄をしてしまったかと思っていたのだが、改めて「三文の得」を実感し、溜飲を下げたのである。前日同様、世界各地のからの旅行者(この中には、売店の売り子に場所を尋ねた人も居るのだろうか)が、文句一つ言わず並んでいる。でも、遅く来たらそういうことになるのだ。一度に入れる人の数には制限があるし、入ってしまったら、申し訳ないけれど、門の前でどれほどの人が待っているかなど、これっぽっちも考えはしないから。だから、文句を言いたくなかったら、八時半には来て開場待ちをするしかないのだ。ここだけの話だが、「ミュージアム・パス」より「早起きパス」の方が断然有効なのだと言っておこう。

第三話 凱旋門

— または、記憶という創作行為 —

「冒険者たち」という、古い映画をご存じだろうか。アラン・ドロンとリノ・ヴァンチェラが主演し、二人から

思いを寄せられる相手役をジョアンナ・シムカスが演じた映画で、ジャンルとしてはアクション映画の範疇に入るのだろうが、私にとっては、個人的な淡い思い出につながる青春映画である。我が国での最初の上映は、一九六〇年代の終わり頃ではなかったか。海に浮かぶ要塞のような建物を空から俯瞰するラストシーンが印象的だった。それと、口笛をモチーフにした哀愁に満ちたテーマ音楽が何ともせつなく、今でも耳によみがえってくる。

友人たちにそのかされたのが始まりだった。アラン・ドロン扮する曲芸飛行のパイロットが、凱旋門のアーチの下を軽飛行機でくぐり抜けるというのである。私は、長いこと、飛行機がアーチをくぐり抜けるのを見たと思いつ込んでいた。しかし、よく考えてみれば、くぐり抜けるに成功したパイロットが大金をせしめたという展開ではなく、むしろ、次の儲け話に乗り出すことが、この映画のメインストーリーだったはずだから、「凱旋門はくぐり抜けなかった」と考えるのが合理的なのだが、一度思いついてしまふとなかなか改められない。

初上映から三十年以上も経って、リバイバル公開があった。テーマ音楽を聞くだけで、甘酸っぱい気持ちがあった。

よみがえってくる。映画が始まって間もなく、凱旋門を模した空間を、飛行機がくぐり抜ける練習シーンがあり、その段階ではくぐり抜ける試みは成功していた。そして本番、飛行機は爆音もけたたましく、凱旋門に向かう。しかしながら、目標が目の前に迫ったとき、飛行機は急旋回し、空の彼方へ飛び去ってしまった・・・。

凱旋門とは全く関係ない話であるが、この映画に関して、私にはもう一つの記憶違いがあった。ヒロインのジョアンナ・シムカスが身につけていた白いビキニの水着が、目にも鮮やかだったと記憶していたのだが、私が白と思っていたのは、実際は青いビキニだった。水着姿は何度か出てきたように思うけど、白い水着は一着もなかった・・・と言う具合に、人の記憶は心許ない。いや、心許ないというより、記憶は、自分の都合の良いように、積極的に作り替えている創作行為なのではあるまいか。

日本を出る前に散髪に行ったときのことである。私がパリ行きを口にする、この半世紀近く、私の髪の毛の世話を焼いてくれているI氏は、昔、同業の美容師仲間とフランスに行ったときのことを、懐かしそうに話し出した。実は、I氏からフランス旅行の話聞くのは、これが

初めてではない。前回のパリ行きに際しても、武勇伝とともに、二、三のお勧めポイントを紹介してもらった覚えがある。その中に、凱旋門も入っていたのだが、彼の話の中に一ヶ所腑に落ちないところがあり、こちらの聞き間違いだったかもしれないと思って、確かめてみよう和水を向けてみたのだが、彼の答えは変わらなかった。仲間たちとシャンゼリゼ大通りを歩いてきて、そのまま道路を突っ切って凱旋門に登ってきたというのである。こちらの聞き間違いではなかった。

前回、私たちは凱旋門に登ることはなかった。登らないどころか、そのアーチの下にも行けなかった。朝、空港で乗ったリムジンバスが着いたのが、広い道路を挟んで目の前に凱旋門を見るところだった。到着したばかりだし、荷物もあることなので、またすぐに来られるだろうと、タクシーでホテルに向かったのだった。そのとき、本当に、この交通量の激しい道路を、I氏は突っ切って行ったのだろうか？と疑問を抱いたのだが、その疑問を晴らさないまま、帰国することになってしまったのだった。少々、横道に逸れるが、昔、私がフランス語を習い始めた頃に使っていた教科書には、確か、凱旋門はエトワ

ール広場にあると出ていた。今、ガイドブックを開くとそこは、シャルル・ドゴール広場となっている。調べてみると、一九七〇年に名称の変更があったとのことだ。私がフランス語を学び始めたのは、ちょうどその年の春のことだった。広場は、ドゴール元将軍・元大統領の生前の功績を称えての改称だろうが、その正確な日取りがいつなのかは分からない。はつきりしていることは、改称は、私が使っていた教科書の出版には間に合わなかったということである。

地図を見ても、実際に行ってみても、ここがエトワール広場と呼ばれていた理由がよく分かる。広場を起点に、大通りが四方八方に延びていて（正確には八方ではなく、十二方と言うべきだが）、その形が凱旋門を中心に、星《エトワール》のように見える。肝心なことは、ここは交通の要所であり、車の流れは途切れることはなく、ここを突っ切るということは、凱旋門に命を捧げることの意味する。ガイドブックには、凱旋門へは、地下鉄の駅やシャンゼリゼ大通りから、地下道でつながっていると説明が出ている。I氏だって、絶対に地下道を使ったはずである。彼のフランス旅行は、たかだか十数年前の

こと、優雅に馬車が走っていた時代ではないのだから。そこで、二度目のパリ旅行から帰って散髪に行った折り、再度、いや再々度、I氏の思い違いを質そうと試みたのだが、彼の答えは変わらなかった。一度書き換えた記憶を元へ戻すのは難しいことなのだ。

ああ、凱旋門を前にして、地面を這いつくばっている場合ではなかった。私たちは、そこに登らなければならぬのである。

地下鉄を降りて地上へ出たとき先ず感じたのは、著名な施設にも拘わらず随分と辺鄙な所にあるな、という印象だった。辺鄙はちよつと言い過ぎかもしれないが、街中のホテルから随分と時間がかかったこともあり、落ち着いていると言えば聞こえはいいが、どことなくうら寂しい印象を受けるのである。ルーブル美術館やオペラ座などに漂っている華やかさに欠けると言えば当たっているだろうか・・・。

凱旋門の足下でうごめいているのが人間だと気づくまでに、地下道から出て、ほんのわずかだが時間がかかった。そこに色とりどりの小さなものが動いていることに

は気づいていたのだが、門に較べてそれがあまりにも小さかったので、直ぐには人とは思えなかったのである。

我が国で大きな門と言えば、東大寺の南大門か、南禅寺の三門くらいしか思い浮かばないが、木造りと石作りの違いなのか、同じ機能を果たす建造物とは思えない。もっとも、「門」とは言いながら、ここの門は、教会やお城など、どこか特定の施設に入るための門ではないから、同じ機能という言い方が、そもそもおかしいのかもしれない。

昔、使っていた教科書はパリの観光案内を兼ねたような作りになっていて、そこには、この門は直訳すれば「勝利のアーチ」を意味すると出ていた。「門」と言わず敢えて「アーチ」と言っているのだから、これはナポレオンの戦勝を記念するためのモニュメントというのが第一の機能で、「門」はつけ足しに過ぎないのだろう。

その「門」に関して言えば、これは特定の施設に入るための門ではないと述べたが、そこに行ってみて、これは、パリに入るための門だったに違いないと思うのである。

そう考えれば、この門が、街の中心部からいささか離れた辺鄙な所にポツリと建っている理由も納得できるので

ある。

ここに来たのは、映画と現実をつなぐため、大げさに言えば、「冒険者たち」をこの目で確かめである。そして、あの軽飛行機だったら、ここは十分通り抜けられると確信したのだが、やはり、物語の進行上、ここは直前で急旋回しなければならなかった・・・。

朝、雨が降っていてホテルを出るのを見合わせていたために、いささか遅い到着となったが、ここは町外れの、行きにくい場所ということになるのだろう、観光客はいることはないが、それほど混みようではなかった。チケット売り場に、多少の列はできていたものの、ミュージアムパスが「スイスイ入場券」のように働いて、列を尻目に、螺旋階段に取りつくことができたのである。

ぐるぐるぐるぐると螺旋階段を上るのはノートルダムと同じである。作られた時代がそういう時代だから仕方がないのだが、どちらにも、エレベーターもエスカレーターも設置されていない。足が不自由だったり、階段を上ると動悸息切れが激しくなる人には、面白くない施設ということになる。螺旋階段で目を回しながら、この次にここに来たときには、自力で登れるのだろうかとか心配に

はなるが、ここにエレベーターをつける訳にはいくまい。

凱旋門の本質とは関係ないことであるが、ここで意外な体験してきたので、ここに記しておこう。人の集まる有名観光地で、常に不便をしてきた例のことだが、ここ凱旋門には、信じられないような所に、つまり、展望台のすぐ下の階に、立派なそれがあるのだ。さすがに、そのものズバリを写真に収めることはしてこなかったが、壁にあった、青地を背景にした白ヌキでの男女の人型の表示のみ撮ってきた。わざわざ、こんな高みに作らなくても良さそうなものと思うのは、私だけだろうか。まあ、上から流れ落とすだけのことから、特別な技術は必要としないだろうが、これを「門」の中に作るという発想が、私には分らない。「なぜそこに、それを作ったのか？」と問えば、この人は、きつと「そこに、それを作るスペースがあつたから」と答えるに違いない。

補遺

― 空からのパリ 総集編 ―

帰りの飛行機は夜八時過ぎの便なので、最終日丸一日、

パリの街を楽しむことができる・・・とはいっても、一週間もいればさすがに飽きてくる。マドレーヌ寺院に行くことにしたのは、近場でまだ行ったことのない所ということもあったが、その直ぐ近くにある老舗のジャム屋（エデュアル本店）をのぞいてみたかったからだ。エデュアルは、伊勢丹にも入っているので、わざわざこの地で重い瓶入りジャムを買うこともないのだが、私の欲しい品が相次いで輸入されなくなってきたので、事の真相を見極めたいと思ったのである。しかしながら、マドレーヌ寺院は二の次などと、神様をないがしろにしたバチがあたったのだから、「改装のため閉店中」の貼り紙が、私たちをやりわりと戒めていた。

そのまま、本店をやり過ごし、ウインドショッピングをしながら（途中で、羊羹の「とらや」の暖簾を見かけたのは、このときではなかったか）、ホテルの近くまで戻ってきて、デパートの屋上で昼食を取ることにしたのであった。

はじめからそこで食事ができると思っていた訳ではない。トイレを借りる目的で、それまであまり利用したことのないプラタンド・デパートに入ってみたのである。

食事の前に恐縮だが（と言っても、昼食を取るのは私たちだからかまわないか？）、このトイレについてちょっと説明しておこう。

場所はデパートの二階、高級時計店の奥である。結論から言うと、有料ではあるが、パリで入ったトイレの中で、最も生理的かつ視覚的欲求に叶ったのがここだった。そこは、トイレというより高級衛生用品の展示コーナーかトイレメーカーのショールームといった感じだった。フロントに、しつかりした格好のマドモアゼルがいて、一人一・五ユーロの料金を徴収しているが、決して高いとは思わない。何がしつかりした格好かというと、彼女が身につけていたのは、私服ではなく制服で、その色とトイレットペーパーが、紫色で統一されているのである（他の色のペーパーのときにはそれにコーディネートさせるのかは分からない）。しかも、そのペーパーには、エッフェル塔が印刷されているところも泣かせる。もともと、「生理的・視覚的欲求に叶う」と述べたが、我が国では、「無料」でも、紫色とエッフェル塔はともかくとして、この程度の清潔さのものは特に珍しくはないことは付け加えておこう。

気になることが一つあった。私たちが出た後すぐに、フロント嬢が中の確認に行つたように思うのだが、気のせいだろうか。西洋式トイレの使い方を知らない無教養な東洋人が、乱暴な使い方をしたのではないかと疑われたような気がして、少しへこんだ。この人たちにも、トイレに関して、使い易さ、衛生的、美しさなどの概念があるのなら、どうしてそれをもっと日常的な場面に適用しないのか、不思議に思うのである。

寄り道が長くなった。デパートの入り口にあった案内板を見て、屋上に食事スペースがあることを知つたのだ。そこは、買い物客相手の軽食レストランといった感じのところ、サンドウィッチやサラダ、飲み物をプレートに載せて、会計を済ませば、好きなところに席を取つてかまわない仕組みになっている。天気も良いので、屋外の日陰にあるテーブルに着いた。

デパートは五―六階建てだが、高さ制限のあるパリでは、この高さでも市内を一望することができる。エッフェル塔は第一展望台から上が見えている。凱旋門はアーチの上部から上がわずかにのぞいている程度で、よく見ないと見落しそうだ。ノートルダム寺院は、オペラ座

の背後に隠れてしまつて見ることはできない。何度となくお世話になつたサンラザール駅は、上からみるとこんな風に見えるんだと、再発見をしたような気分になる。

昼食を取りながら、今回の旅の総集編のように、空中パリ観光を満喫したところで、潔く旅をおしまいにすべきところだが、そこが貧乏性のなせる技、最後にもう一軒！ということで、目の前に聳えているモンマルトルのサクレクール寺院まで足を伸ばすことにしたのである。

家内が、食べたものの片付けに席を外しているとき、買い物途中と思われる地元のご婦人が二人、隣に席を取ることになった。何と言つたのかは覚えていないが、東洋人が片言のフランス語で挨拶をしたのが意外だったのか、家内が戻つてきたのを見て、夫婦連れなら安全と踏んだのかわからないが、「フランス語、お上手ですね」と話しかけてきた。ここをチャンスとばかり、話を盛り上げられればいいのだが、そういった才覚には、日本にいるときから、いやいや、若いときから欠けている。「パリにはいつまで？」「今日まで。」「飛行機は何時？」「二十時。」といった全く気の利かないやり取りをしていることに気づくのだが、こういうときは、どう

という展開に持ち込むといいのか、いや別に、そのご婦人とどうこうなろうというのではないんだけど・・・。

サクレクール寺院も、パリの至る所から眺めることができる、いわばエッフェル塔に並ぶこの街のランドマークである。寺院は、モンマルトルの丘と呼ばれる丘陵地帯にあるので、別にそれ以上登らなくても、パリを一望できるのだが、展望台ときくと、胸が騒いでしまう。ノートルダム寺院で苦い経験をしたので、その二の舞は踏むまいと、つまり、売り子に展望台の入り口を尋ねるようなことはすまいと思つたのである。ノートルダムでの経験が生きていたとでもいえないのか、この辺と思つた辺りに、展望台への入り口はあつた。

しかしながら、結論から言うくと、サクレクール寺院の展望台には登らないで帰つて来た。モンマルトル自体が高ところにあるからということもあつた。あちこち登つて、やや食傷気味ということもあつた。時間も気になつてきて、外からはそれほど混んでいるようには見えなかったが、入つたら上まで階段ぎつしりに人が並んでいた、ということ想像したせいもある。

帰つて来て知つただけど、この寺院は完成してま

だ百年ほどしか経っていない、パリの建物としては新参モノとのことである。もともと、普仏戦争の犠牲者を慰めるための施設として着工されたが、難工事で工期が延び、完成した時には、第一次世界大戦の犠牲者を慰めることになつたとのことである（鹿島茂 二〇〇〇年）。

この次来たときには、この展望台を攻略することから旅を始めることにして、丘を下りてホテルに向かつた。

引用・参考文献

ヴィクトル・ユゴー（辻昶、松下和則 訳）
「ノートルダム・ド・パリ」 二〇〇〇年
潮出版社

鹿島 茂 「パリ・世紀末パノラマ館」 二〇〇〇年
中公文庫

エッセイ

たかが川柳されど川柳（七）

上野 一彦

老人ホーム考

一五年も前のことであった。大先輩であり、国際的な心理学者でもあったS先生夫妻が、都内の高級老人ホームに入居し、その優雅な生活のありさまが新しい老後の生き方としてTVで放映された。偶然、その番組を目にした私は、どれくらい財産があればそんな決断ができるのだろうと思いつつも、「でも老人ホームは老人ホーム」という固定観念が、正直、どこかの奥底にあった。

その後、先輩たちの中に、かつての学者村的な別荘熱

の流行りのように自宅を処分し夫婦で介護付き老人ホームに入居する例をよく耳にするようになった。それが子供孝行でもあるという。大家族から核家族へと変化した今、それも妥当な一つの選択肢になってきたということであろう。世界有数の出生率の低さが国力の陰りとなっており、子育てのしやすい国であることの大切さが言われて久しいが、もう一つ、老人が安心して歳をとることのできる国であることについては、かなりおざなりな施策展開であることに、昨今の政治家のイメージ力の貧困さを実感する。

たまたま手にした「ロスト・ワールド」ならぬ『ロスト

・ケア』（葉真中顕著、光文社文庫）は介護をテーマにした衝撃のミステリーであった。流行作家というものは時代の抱える課題を先取りすることに対し一種の鋭敏さをもつ発達障害というジャンルで仕事をしてきた私は、古今の小説の中でそれらの題材が上手に取り込まれていることをしばしば実感してきた。

誰もが逃れられない「老い」、その最後をどう迎えるか。それこそ究極のテーマであり、宗教の源でもある。中学生の頃、母親の本棚に見た深沢七郎の貧しい山村の姥捨ての風習を描いた短編「檜山節考」もそうだった。今や家族介護は神話となり、自己責任として認知症になる前の判断が自らにも問われる。

定年後、年金生活だけでは夢見た豊かな老後が保証されないことは自明となり、まだ自分たちは何とかなっても次の世代はどうなっていくのだろうと心が痛む。マイナス金利の中で、デフレ脱却だけが豊かさへの近道だと、心を感じさせないあのロボットのような口調の政治家たちはいったい何なのだろう。一〇年前、母を看取った後、今は父と義父母の三人をホームに抱える。家族に介護が必要になったところが、今や自分や妻に介護が必要になった時が現実の延長上にある。



（四季は巡る カラマツ 上高地にて）

話題を『ロスト・ケア』に戻そう。まず、冒頭の「天国と地獄」では、老人をめぐる「えげつない格差」が提示される。「天国」は佐久間の紹介で大友の父が入った富裕層向けの老人ホーム。インターネット回線から天然温泉までさまざまな設備が整っていて、二四時間の完全介護も付いている。一方で、八賀市で暮らす洋子は、自分を取りまく世界を「まるで地獄だ」と思っている。幼い息子をひとりで育てながら、母の世話をしなければならぬ。優しかった母は娘を「ケダモノ」と呼び、頻繁に暴れる。

在宅介護も短期間なら可能だろうが、その認知症の進捗と介護の期間は、美談を悲劇に変える。そんな折、巷では某知事の辞任が話題になった。母親を介護したと大言壮語し、それを福祉の専門家であるかのごとき姿勢で知事にもの上がったが、すべてが虚像であった。

週刊誌のリンクも恐ろしいが、オリンピックまで続きたいとあの手この手の連発には、「せこさ」を超えた哀れささえあった。天網恢恢疎にして漏らさずである。「せこい」はそのまま英語にもなったとか。この話題をネタにいくつか句にしたが、いずれも出来は良くない。題材悪ければ句も然りといったところか。次回に紹介する、一七文字の破調句は誰からも評価されなかった。

リオ五輪セコイも辞書で参加する

天知る地知る文春知る人知る

いずれにしろ老人問題は、自分自身も避けて通れないことであり、認知症で判断できなくなる前にコースを選択しておきたいと、わが家では目下、資料を収集し検討中である。

老人をテーマに二句。

食って寝て好き放題に言い放つ

ヘクションと所構わずご老体

障害考

ISを標榜する自爆テロなど、世界のいろいろな国で爆弾や銃によるテロが横行する悲しいニュースがあふれる。

わが国では、神奈川県にある社会福祉法人が運営している知的障害者の入所施設で、障害のある人たち一九人が殺されるという悲惨な事件が起きた。容疑者として逮捕されたのは、施設で働いていた男性で、「障害者はいなくなればよい」ということを犯行前に語っていたという。

私はこの言葉を聞いて、自分の若い頃のことを思い出し

ドキッとした。私には重度の障害をもつ弟がいた。日常、兄弟げんかもしたし、一緒に生活する分には何の抵抗もなかった。しかし、家族で外出したり、学校に行くようになってからは、人を介して、弟の平常ならざる存在についていやというほど思い知らされた。

私が教育相談中、特に発達障害の相談などで、「障害のある子供はもとより、障害のない兄弟、姉妹にも気を使いなさい」とあえて保護者にいうのは、こうした私の育ちからの受戒がそこにはある。

両親、特に母親はこの弟のために自分を犠牲にしてあらゆる愛情を注ぎつくした。幼い私は弟に嫉妬もしたし、親の目を盗んで意地悪もした。親からは過度の期待を感じつつ、「おまえはちゃんとしている」からと、療育に連れまわされる弟の留守にいわれ続けた。おまけに周りの人々から弟のことをなにか言われるたびに、それが同情的な言葉であっても、「この弟がいなければ」、「みんなと同じような兄弟なら」と思うこともしばしばあったことを苦く思いつく。

自分が進路を決める時期がくるころには、弟のこととは全く無縁な道を歩もうと思ったことも確かにあった。私が宗教に関心を寄せたり、一九歳の時、教会で受洗したりし

た背景にも、逃れられぬ宿命の網をどこかに感じていたからかもしれない。親は自分の好きな道を歩めばよいというばかりではあったが、医療や教育の道へのひそかな期待をやはり感じないわけにはいかなかった。大学で、三木安正という戦後の障害児教育の先駆者の教室を選んだこともそうした誘いの一つではなかったろうか。気がつけば、障害を持つ人々を支援する今の仕事に否応なく取り込まれていった気がする。

そして、ある日、自分は弟や、弟を思う親に自分の生きる道を示され、導かれたのだということをはっきり知ることとなった。その弟も五〇歳で亡くなったが、私にはかけがえない肉親であり、かけがえない先達であった。今日、障害にかかわる支援の仕事を天職としてきたことに、改めて弟に感謝する自分がいる。

障害のある人々との付き合いの中でたくさんのことを学んだ。大学に勤め始めたころ、地域で、訪問巡回相談の仕事もしていた。重度の障害があつて学校にいけない寝たきりの子供さんの家庭を小学校の先生と訪問し、子供さんと関わり、親御さんの相談にのる仕事であつた。相談にのるなどと偉そうなものいいだが、実際には、そのご家庭、ご家族からたくさん私自身を教えられた。

子どもの世話で旅行一つできなかった母親が、自分の親の納骨のために数日間、初めて子供から離れ、郷里に出かけた時のこと、重度の障害でしゃべることもなにもできないその子が、医者にもよくわからない原因不明の熱を出した。もの言えぬ子供であっても、母の不在を全身で感じ取り、不安から身体の不調をきたしたのではないかとの診たてであつた。

その子供が、中学生の年齢になった頃、短い生涯を終えた。親御さんのそれまでの長い献身的な苦勞を見てきた私が、「お母さん、これからはお母さん自身の人生を生きると天に召されたのでしょね。」と慰めの言葉をかけたところ、「それでも生きてほしかった」と泣きながらいわた。この子が母親の生きがいであつたことを、痛切に思い知らされたのである。死んでよかった子供などどこにもいないのである。

この歳になると、周りで似たような歳の方の逝去の報に接することが珍しくなくなった。ひと月ほど前のこと、中学校からの友人で、青春時代を共に生き、卒業後は新聞記者をしていたひとりの仲間を亡くした。定年を目前にした一五年前、若天性アルツハイマーを発症し、在宅介護が難しくなり八年前施設に入所し、最後は寝たきりのままで

あつた。

その長い闘病期間、必死に看護してきた奥さんに、「彼も本当によく頑張つた。今はゆっくり休んでほしい。でもこの言葉は、彼が一番奥さんに言いたかつた言葉かもしれない。」と思わず言つてしまった。

先日、もう施設に行かなくていいんだという現実にかえつて戸惑い、寂しく思つているということを彼女から聞いた。親子も、夫婦もその絆の深さは周りからはわからないということを改めて知つた次第である。

障害者を大切にすることとは、子供を、老人を、人間を大切にすることであつて、だれだれは必要、だれだれは必要という考えは、世界の歴史の中でも危険で誤つた考えであると確信する。このことを多くの人々と共有したい。

自分が年老いた今、安心して歳をとれる社会であつてほしいと強く思う。それは同時に、子供や障害のある人々、病のうちにある人々を大切にするとともに太い絆で結ばれていることを再認識する。それこそ人間が人間たる智慧と文化をもつて生きるということではないのだろうか。



（飾る錦は誰のため 楓 奥多摩にて）

たかが川柳 されど川柳 （平成二八年上半期）

一月

お年玉渡したとたんにもう帰る 佳作

正月とお年玉はつきものだが、全国平均2万5千円だとか。じいちゃんやばあちゃんは格好のターゲット。お金よりおもちゃを喜んでいたあの時代が懐かしい。何も言わずにいそいと袋に間違えないような名を入れている自分も正真正銘のじいちゃん。

署名入り千円札で初詣

いつもは五円、一〇円だが、初詣、しかも由緒ある神社ともなれば、ここは一枚奮発するか。でも行きがけにそつとお札に署名しておく。だって神様だって多く議で覚えられないんじゃないかと。

飛んでくる賽銭避けるおちよこ傘

この日ばかりは混みますね。神殿近くに来ると後ろからの投げ銭。コントロールの悪い人もいたりして、思わず傘をおちよこにさしたら、なんぼ集まるかなどの想像するのは不信心もの。

題詠「悔い」

まだ早いわが人生に悔いはなし

わが人生に悔いはなしといってみたいものです。読んだ本に、『武士は悔いず、恥じずに生きる』とありました。さすれば、わが人生は、悔いと恥ずかしきことのみ多かりしということになる。残念。

後悔と誓いで作るミルフィーユ

後悔と反省の誓い、その繰り返しはまさに多層に重ねたミルフィーユのごとしという句です。ミルフィーユでごまかすのは甘いといわれそう。

再婚は悔いと記憶の弱さから 佳作

結婚の失敗は忍耐力の欠如、再婚は記憶力の欠如とはよく言ったもの。まだまだ悔いも足りない再婚はさらなる危機に。しかしそれを繰り返すのは羞恥心の欠如なんでしょうね。

二月

妻からの義理チョコひとつびターだね （佳作）

あれほどの栄耀栄華を誇った御仁もエイジングとともに人気凋落。ついには娘からのチョコも届かなくなり、今や妻からのチョコのみ、それも義理チョコ。実に人生はダー

クであり、ビーターなものです。もちろんわたくしの話ではありません。

なごり残雪手本示して消えてゆく （佳作）

名残雪としたのですが、イルカの歌も連想させるならひらがなが良いとのご指摘。まことにごもつとも修正いたしました。晩年になれば、見るもの、聞くもの、なにかも自分に結びつけて考えるもの。淡く、そつと、自然に消え去ることこそ最高の願いです。

鬼は外投げたむこうに妻がいた （佳作）

どうもなりすましが多いのですが、節分に因み、こんな風景面白そうですね。決して意図的ではないにしても、日常生活の中にはこんな緊張の一場面もあつていいかなと。

題詠「味」

母の味妻が越えた日惚れ直す

よくある句想ですが、母の味は夫に向けたものというシビアな見方もあります。しかし、母の得意なイワシのつみれ汁に妻が挑戦したとき、そんな思いがしたことをふと思ひ出しました。

味濃過ぎ家で浮きますお父さん

味といってもキャラのことですが。そんな親父の面倒くささ、家族の中で浮き気味なのは、塩分濃度が濃すぎる

からとかけたつもりでしたが、あまり共感は得られなかったようです。

味があるそう煽てられ失敗し

ユニークというのは褒め言葉か、けなし言葉か。個性のあることは大切ですが度が過ぎると危ない。味があるなんて言うのもギリギリですね。味ありすぎて変わり者のほうがわかりやすいですね。

三月

うるう年その一日のありがたみ（佳作）

4年に一度、オリンピックイヤーは366日。次のうるう年も必ず迎えられるとは限らないと思うような歳になってきた。日一日が愛おしくさえある。2月29日はなんだか儲けたようなありがたい気持ちになりませんか。

桜待つあなたが先に散りました（佳作）

今年も桜の季節が来ました。まさに待ちに待った季節です。友人と行く花見も恒例行事ですが、その友人の「来年も来られるといいな」のつぶやきが妙に心にしみました。

安らかに齢とれないぞ日本死ね

「保育園落ちた。日本死ね！」が政治を大きく動かしま

した。こんな必死のつぶやきを先取りできぬお粗末な政治家ばかり。安心して老後を迎えられない世の中、老人を大切にしない国は亡びると思わずこのパロディ句が浮かびました。

題詠「鏡」

姿見の母の面影DNA

鏡の中の自分がやけに父に似てくることに愕然とします。あえて女性の目から母親の面影が濃くなってくる姿見の自分にDNAを感じるわけです。

歳かさね次第に凸化わが鏡

鏡の館ではないが、凸面鏡はやたら太って見えます。えっ！この鏡、凸面鏡ではないって！ということは・・・デパートの衣服売り場の鏡は少々凹面鏡になっているって知っていますか。素敵に良く似合うと家に帰って姿見を見て違和感を覚えるかもしれません。

シミ小ジワ鏡勝手に歳をとる

この鏡、やたらシミ小じわが目立つ、変な鏡！と思う方はいませんか。その真実は受け入れがたいものです。鏡のせいにしたくなるあなたへの一句。

四月

階段の手すりを磨く老いの知恵

数年前、フランスの地下鉄の駅で地図を見ながら階段を降りていて、一〇段ほど踏み外し、救急車の世話になったことがあった。それ以来、階段、特に下りでは手すりを掴む様にしている。いわゆる手すり磨きである。

騒ぐ孫電池切れたか眠りつく（佳作）

人並みに孫の世話が生活の中に組み込まれている。「ジイジあそぼ！」の一言で、なかなか大変なお付き合ひ。そんなエネルギーに満ち満ちた孫も、眠くなってくると訳が分からなってくるのだ、突然スイッチが切れたように眠りつく。

一人欠け二人欠けてく花見です（佳作）

毎年桜の季節になると友人たちと花見に行く。定点観測の場もいくつかある。しかし、昨年からあいつが来なくなつた、今年はいいつが来ない……。毎年メンバーが少しずつ減っていく。

題詠「肩」

子育ての重荷おろして五十肩

子供が成人し子育てがやっと終わったと思つた頃に五十

肩。肩の荷がおりると肩が回らなくなる。そんな状況を一句。

お疲れさん後姿の肩丸く

定年を迎え、あんなに元気だったお父さんもなんとなく角が取れ、穏やかに。後姿の肩もいかり肩からなで肩に。

調子づきおんぶに抱っこ肩車

おんぶに抱っこは日常茶飯事だが、さらに過酷な肩車。孫との付き合ひも体力勝負。誰に似たのか調子づくと終わりが見えない。

五月

火の国のマグマに泳ぐ大ナマズ

熊本震災、間もなく東海地震と思うと他人事でありません。それにしても前震、本震、余震、一〇〇〇回を超えるとなると自然は怖い。そんなスケールの大きな川柳に。トランプはババを引かずに生き残る（佳作）

アメリカ大統領選挙。泡沫候補が今や代表者に。良識は常識の外にあります。カードゲームは子供のころトランプといいました。最後まで生き抜き今や大本命。

少子化の波間に泳ぐ鯉のぼり（佳作）

少子化が言われて久しい。端午の節句のこいのぼりも

昔よりは減っているはず。世の中の波間に喘いでいるような鯉のぼり。

題詠「走る」

年寄りはず動かさず口動く

だから嫌がられるのかな。でも確実に手足の動きは緩慢に。口もそうなれば愛されるご老人というわけ。

急いでも走らぬ歳になりました（佳作）

「走らぬ」でなく「走れぬ」だろうといわれますが、自覚が出てくると走らなくなるのです。なにごとくもあわずゆっくり。

のんびりと路面電車の走る街

昔、路面電車と走りっこした思い出あります。いつの間にかスピード、スピード。でも幸せになったのかなどふと思ってしまうす。

六月

裏金がゴリンゴリンと回ってる（佳作）

五輪を巡ってはいろいろなことがありました。スポーツの聖典なのに政治家が絡みすぎています。欲と金のあるところいろいろな人が絡みますね。

ライン利用もつれた糸がまた絡む

スマホのライン、世界中無料というところがいいですが、便利すぎて気のつかぬうちに人間関係を難しくしたりすることもあるようです。

ブレーキをかけて後悔夢のなか

色っぽい夢を見たのについ自制心が働いて：せめて夢の中ぐらい自由奔放に生きたいがそうはいかぬもの。

題詠「空」

梅雨空に女心の七変化

空梅雨とか。梅雨になるとお出かけもいろいろ左右されます。この移ろいややすさは女心にも似て、その下に咲くアジサイもまた・・・なんて訳知り顔に。

お出かけは妻の機嫌と空模様（佳作）

女性には太陽。友達と出かける楽しい山歩きも家内の笑顔で見送られたい。それと空模様。元氣に出かけ、お土産とともに帰宅するのは最高の幸せ。

満天の星が見ている出処進退

天網恢恢疎にして漏らさずとは言いながら、都知事の出処進退は格好の週刊誌ネタ。やつと辞任しましたが、男たるもの小さな間違いが大きな判断ミスにつながる良い例でした。

（了）

エッセイ

脳梗塞体験記

山本文子

十年以上も薬を飲むことなく元気に過ごしてきた私だったのに、遂にダウン、脳梗塞を発症してしまった。

二〇一六年、桜便りの聞かれる頃だった。夜の九時頃、自分の部屋で私は腰掛けていた椅子から不意にずるずると滑り落ちて、仰向けに床に転がった。あわてて起き上がろうとかがいたが、立ち上がれない。大声で呼び立てたら、末娘が飛んできて後ろから私の上半身を抱えて引き起こしてくれた。左腕に違和感を覚えるのを見ると、左腕がだらとぶら下ったまま動かない。右手で押してみると、ゆらりと揺れる。左腕はまるで丸太棒のようにずっしりと重い。脳梗塞の発症だな、と気づいた私はその場にじっ

と座ったまま、救急車を呼んでもらって、その到着を待った。

ピーポーピーポー鳴らしながら走る救急車の中で、救急士が私の両腕と両脚を入念に調べた後、私の左手を握って「握り返してみて下さい」と言ったが、まったく反応できなかった。続けて救急士は言った。「あなたは軽くてよかったですね。もっと重い人が多い。死ぬ人だっているんですからね」この言葉はその後の私の心の支えになった。自分は軽いのだからめげてはいけない。頑張らなきゃ、と。搬入された救急病院で昼夜に亘る点滴を九日間受けた。点滴の管から解放される日のなんと待ち遠しかったことか。

入院した翌日には、思いがけないことに左手指先がピクリと動いたので、あつと思つた。そういえば、医学書には発症直後は安静にこだわらず一日も早くリハビリを始めた方が効果的であるとの記述があつたことを思い出した。ベッドに横になったまま私は自分で指先を動かす努力を始めた。グー、チョキ、パーを繰り返した。トイレに行こうと起き上がる度に左腕がずっしりと重いので、三角巾で吊りたいと思ひ、看護婦に申し出たところ、主治医の指示があるまでできないと言う。受診の日までなんて辛くてとても待てない。末娘に頼んで三角巾を用意させ、自分で左腕を肩から吊るしたところ、先生の許可がないのにと看護婦に叱られた。重さに耐えられないから私は看護婦の注意を無視して三角巾を外さなかつた。自分は我儘な患者だろうなとは思ふものの苦痛は一日も早く和らげたかつた。

指先は一日目より二日目、二日目より三日目と日毎に動きが増していき、腕が少しずつ持ち上がるようになって、数日のうちに肘が胸の高さまで上がるようになった。左手にお茶碗を載せてみると、そのまま食事ができる。これはリハビリになるな、と気づいたので私は三角巾を外した。そうしたらまたもや看護婦から注意された。「先生の許可なく外してはいけません」と。

なんということだ。それではお茶碗が持てない。リハビリもできない。私は憤懣やるかたない心境になつた。

それだけではなかつた。私は左腕こそ動かなくなつたものの、脚の方は左右とも健全である。杖を使わずに歩ける。なのにトイレへ歩いていつてはいけない、と車椅子に乗せられた。発症直後に歩くと再発とか悪化の恐れがあるのだろうか。それならそうと説明してくればよいものを。

点滴から解放され自分の脚でトイレに通えることになつて、やれ嬉しやと思つたら、今度は杖を使わなければいけないと指示された。これがまた厄介である。なぜならば杖などなしで歩ける身だから、杖を洗面所やトイレに置き忘れてきてしまう。取りに戻るといふことを何度繰り返したやら。私は馬鹿馬鹿しくなり、腹が立つてきた。そうは言うものの、職員の皆さんは笑顔いっぱいであつたから、自分は桁外れに我儘な患者だろうな、という自覚と済まなさを感じていた。

結局、救急病院では四週間お世話になり、いくらかのリハビリ治療も受けた後、ベッドの空くのを待っていたリハビリテーション病院に転院することになった。転院の日にはエレベーターの前や病院の玄関先でリハビリの先生や看護婦が見送つて下さつたのには感激。涙が出た。

転院先のリハビリテーション病院ではベッドが百五十余あり、九十余名の療法士を擁して、リハビリの質が抜群に優れていると私は感じ取った。毎日一時間のリハビリを三回、計三時間受ける。お陰で私の腕は万歳ができるようになった。上方向だけでなく、横にも後ろにも回り、ぐるぐると回転させることも可能になった。

リハビリの質が高いだけではない。この病院には愛情が溢れている。病院の廊下で行き会う人たちはスタツフも患者も会釈を交わし合う。にっこりと微笑む人もあつて和やかだ。リハビリのお世話になった先生方は顔を覚えていて下さつて、どこで出会つてもにっこり笑い、中には握手を求めてくる人もある。若い男性の先生は特にふざけて冗談で患者の心を和ませることが上手である。

「山本さん、近所のゴミ拾いをしていたんだつてね。道理で私が〇〇町（著者の住む町）を通つたら、ゴミ一つ落ちていなかった」と言うH T先生の言葉に、私はお腹の皮をよじらせて笑つてしまった。

「山本さんは色が白いですね。何か塗っていますか。何も塗っていない？ 若い時からずつとなの？ その方がいいのかも知れませんか」さらに

「山本さんの笑顔は実に素晴らしい」はT M先生の言葉。

単純な私は「えつ、私の笑顔が素晴らしいつて？」と嬉しがつて洗面所の鏡の前で一人でニツと笑つてみたりした後で、先生の褒め言葉は病人を励ますための、つまり心のケアだったと気がついた。オメデタイな、私は。

「山本さんは本当に元気だね。百二十歳まで生きられるよ」なんて言われる筈だ。

「もつと若い時に知つていたら、ボク、山本さんに惚れてしまつたかも知れない」と見事にふざけてみせたM F先生は、ひょうきんで面白い若者だ。そういう私は口軽婆さんか。「先生たちは孫のように可愛い」と言つたら、すかさずにゆつと手を突き出して「お年玉頂戴」と言つた先生とは漫才のコンビが組めそうだ。

「山本さんが歩けなくなつたら、私が抱っこしてあげる」とH M先生。冗談と思つてもその優しさが嬉しい。退院の日には

「もう私が抱っこする必要はなくなりましたね」と祝福して下さつた。

じつと私の目を見つめて視線を離さずリハビリを続けてくれる先生があつて、私はその目に心を引き寄せられそうな自分を感じた。自分に注がれる視線は眩しい。その温かい視線は人の心を引き寄せる。そこで気がついた。人の和

の秘訣はここにあるのではないか。見つめ合う。重ねて和やかな笑顔。握手。さらに抱擁。その上での心を開いた会話。これらは世界共通の友好表現であり、人類にとつての最高の幸せ、平和を守る手段ではないか。平和を守るために必要なのは決して軍備ではない、とつくづく思った。

各階毎に食堂がある。脳梗塞患者は歩けない人が多い。

食事時には車椅子の人たち三十人ほどが集まってきて食卓を囲む。この人たちは食べ物や飲み込み力が弱くなったり、箸を使えなくなつて食べるのに時間がかかる。歩ける人は稀な中で歩き回っている私は食事が一番早く終わるのでどうしても目立つ。看護師が近寄ってきて「山本さん、あなたがどうしてそんなに元気なのか秘訣を知りたいから会わせて、という患者さんがいるよ」と一人の女性患者に引き会わされた。その人の手を握ってみると、指先は動かせるのに動かそうとしない。私は自身の努力が必要なことを話してグー、チョキ、パーに毎日励むよう勧めた。私が食堂に姿を見せるといつもすがりつくような目で車椅子の上から私を見つめる女性患者がいる。その肩に手を回して私が「頑張つてね」と声をかけると、じわーっと涙を浮かべる。辛いだろうな、歩きたいだろうな、と思うだけで私まで涙が込み上げてくる。その他に三度の食事時に車椅子で食堂

へ集まってくる患者のうち、表情の暗さから私の心にかかつている人がある。声を掛けると硬い表情のまま頷くだけだったその人がやがて私の言葉に答えるようになった。いまに笑顔も・・・と思つているうちに私が退院してしまった。会いたいな。あの人たちは今どんな思いでいるのか。どうか明るい気持ちになつて欲しい。

入院生活を笑つて楽しんで生きている人など滅多にあるものではないが、この私は入院中もケラケラとよく笑つた。お腹の皮がよじれるほど笑つた。なぜ笑えるのか。私はとにかく今こうして生きているということが嬉しくてたまらない。病んだ時、人の心が暗くなるのは病気を案じ死を恐れるからであろう。私にはその恐れがない。死を恐れる人たちにどうしたら私の考え方を伝えられるのか。死は現世以上に素晴らしい霊界への移動である。恐れるどころか、楽しみにすべきことなのだ。

結局、このリハビリテーション病院には六週間お世話になった。温かい先生や看護師たちに見守られての六週間は実に楽しかった。退院の日、主治医のMS先生は左手で私の右手を握り、右手で私の左手を握りしめて下さった。リハビリによつて復活した私の指の力を確かめたくてのことであろうか。そこに私は先生の温かい心を感じて嬉しかった。

た。「忘れられない楽しい入院生活でした。ありがとうございました」と言った私の言葉に対する先生のコメントが振るっていた。

「私のこんな顔でもよかったら、思い出して下さい」

大きな目をぎよろりとさせて、口元をほころばせたMS先生の顔は最高に魅力的だった。

何人もの先生が、私の回復の速さを驚き感心して下さったけれど、私としては自分が他の患者よりの程度に速いのか見当がつかない。訊いてみても、「人それぞれ。千差万別ですよ」の答えしか返ってこない。

「山本さんの回復の速さは不思議現象の一つかも知れませんがね」と言って下さったSD先生の言葉には感動。リハビリを受けながら私がしゃべった自分の不思議体験を大抵の先生は軽く聞き流してしまう。けれども、SD先生は真剣に受け止めて耳傾けて下さったのだ、と思うと本当に嬉しかった。思考が深くて温かい人に違いない。長身だけれど心はとても細やかなSD先生とはもともととお話をする機会が欲しかったなあ。

脳梗塞は脳神経が冒されるため、手足だけに限らず、話す能力や記憶能力、思考能力が衰える場合もあるから、言語リハビリ担当の先生から患者はあらゆる角度からの質問

による検査を受ける。私は幸いなことにこの点には問題なく、担当のHA先生との面接は二回で打ち切りになった。

一回目の面接には「今日は何年何月ですか？ここはどこですか？」に始まる質問で最後は趣味を問われた。書くこ

とと答えたら、その内容を問われ、著書名まで問われた。次の面接でHA先生から「山本さん、図書館で調べたらありましたよ、あなたの本」と声を弾ませて言われた。拙著

『改訂版 墓碑は語る』がアマゾンで定価五百円が五千元から五万円の値をつけられていることが知れ渡り、これがため私は流行作家扱いされてしまった。『改訂版 墓碑は語る』の反応はすこぶる良かったが、中でも永六輔氏からは、「拍手！脱帽！」という身に余る賛辞を頂いた。この方のお力でアマゾンの値が吊り上がったのかな、という気がしている。

エレベーターの中で出会ったHA先生から「山本さん、読みましたよ。凄いわね」と声を掛けられて私は恥ずかしいやらきまり悪いやら。「また書いてね」とか「オバマ大統領の広島来訪時のメッセージに対する感想を書いてね」と言われたりした。それにはまだ応えていないので、代わりにここで簡単に一言で答えておきたい。オバマ大統領のメッセージは実に幅広い観点から深く掘り下げて語られて

いるので強く感動した。それに較べて日本側のメッセージは表面的なありきたりの平和論に過ぎず、お粗末に思えた。退院後の私は、リハビリ担当のＴＭ先生から頂いた自主トレメニューを自分の部屋の壁に貼って、そこに書かれたリハビリを毎日実行している。つま先立ち運動、お尻突出しての膝曲げ運動、また寝た姿勢での腰上げ運動や脚上げ運動に加えて、毎日三十分ほどの散歩を心がけている。

脳梗塞は人間の体が地震を起こしたようなものに見える。微震だと思った私なのに、どうやら影響は全身に及んでいたらしい。発症と同時にぱったりと夢を見なくなったことや、ビロウな話で恐縮だが、沈黙のおならしか出なくなったことからそう感じた。発症後八十七日目から夢を見始めて「脳の復活だ」と喜び、五か月ぶりに音が出たときは「腸の復活だ」と喜んだ。なんでも喜びの種になる私である。だが、この先も復活への道一筋とは限らない。予震の後に本震が来るように、脳梗塞は再発がかなり多いと聞く。再発を防ぐことができれば、リハビリに励むことで手脚の筋肉が鍛えられ、結果的には足腰を強めて長命に繋がるかも知れない。よく体を動かし、心を安らかに保つことによつて再発を防ぎたい。

少し横道へ逸れるが、自分はいよいよ人生の終着駅に近

づいたかなと思うたびに、懐かしく蘇ってくる二人の恩師の話に触れたい。まずは小学校一、二年の担任だった小川百合先生の九十歳頃の姿。「文子さん、お友達を誘って遊びに来てよ」との電話を先生から再度頂いたので、先生宅を級友四人で訪れたのは二十年くらい前だった。先生を囲んでのおしゃべり中に私の頃から金粉が出始めた。「あつ、文子さんの顔に何か光っている。また増えた」と平野富貴代さんが叫び、みんなが総立ちになって私を取り囲んだ。以来、私は同級生たちから霊能者扱いされるようになってしまった。小川百合先生からは「文子さんには神が宿っている」と言われた。この時の五人で今健在なのは平野富貴代さんと私の二人だけだ。小川百合先生は百歳まで自立を全うされた。私もそれにあやかりたい、と願っている。もう一人の恩師三年の担任だった梅村芳郎先生は昔、新聞の地方版に拙著『金粉のメッセージ』『詩歌集 蟻んこの独り言』の紹介文が顔写真と共に載ったとき、「あなたは宝です。大成して下さい。あなたなら出来る」とのお手紙を下された。大成から程遠いために私は梅村先生に顔を合わせられないから、まだ死ぬわけにはいかない。大成とは何ぞや。世の中に益する人間になること、と思っている。

(二〇一六年 九月二十四日)

エッセイ

土産の味

浦野裕司

旅好きな私は、土産好きでもある。土産好きな私であるから、土産にまつわる失敗も数知れない。けれども、失敗の数々は土産の味を忘れ難いものに変えてくれるのである。

甘くて酸っぱい「流水飴」

土産にまつわる最初の失敗の思い出は、四十年近く前、大学生時代に遡る。その頃、私は北海道を巡る旅に熱中していた。前年の秋に旅した北海道の大自然に魅入られた私は、大学の授業がなくなった翌年の二月、流水を見るために冬の北海道へ行くことにした。「上野発の夜行列車着いた時には、青森駅は雪の中」と、当時はやっていた演歌の

歌詞そのままの旅の始まりだった。早朝の青森駅で、急行「八甲田」から青函連絡船「摩周丸」に乗り換え、目指すは函館。函館に着くとすぐに列車に乗り替え、札幌へ。という経緯か、札幌市郊外の神社境内に保存されている屯田兵の住居を見学。狸小路で札幌ラーメンを食べて、再び夜行列車に乗り網走に向かう。背もたれが直角で固い座席の、夜行列車の二連泊など、今は考えるだけでぞっとするけれども学生時代は夜行列車に乗ること自体が旅の目的の一つだったから、それはそれで楽しかった。

二つ目の夜が明けて終点の網走駅まであと二駅ほど、たしか女満別駅あたりではないかと記憶しているが、その駅

で乗車した老婆が向かいの席に座った。「どこから来なさった」の問いに「東京から」と答えようとしたが、口が動かない。なにしろ一人旅だ。二日前に上野を發つてから口にした言葉といえ、札幌狸小路のラーメン店で發した「味噌ラーメン」だけだ。口の筋肉も舌も固まったように動かず、やつとのもので「東京から」と答えると、「こんな寒い季節に、何しに来なさった」と言う。「流水が見たくて」と流水のごとく固まった言葉を吐き出すと、老婆は背筋をピンと伸ばしてから「ご苦労様なことだ」と言い、丁寧に頭を下げる。何が「苦労様なのか分からないまま黙っている」と、「よかつたら舐めなさい」と飴の袋を渡された。透き通った青と雪のような白が混じったシンプルな甘さの飴、その名も「流水飴」。老婆は「お土産に」と袋を手渡してくれたのだと思い、一粒口に入れた後、残りをコートのポケットに入れた。旅の途中ですべて食べて舐めてしまったので土産にはできなかったが、あの爽やかな甘さは、今でも現実感を伴って思い出される。

老婆との短いやり取りは、心に残るよい思い出だ。ただし、思い出すたびに、ちょっとした罪悪感に苛まれる。後で振り返れば、老婆に渡された流水飴の袋は、すでに開封されていたような気がするからだ。それに、網走駅で別れる時

に、何か言いたそうな顔をしていたのも気にかかる。もしかしたら老婆は「一粒どうぞ」というつもりで流水飴の袋を差し出したのかもしれない。いや、ふつうに考えればそうだろう。だとしたら……。受け取ったまま返さなかったのは完全に私の早とちりだ。あの流水飴の爽やかな甘さの思い出に、微かな酸味が加わるのである。

「おばあちゃん、ごめんなさい」

淡く儚き「十勝ワイン」

次なる失敗は、翌年の冬の北海道旅行でのこと。当時、北海道の池田町で生産する十勝ワインがちょっとしたブームになっていて、東京でも白と赤の十勝ワインが販売されていた。けれどもロゼは生産量が少ないということで、特別なルートで購入するか現地で直接買うかしか方法がなく、幻のワインと呼ばれていた。旅の終盤、「そうだ、池田に寄ってワインを買って帰ろう」と思い立ち、ワインを買うためだけに池田町を訪れた。観光名所にもなっていたワイン城という工場兼販売所へ行くと、冬季休業中。仕方なく近くの酒屋へ。「すみません、東京からロゼワインを買いたい来ました。二本ください」と伝えると、「ああ、ロゼなら池田町民限定だよ、白と赤なら売れるけどね」と言う。

「一本だけでも駄目ですか」とお願いしても「ああ、だめだね。赤も白も美味しいからどうだい」と、にべも無い。赤や白なら東京でも買える。「じゃあ、いいです」と、何も買わずに帯広に戻り、当時は帯広でしか買えなかった六花亭のチョコレートを買った。

こんな体験があるからか、ロゼワインを好んで飲みたいとは、終ぞ思ったことが無い。私にとってロゼワインは、赤ワインより淡く、白ワインより儂いのである。もちろんチョコレートは、大の好物である。

しょっぱさと甘さの「モンゴル岩塩」

土産にまつわる最大の失敗については、かつて本誌の「モンゴル紀行」で触れたのだが、改めて概略を。

ウランバートルの市場で買いたった岩塩のことである。たかが塩と侮ることなかれ。モンゴルの岩塩はミネラル豊富で、しょっぱいだけではない、実に味わいのある塩だ。

モンゴルの旅を終え、成田空港行ききの便の搭乗開始時刻にあとわずかという時のことだ。構内放送で「ミスター、ウラノユウジ」と呼び出され、預けた荷物の確認をさせられたのには肝を冷やした。強面の検査官が示したX線検査のモニター画像には、スーツケースの底に整然と並んだ百

袋の小袋が、はつきりと映し出されていた。どう見ても「クスリ」だ。スーツケースを開ければその正体が岩塩であることはすぐに証明できるのだが、「説明しろ」と英語で詰め寄られたのには参った。しどろもどろになって説明した挙句、「こんなに土産を買って帰るのか」とゲラゲラ笑われて解放された。

麻薬の運び屋として逮捕されず、無事に帰国でき、またとないう土産話となったのは幸いである。しょっぱいけれど、甘味も感じられるのがモンゴル岩塩である。

辛くてチャーミングな「XO醤」

空港と言えどもう一つ、忘れ難い土産の失敗がある。四年前に台湾旅行をした折のことだ。中華料理最高峰の調味料、XO醤。質の高いものが手に入るので、土産用にいくつか買いたった。液体物は機内持ち込み禁止ということなど分かっていたにもかかわらず、「高価な土産」という意識がそのことをすっかり忘れさせた。割れてはいへんと、浅はかにも手荷物に入れてしまったのだ。当然の成り行きとして手荷物検査で没収となる所だったが、観光客に親切な台北空港の検査官は「梱包して搭乗受付カウンターに戻って預け直してきなさい」と言う。しかし、

その後がいけなかった。ほっとして気が緩んだ私は、手荷物をすべて妻に預けたまま、検査場を後に喜び勇んで搭乗受付カウンターまで戻ってしまったのだ。

さて、それからがたいへん。搭乗受付カウンターへ行くと「向こうにある宅配業者のカウンターに行つて、梱包を頼んで下さい」と言う。XO醬のビンをビニール袋に入れただけでは、預け荷物として受け付けてくれるはずがない。それはそうだと今度は宅配カウンターへ。「クロネコヤマトの宅急便」の幟に安心しきつて「これ、梱包してください」と、笑顔のかわいい受付嬢に手渡した。「ああ、これで無事にXO醬をお土産にできる」と安堵した私は、きつと嬉しそうな笑顔でいっぱいだったことだろう。

ところが、である。一転、私の嬉しそうな笑顔は「二十香港ドルです」の言葉に萎んでしまうことになる。二十香港ドルは日本円にして三百円にもならない。「ああ、そんなものか」とウエストポーチの財布を取り出そうとしたとたん、とんでもないことに気付いた。ウエストポーチが無いのである。財布もパスポートも携帯電話も、すべてウエストポーチの中。それを、すでに出国審査を終えているであろう妻に預けてしまったのだ。あるのは、胸ポケットに入れた搭乗券のみ。受付嬢に事情を話すと、困ったような、

それでいてとてもチャーミングな笑顔で首をかしげている。その笑顔に見とれていてもどうにもなるわけもなく、ここは諦めるしかない」とXO醬は、貴方にあげます」と伝えて、その場を立ち去ろうとした。すると彼女は、「OK、無料で梱包してあげます」と、奇跡のような言葉を口にくれた。信じられない気持ちで梱包してもらい、チャーミングな笑顔で手を振る受付嬢の方を振り返り振り返り、再び登場カウンターへ。搭乗券を見せて梱包してもらった土産を手渡すと、いとも簡単に受け付けてくれた。

ほっとする間も無く急いで横のエスカレーターを上り、保安検査場へ向かうと、またしても難関が。そう、パスポートを持っていないから、それ以上先へ進めないのである。途方に暮れるとは、このことだ。力が抜けてしまい、ぼんやりと遠くの保安検査場の方を見ていた。そこでまたしても、奇跡が起きた。検査官が遠くから手招きしている。どうやら検査場内で私たちの旅のリーダーが話してくれたらしい。検査場脇の係員専用の出入り口から中へ入ることができた。

帰国後、土産のXO醬を使ってチャーハンを作った。辛いだけでなくチャーミングともいうべき、温かく深みのある味のように感じた。

小説

タイタニック委員会 Ⅱ序Ⅱ

稲瀬 隆

一 大海原

風に向かって大きく手を広げ、全身で風を受ける。まるで空を飛んでいるようだ。目を開けば眼前に広がる大海原が見えるだろう。足元から伝わりくる振動が、遥かな水平線に向けて洋々進みゆく船の機関の躍動を教えてくれる。豪華客船タイタニック、処女航海の映像が閉じた脇の裏に浮かぶ。

セリーヌ・ディオーンが優美に歌う。。。

「にいちやん！！『通せんぼ』やめて、どいてくんねエかなア」

・
・
・

目を開けて振り返ると、ユニボを乗せた軽ダンプから、ヘルメットの運ちゃんが困り顔で怒鳴っていた。頭から優雅な”Neat, far・・・”のメロディが消し飛んだ。

「はぁ・すいません・・・」

視線を戻せば目の前は砂塵が舞う丘の上。パルテノン神殿やシェーンブルン宮殿、はたまたタージマハルにまで似せた、「勘違い豪華」な建屋が並んでいる。

今、ボクの目の前にあるのは、激しく変動する潮流の中で、迷走の末に難破した一事業体の残骸である。ここはかつて、とある大学のキャンパスだった。

人生、いつが一番コワイ瞬間かって、それはきっと、

気づいたらもう手遅れだ、逃げ場がないって分かった時だ。そこで深く観念するか、万分の一にでも賭けて足掻くか、人はそれぞれだ。だがいずれにせよ、およそあらゆる危機には、手遅れになる前に必ず予兆がある。なんらの警告があるものだ。それをきちんと受け止め、活かさぬ者に、悲劇はあたかも突然かのように降ってくる。

かのタイタニック号はその典型だ。運命の氷山に遭遇するまでには何通もの警告電信を受けていたのだ。

衝突一時間前には、氷山群に閉じ込められた他船から、重大な電信を受け取った。だがこの最後の警告は、処女航海で沸く乗客たちの「ご祝儀電報」に埋もれ、隅に追われ、葬られた。「じゃまするな」それが通信士から発信船に返された電文だった。危機を察知すべき「聞く耳」が無かった、ということだ。

「見る目」にも重大な欠陥があったようだ。前任者から双眼鏡保管庫の鍵を受け取り損ねた見張り番は、夜霧の闇の中で、肉眼目視を続けねばならなかったという。有名な「ハインリッヒの法則」には、例のトライアングルモデルのほかに、ドミノ理論というのがある。小

さな不運の連鎖が事態を増悪させて、しばしば大きな悲劇を生むってことだ。

そんな役立たずの「目」や「耳」の上に「鈍感な頭」つてのが乗ってた日には、もう救いようがない。そもそも「不沈船」と謳われたタイタニック号では、まともな避難訓練などなく、救命ボートも足りなかった。だが、危険海域に向けて舵を切った船内で船長は、次々お声がかかる「VIP」たちの接待に追われ、料理のメニューやパーティーの段取りに気を取られていた。で、その瞬間。号の脇腹が氷山に切り裂かれた時、船にはほとんど衝撃がなかった。ラウンジでは、緩やかな「緊急停船」に気付いた客が少しざわついただけで、パーティーは優雅に続けられた。お祝い気分で乗船し、後に優先救助された社主たちは、グラス片手に航路の再検討に入った。まだ誰も、この最新鋭「不沈船」が沈むなど夢想だにしかつたのだ。唯一、この船の設計者を除いて。衝突から二〇分後、救難信号が発信され、一時間後に最初の救命ボートが降ろされた。そして二時間半後、船はへし折れて海中に没したのだ。犠牲者は千五百人を超えた。

さて、今は某国『パークリン・パーク』の残骸のようなこの丘陵地。かつては明総学館東京国際情報栄養人間総合科学大学（長すぎるので以下「明総大」）のキャンパスだった。

世の中、およそなんでも「老舗」つてやつは名前が短い。後発組ほど名前は長くなる。「東・西・南・北」は当たり前。「新」を付けたたり「ニュー」を付けたたり、果ては後出しのくせに「元祖」を付けたりする。だが、老舗つてのは単なる歴史の長さで決まるもんじやない。エスタブリッシュされてこそその名に値する。というワケで、この明総大はその法則の典型例つてことになる。

そもそも「東京」が付いてはいるが都内にはない。都心からは優に一〇〇km以上離れていて、東京ペケペケランドや、新東京〇〇空港の比ではないが、同じ土俵にのつていると言えなくもない。明総大の基となった明聡女学館は大正六年、辺総の婦女子教育のために開かれた。つまり名前に負けず、歴史も長い学校なのである。昭和二六年に栄養士養成施設の指定を受け、昭和四〇年に家政短大となって管理栄養士養成課程を設け、当時の受験生増加を見込んで幼児教育学科と英文学科を開設した。元号が平成に変わる頃、陰り始めた短大を店じまいして

四年制大学に脱皮すべく男女共学とし、その後のブームを狙って情報と人間を名称に入れた。二年後、英文学科組織を国際コミュニケーション学部昇格、大学名に東京と国際を冠した。五年後、この学部はマネージメント学科を加えてインターナショナル・コミュニケーション・アンド・マネージメント学部と改称、日本一長い名前として若干の注目を浴びた。そこで味を占め、一八歳人口の減少が間近に見え始めた平成一四年、時の中協審答申で掲げられた「リベラルアーツ」を組み込んで、世界一長い名前にしてギネス申請を画策するも、文武価格省よりキツイ「指導」を受けて断念した。この際、マッシュアルアーツもリベラルアーツだと豪語して、大綱化に伴う体育外しの巻き返し図る体育系が張り切る異常事態も起きた。また、答申を踏まえ、高い教養を求めるリベラルアーツ・カレッジをめざすのか、地域に密着したコミュニティ・カレッジをめざすのかも激論となった。旧短大系。情報系、国際系の三派が三つ巴でもめ倒し、いずれとも不明確なままの妥協案（俗称ロン・パリ協定）によって、「総合科学」が大学名に入れられた。これらの大幅な再編と設備投資にも関わらず受験生に減少には止めが掛からず、その後の

理事会による看護学部設置提案で、混迷は更に深まった。

おっと失礼。自己紹介がだいぶ遅くなった。

小生はタコである。名前はもうない。

いやきちんと言っておこう。正しくは「毛内多寡雄」。学生からは「タコ」、同僚からは「坊ちゃん」と呼ばれていた。先月まで大学准教授だったが、ただ今現在は。一介の医者である。

毛内家は津輕藩に仕えた由緒ある家柄だ。苗字を書く度にそう説明するので、皮肉屋たちが「坊ちゃん」と呼ぶようになった。それでもなお無礼にも『毛無』とか書く不届き者がいて、不愉快千万である。世が世なら手打ちにしてやりたいところだが、ボクは漱石の「坊ちゃん」ほどガサツな乱暴者ではない。

六年前、ここに赴任したころは、まだ前期研修を終えたばかり身だった。法律的には一丁前の医師ではあったものの、継がねばならぬ病院はなく、どこぞの病院の常勤医になって終生「お医者さん」をする覚悟もなかった。さりとて自分が研究に向いているとも思えない。進路を決めかねていたところに部活の先輩から、とある大学が医師免を持った教員を探している、と聞

いた。このままアルバイト医を続けるのでは六年間の学生生活、いや浪人時代を含めれば九年間、支えてくれた家族に顔向けできぬ、とて定職に就くことにしたのだ。

ちなみにあだ名の「タコ」は「タカオ」の発音に生じたリエゾンだと信じている。はじめてあだ名を聞いた時は不愉快だったが、今では存外悪い気分でもない。タコは結構、知的な動物なのだ。鍵付きの箱にエサを入れた実験では、他者の行動を見て学ぶ力があった、という。かのHGウェルズが、タコをモデルに火星の知的生物を想像したのも、あながち的外れじゃなかったのだ。とはいっても、六年前を冷静に振り返ると、「タコ」が「タカオ」の音便でないような気がしないでもない。ソレは歓迎会の大騒動だった。

二 歓迎会

三月もどん詰まり、三〇日の土曜日に突然、泊りがけの歓迎会に呼ばれた。少々意外なタイミングだったので電話口で「この時期に恒例」なのか聞いたところ、「異例です」と言われた。まるでボクのためだ、と言わんばかりの口ぶりだ。そこで「いつもはいつ頃」かを何気な

く聞くと「決まってる」のだという。何のことはない。毎年トップが自分の都合で決めていたのだ。今回の「異例」が「時期」でないことは当日分かった。

周囲数キロ、めばしい施設が何もないような田園地帯の丘の上にその会場、割烹旅館「丘猪荘」があった。この辺総の地においては、別名「ヒル・トン」と称され崇められ、地元有力者の冠婚葬祭はもちろん、保守系市議、県議の選挙出馬表明やパーティーもここで開かれる。この一帯では帝国ホテルに料亭金田中を入れ、鹿鳴館まで合わせちゃったような上流階級の社交場で、この丘はまさに権威の宿る頂きなのだ。宿泊料や料理の舌代は、べらぼうに高い。それが「権威」の勘違いか、「田舎者を馬鹿にすんな」の心意気かは分からない。もつともこの丘の高さは二〇m足らず。高い料金設定も、よそ者への見栄で構えた高嶺だ。地元お得意さんからはその半分も取らなかつたのだから。ちなみにこの宴会の五年後、トリカゴとか葉天とかのサイトで、格安料金プランを乱発した挙げ句、あえなく閉館した。借金が数億円あったそう。踏み倒しが多かったのだろう。「おかしいそう」というより、全く「おかしいそう」だ。

出席者は常勤の教員・職員ほぼ全員、合わせて六十人

ほどだった。おどろいたことに、県の副知事まで来ている。なんでも地元の名士だそう。後で知ったのだが、今回の日程は彼に合わせたものだった。ボクのアルバイト先「藪名クリニック」のハナシも副知事経由だったらしい。長年、地域医療を支えてきた老医師のサポート役が期待されちゃったようだ。副知事の地元貢献に、ボクが手助けするって構図。学長はこれで県に貸しが出来た、つて寸法だ。

「まあセンセイ、一杯ぐつとあけてください。」と、なんだかよく分からないお歴々の挨拶の後、上機嫌の学長が自らビール瓶を片手にやってきた。「センセイにはぜひ教務委員で、お医者さんの視点からのテコ入れをお願いしたい。それに、地域医療を通した大学地域連携プログラムへの貢献も大いに期待していますよ。」と勝手にナリクエストを並べ、「あとで一言、いただきますが、まあ、まずはリラックスして・・・」と去って行った。しかしこちらはリラックスどころか、ビール瓶が次々にやってきた。学長の顔色を伺うように、まずはカニのような顔をして甲高い声で話す教務課次長、次いでオコゼみたいにぎよる目でエラの張った教務部長とセイウチみたいなガタイのいい学生部長がやってきた。教

務部長は、よく役所の窓口に居そうな人物で、学生部長は見るからに体育系だ。後にオコゼは県庁から、セイウチは県警からの人事と知った。まるで県立だ。因みに両教授の学位論文は、学長が母校の院生に「奨学金」を積んで書かせたという噂もあった。

いい加減、酔いが回って頭が真空になった頃、挨拶はこの春、去る人々に進んでいた。2、3名ほどの昔話を遠く霞の中で聞いたところで、ボクの名が呼ばれた。

「ではこの次に新たに赴任された方々から一言。まず、東京の東慶大からいらした、毛内先生にお言葉をいただきます。」

元来、酒はあまり強い方じゃない。コップ一杯のビールで耳まで真っ赤になる。今日はそれが「人格の致死量」を超えるレベル。しかもボクは焦るとドモる質だ。

「え、えー、わた、わたくしは、このたびえ、えー、その、あのですね・・・」まるで言葉が浮かんでこない。浮かんでくるのはカニだのオコゼだの、口にしたら取り返しがつかなくなるような単語ばかりだ。で、ふと口を突いて出たのは、

「水族館！」

しーん、となった。不審そうにカニ長が言う

「スイゾク??めいそう学館ですが??」
まずい!と思えど、舌も思考も制御不能だ。

「あ、ひつ礼 その、迷走し・の・学館に、不妊の外
来、じゃなく、赴任したも、もうない!」

思わず目の前のカニ長に頭を下げた。

「かに!・・・あ・・・堪忍・で・すので。弱体者で・」

「センセー、唄でもいいですよ」

ちよつと遠くから声がかかった。

「そうだ、なにか一曲!若いんだから・・・」 別の

声が、いらぬ助け船を出した。

んん? スピーチできないから、って、若いからって、

「唄」ってなんだよー! そもそもボクはカラオケなんだあ大嫌いだ、中学校の合唱祭以来、人前で歌ったこと
なんかないのだ・・・

と、そこに隣の宴会場から、

『チャあ・ンちゃ・んチャ・んチャ・んチャ・・・
なあみいだがつ・こつぼれつないようおうおうに・』
どつかで聞いた懐メロが漏れてきた。どうしたこと
か、これがズレまくった酩酊認知回路には裏拍子のリズムで聞こえてしまった。

運命のポイントが切り変わった。マイクを持たされ

た頃には、頭の中がすっかり、ボブ・マーリーのワン・ラブで一杯だった。

「ワぁンラブ・レッツゲツ・・オール・・」

覚えてるのはサビだけで、あとはハミングでうなるだけ。体を揺らしやあソレらしい。酔いと照れとで、耳まで熱い。

それでも、若い事務員が箸を掲げて左右に振ってくれた。ちよつとノつてきた。振るならサイリウム出せ、なんて、あは、オタ芸打ってる場合か・・・、思考力オスが渦巻く頭の中は、ますます煮えてくる。

「あれは何の歌かね？」学長が若い教員に聞いている。

「レゲエですよお」

「れげい？何かね、それは。なんだか掴みどころがない歌だなあ・・」

「ジャマイカの音楽じゃなかったかな？」

お、少しは分かるヤツもいるか、恥も少しは報われる、そう思った刹那、酔ったカニ長の一言が起爆装置をセットした。

「イカですかいな？あの踊りやあ、タコじや思ってた・
S H A ・ S H a ・ S H a」

なにいい失礼な！カニのくせに！

「まあ、タコでなくても、じゃあ、まあいいカあなんて・・ H y a H y a H y a」

ふざけんな！！で、スイッチがオン。思わずカニの手からビールを奪い取った。

「タコは当然、スミ吐く、です！」と、ビールを口に含んで、思い切り顔に吹きかけた。

カニは泡吹き、慌てて横ざまに逃げようとする。そこを逃がさず取っ捕まえて、頭にかじりつく。なにせカニはタコの大好物なのだ。

「逃がすか！これがボク流の挨拶じゃあ。。。」
そう怒鳴った、あとの記憶はない。

翌日、バカっ早く目覚めたのを幸いに、朝明けの中、ひとり宿を出た。

田舎の朝日は爽やかで、まぶしかった。

三 ホームページ委員会

平成二十五年四月一日・月曜。

歓迎会・悪夢の夜から、修復の日曜日を経て、大学初出勤の朝を迎えた。

幸か不幸か修羅場の記憶はかなり臆気で、何が現か幻か、流し絵のマールブルに似た、混沌の中にあった。

ここは開き直って行こう。心に決めた。どうせ全員が酔っ払いだったんだ。

中古ながら可愛い愛車をコロがして大学の麓にたどりつくと、まだ八時半だというのに車が溜まっている。目を凝らすと、車体一杯にアニメキャラをペイントした「痛車（イタシヤ）」や、天井から大きなモニターとスピーカーをぶら下げた、LED満載の音響族のデコ車が何台か混じっている。有明だか大黒だか分からない。いずれも学生たちの車だ。リヤから手書きのプラカードやら横断幕やらを、下ろしては運んでいる。と、今日がガイダンスなのを思い出し、クラブ勧誘だと気がついた。狙いは今日が前段の二年生、そして明日、明後日は本命の新入生だ。

学生の群れを縫ってやっと駐車場に辿り着くと、もう九時が迫っていた。初日から遅刻はマズい、とは思ったものの、どこで出勤チェックするのかが分からない。わかりにくい案内図をあきらめ、とりあえず遠くに見える時計塔の建物に辿り着いた。そここそが総合事務のある本部棟で、そしてそこに、あの、カニ長が、いた。

深呼吸して、おはようございますつ、と事務室に入

ると、カニ長がビクツと少し跳ねて、振り向いた。

「あ、お・はつ、よ・うお・ぐおざい・ますう」

聞き覚えのある、甲高い声だ。やはり例の件は覚えていられるらしい。脂汗が吹き出たおでこに、バンドエイドが貼ってある。

こちらは努めて明るく、

「どうも、一昨日はありがとうございましたっ！」

周囲を見回し

「本日より、よろしくお願いいたしますっす！」

女子職員が顔を伏せ、クククツ、と肩を揺らした。

「出勤のチェックはどこでするんでしょう？」

「あ、それはですねえ」と、カニ長が動揺を押し殺して、慇懃に答える。「この出勤簿に押印してください」

「ハンコですか？」

「われわれ事務職員と違って、先生方にはタイムカードはありません。残業手当もありませんし。」

「え、ないんですか、じゃ、試験作成や入試作業で遅くなった時は？」

「手当はありません。弁当は出ますが。」

「べんとおう？、それだけですか？」

「だけ！です。残業などの手当が全くないんですから。だいたい先生方はタイムカードなんてあったら、お困りでしょう？実験なんかで夜中までいたり、休日に来たり、自由に出入りされたいんじゃないやありませんか？全部を労働時間にすると、労基法上面倒なことになりますので。」

コアタイム&フレックス制にしてくれたらいいのにも思ったが、今日はやめておこう。

「ご案内の通り、午後、本部で辞令交付がありますのでご出席ください。」

「え、そうでしたっけ？」

「それから、すでにメールでお送りした時間割通り、来週月曜から先生の講義が開講します。初日にはシラバスを学生にお渡しください。」

「え、シラバス？授業概要はもう出しましたよ」

「授業概要はシラバスではございません。どうぞホームページ上の作成手引きをご覧の上、お取りまとめ下さい。」

「そんなもの読まなきゃ書けないんすか」

「お読みなった方がよろしいと思いますよ。先生方みなさんご苦労されてますから。ぜひ、カリキュラ

ムポリシー、ディプロマポリシーもご参照の上、作成なさってください。」

ん？講義について書くんだから、カリキュラムポリシーとやらを読め、は分かる。だが、ディプロマのポリシーってなんだ？。ディプロマⅡ学位、学士（なんとか学）ってのはもともと、それぞれの学問領域が持つてゐるポリシーで出してるんじゃないの？と思った。さて、ボクが出た大学にそんなモノ、あったんだろうか？そういえば同窓の老先生は「ぼくあずつとノンポリだった」なんて言ってたけど、あれはなんだったんだろう？

事務のカニ長が得意げに言う。

「文価省が求めている3つのポリシーです。入学から卒業まで、大学教育の質が問われているのです。」

「へー、知らなかったなあ。」

「先生、本学のホームページ、ご覧になりましたか？」

「ああ、はい。あの、男女の学生がバカ笑いしながらジャンプしてる写真の、ですか。」

カニ長がイワガニみたいに青くなった。

「バカ笑いは余計です！彼らは理事長のご親戚で

す！！」

危うく、バカ笑いするところだった。

「ホームページには、本学の沿革から建学の精神、学長のご挨拶とか、カリキュラムや学生の声など、・

・」カニ長はだんだんヒートアップしてきた。

「あれこれ盛りだくさんすぎて、読み切れなかったもので・・・」とボク。

カニ長は食い下がる。

「どうぞもう一度、じっくりお読み下さい！」

こちらも意地になり、すこし意地悪にもなってきた。

「もう一度って、どこをどうみたらいいんですか？

だってあのサイト、異様に見にくいんですもん・
・」ここで、負けまい。「継ぎ接ぎで、とっ散らかってって、とんでもないとこ行くんですよ。この前なんか『本学志望の皆さんへ』を見てたら、いきなり『寄付のお願い』なんかに飛んじやって、もうめっちゃくちゃ！」

カニ長は口角泡吹いて反論し始めた。

「そんなことありまっしえん！！迷った時には、サイトマップがありまっしゅ！」

「サイトマップだって、どこにあるのか分かんない」

い」

「と、とにかく！その中のどこかにデふね、本学のポリシーがうたわれていましゅ！」

興奮すると、カニ長は口角泡を吹くだけじゃなく、シュウシュウ言うらしい。今度は茹でたてのように赤くなった。とても食べる気にはならないけれど。

このやり取りが災いして、翌日ボクは、厄介なＩＴ・ホームページ委員会に入れられた。

四 入学式

四月七日、よく晴れた日曜の朝だ。まだ段ボール箱だらけの部屋を見渡し、本当ならこいつらを何とかしたいところだ、そう思いつつ、ボクはスーツに着替え、ネクタイを締めた。

先週火曜日朝の混雑に懲りたので、少しばかり早めに出て、式場に着いた。

体育館は便利な式場だ。入学試験から入学式、卒業式、何でも出来る。ここはバスケットコートが一面とれる程度の床面積だが、パイプ椅子を並べれば数百人は座れる。

これに加えて、さして広くないが二階席があった。正面部分が保護者、両脇が教員に当てられていた。教員控え室で出勤簿にハンコを押してから、席に向かった。新参者としてどのあたりに座るのが妥当なのか迷ったが、えいつ、と踏ん切り、最前列に陣取った。見下ろすと、開会まであと一五分ほどなのだが、席がガラガラだ。保護者席もパラパラである。入学式に親が来る、などと驚いていたのは遠い過去の話だ。学生の大半は親の支えで学んでいる。国公立でさえ学費は、授業料だけで四年間に二〇〇万円を超える。私立になればその二倍、三倍は当たり前だ。喩え奨学金を貰ってたにせよ、およそ成人をただ養っている構造は変わらない。今様に言えば、親たちは最上位の「ステーキホルダー」なのだから、最上位席が与えられて当然なのだ。そう思いながら保護者席を見ると、諸氏、これからの四年間、のしかかってくる重荷を耐えているようにも見える。正面の二階席を見ると、奥の方にホルンが見えた。吹奏楽団が入ってるようだ。ラッパのクラブがあるのだろう。少々寂しい会場も、演奏が入ればちよつとは華やかになる、なんて期待した。

目を凝らすと、彼方のホワイトボードに式次第が

貼つてある。達筆なのは分かるが、いかんせん、遠すぎる。

式次第

- ・ 開会の辞
 - ・ 国歌斉唱
 - ・ 入学許可報告
 - ・ 学長式辞
 - ・ 理事長祝辞
 - ・ 来賓祝辞
 - ・ 新入生宣誓
 - ・ 在学生歓迎の祝辞
 - ・ 校歌斉唱
- と、以上が貼り出された式次第だ。

突如、場違いなファンファーレが館内に鳴り響いた。節回しは東京五輪のに似ているが、調律が合ってなくてへたくそだから、別の曲にきこえるのかも知れない。時折、ピピッ、とかプオおーとか、野獣のような異音が混じる。なんだか場末の動物園のようだ。うら寂しい気分になる。脳裏に浮かんできたのは、かつて通りがかったとあるローカル・テーマパークの開門風景だ。パステルカラーの風船で飾りつけられた、しぶいレンガ造りの

城門だった。ポップコーンが似合うメロディーに被せた、張り切った呼び込みと、録音された子ども達の歓声が、だれも居ない広場に響いていた。。。

バタバタと足音がした。階下を覗くと、小走り入ってきたいくつかの人影があり、その後に足取り悠然と小集団が続いた。ペコペコ周囲に頭を下げている先の数人は誘導の教職員で、ゆったり席に向かうのが新入生だと、まもなく分かった。湾岸辺りをデコ車で流してそんなアンちゃんたちが混じっている。それから学生席が少し騒がしくなった。会場の外では、映画の上映案内のようなアナウンスが流れている。

「まもなく入学式が始まります。新入生、保護者の皆様は・・・」

なにやら耳慣れぬ楽曲が流れてきた。8ビートの軽佻浮薄なメロディーだ。二〇年以上前のアニソンのようでもある。もしや、これが校歌なのか？後から聞いた話では、地元に縁のあるJ・POP歌手に依頼して書かせた自慢の代物だそうだ。

音楽が止み、場内アナウンスが流れた。

「ただ今より、平成二五年度、明総学館東京国際情報栄養人間総合科学大学入学式を挙行いたします。一同起

立。」

緞帳がゆっくり上がってゆく。

「着席」

壇上に学長、理事長ほかのお歴々が現れた。度肝を抜かれた。ビッグサイトの幻影か？ なんともし派手な出で立ちである。学長は深紅色のガウンに金色の、他は黒ガウンにシヨッキン・ピンクやネオン・ブルーのサテンフードが付いている。帽子も英国の歴史ある大学の礼帽をまねながら、房飾りの代わりに旧日本軍の大礼服用の羽根が付いている珍妙なデザイン。殆どコミケのB級コスプレだ。これも後から聞いたのだが、新たな歴史を作るため、地元縁の「世界的に有名な」デザイナーに頼んだ式服だそう。ヨーロッパの伝統と日本の格式を融合した、ニュー和風デザインだ、という。昆布とスルメのサンドイッチ。考えるだけでアゴが痛くなった。

「国歌斉唱。全員、ご起立ください。」

吹奏楽団の、超スローなテンポに合わせて君が代を歌う。一拍が長すぎて「さざれ石」が割れそう。 「石の巖」じゃない、つてのに！

まずは、入学許可報告にて、本年度入学生数が発表

された。全学で552名。うちボクが直接面倒を見ることになる健康栄養科学部入学は104名だった。定員80に対して三割増しは、文価省から「お叱り」を受けないギリギリの数だ。正規格者の「歩留まり」が予想より良く、補欠での調整に失敗した、というのが毎年のエクスキューズだった。

学長式辞が始まった。ついで理事長、来賓、保護者代表へと祝辞が続く。

学長は学者だ。学問は出来るのだろうがハナシが異様にへたくそだ。異常気象からSTAP細胞、果ては高倉健からレバ刺し禁止まで、とつちらかつてスベリまくる。理事長は創立者家系の元ビジネスマンだ。歯切れは良いが、学問の香りは無い。世界金融・企業買収・電気料金・牛井値上げ・世の中カネだ、そんな内容。県知事の祝辞は副知事代理が代読した。内容は、いつこの学校で垂れても不都合ない訓示だった。どうせ原稿も秘書の作だろうから、代筆の代理による代読だ。屁ほどもありがたくない。およそこの手の祝辞は、白米の握り飯に何を入れるか、程度の違いしかない。3つも食べれば飽きてくる。だいたい、誰もが挟みたがる小ネタは時事ものと決まっている。先を越された演者

の焦る姿が唯一の楽しみどころだ。まあ、あまり突拍子もない御高説も困るのだが、入学祝辞の骨子はみな、以下の通り。

「桜咲く今日のよき日におめでとう。これから四年、期待するからベンキョしろ。」

そんな中でも少し感じるところがあったのは、保護者代表の祝辞だった。我が子に自らの体を食べさせるカバキなんとか、いう蜘蛛ではないが、老後資金を削って学ばせる親の思いが滲んでいた。学費がなんせ高いものなあ・・・学生諸君は分かっているのか？

これらを受けて、新入生宣誓と在学生・歓迎の辞。

「私達は・・・どうぞよろしく」

「みなさん・・・ようこそ」

教職員添削済みの文だろうが、「おかあさん、おとうさん」という語だけで、そのレベルも知れる。在校生の曰く「気軽に話せる先生はみな楽しい人」だそうだ。期待されてる教員像が、そこか。まあ学生は、上手く言葉に出来ないだけで、心は学究に燃えている。そう信じよう。でなければ、こちらもやりきれない。

「校歌斉唱。全員、ご起立ください！」

向かいからまた、さっきのチャライメロディが流れてきた。ところが、前奏も終わって斉唱とおぼしき部分でも、とんと歌声が聞こえてこない。考えてみれば、そりやそうだ。新入生は歌ったことがない。数少ない出席の在校生だって大抵、所詮は二度目だ。大声で歌えるわけではない。その上にきて、この歌詞だ！座席に歌詞カードが置いてあった。こんなの小声でも歌う気がしない。

「わーかい青春・はじめて翔んだ・イエーイ！ めいそう・めいそう・・・」

めまいがして、疲れはピークに達した。

後日、一言、苦い感想を言ったら。学生部の委員会にも入れられた。ボクはこの先、一体いくつの委員会に入れられるんだろう。

〈へ続〉

◆お断り◆この小説は全くのフィクション（作り話）です。登場する人物・団体・名称等はすべて架空のものであり、実在のものとはゼンゼン全く関係ありません。

小説

彼岸花

ゆとろ 満

その日は台風の影響か、朝から蒸し暑くどんよりとした日であった。午後になると天気は猫の目のように変わった。急にスコールのような雨が降り出したかと思うと二十分もしないうちに青空が顔を出し、回復したかかと安心する間もなくまた黒雲が空を覆い雨が降り出す。そんなことを幾度も繰り返した。

「まるでタイのような気候だ。これはスコールだ。日本もいよいよ熱帯になってしまったか」

宮城大介はそんなことをつぶやきながら仕事を後にした。幸い雨は上がっていた。しかし宮城は念のため、だれかが仕事場に置き忘れていったよれのビニール傘を手に入っていた。電車の中は夕方のラッシュでかなり込み、人

いきれと湿度の高さとがあいまって蒸し暑かった。バスに乗り継ぎ停留場に降りると近くの森に靄がかかっていた。体にねっとりまとわりついたじめじめした感覚をぬぐい去りたいと宮城は歩を速めた。

「あなた、携帯が鳴っているわ」
妻の静佳が叫んでいる。

シャワーを浴びている宮城にはよく聞き取れない。浴室の扉を半開きにして妻に聞き返す。スマートフォン受信音が鳴っていることを聞き取ると「上がったら掛け直すからそのままにしておいて」と返事をする。

シャワーを終えてタオルで頭髪を拭きながら宮城はスマートフォンをチェックすると、教子子だった浦上優二から

の着信であつた。三日前に宮城の仕事場近くの寿司屋で一緒に食事をしたばかりであつた。宮城はその時のお礼だろうと思ひ、食事の後にでもゆつくりと掛け直そうとスマートフォンを閉じた。

浦上優二が宮城の勤務していた桜小學校に転校して来たのは優二が五年生の時であつた。普段は転入生を担当が連れて来て校長に紹介するといふことはなかった。しかし、優二の場合は別であつた。担任の遠山潤は生真面目な顔を一層緊張させて校長室に入つて来た。その後ろには一年生担任の中村祥子がいた。中村は教員経験四年目の若手である。遠山が優二を、中村が花菜を宮城に紹介すると、二人を廊下で待つように指示した。そして、「校長先生にご相談したいことがあります」と、おもむろに口を開いた。中村も生真面目な表情を崩すことなく大きく頷いている。

驚いたことに優二は転入手続きに一人で来たのだ。正確に言うとう妹の花菜と一緒にであつた。花菜は一年生でありながら兄とだけで来たのである。当然ながら転入関係の書類は持参していた。しかし、転入する児童が保護者なしで手続きに来たなどということは前代未聞のことであつた。母親はなぜか優二の二歳上の日向ひなたを連れて中学校に行つたのである、と優二は語つたという。事情として母親だけの一

人親家庭であることにあつたのかもしれない。

ことであつた。書類が揃つていれば受け入れるのは当然のことであつた。しかし、保護者との面談は必須である。宮城は「まず相手先校の担任に連絡をして事情を確かめるように、そして浦上の母親に連絡をして都合を付けて来校するよう伝えて」と遠山に指示した。程なくして遠山が再び校長室に来た。彼の話はさらに驚くような内容であつた。優二は確かに在籍しているがほとんど登校はしてなかつたと言ふ。不登校だつた訳ではない。妹の面倒を見るために登校をしていなかったといふのである。兄がいたが、その兄は不良仲間と遊び歩き妹の面倒は全く見なかつたと言ふのである。しかも転校は既に三回であつた。後で聞いたことであるが母親は優二に「今度の桜小學校には毎日通えるよ」と、言つたらしい。また、母親が優二と花菜の転入手続きに來ないで兄の転入手続きに行つたのは、兄の日向が手続きをせず途中で逃げ出すことを恐れたからであると言ふ。担任の遠山は「校長先生これは重荷ですね」と言い、中村は「校長先生どうしたらよろしいのでしょうか」と続けた。宮城も内心「厄介ごとが増えたな」とは思ったが、口には出さず「とにかく実情をしつかりと把握し、その後対処方法を皆さんで考えましょう。とにかく書類や手続きには問題がありませんので本校の児童として一応受け入れましょう。正式には母親と面談してからにいたしましょう。事務職にもそのように伝えておいてください」と答えた。

案の定、優二の学力は一年生の初期段階のものと云ってよかった。かろうじて平仮名の読み書きと簡単な足し算、引き算が出来る程度であった。一年生の花菜も入学以前の学力であったが、担任の中村は授業の中で何とか個別指導を行いながら学力を付けて行こうという決意を宮城に伝えて来た。問題は優二であった。彼の現状では国語や算数の授業は完全な「お客さん」になるのは必定であった。宮城は教頭や教務主任と相談をした。個別的な学習支援についてであった。教頭も教務主任も授業を持っており、その他にも独自の業務を抱えているので恒常的に優二の学習支援を行うことは困難であった。結局校長の宮城が仕事の合間を縫って個別指導を行うこととなった。このことは学校の運営がぎりぎりの教職員でなされている現状を如実に示していた。校長が児童の学習指導をするというのは美談である。しかし、このような美談がまかりとおる日本の教育の現状は必ずしも正常とは言えない。欧米の教育現場では考えられないことである。

優二は知的な遅れはなかった。しかし、知的能力を伸ばす土台となる時期にほとんど知的な刺激や訓練を行っていなかったためか、学習の能力は極度に低下していた。言ってみれば何年も放置されたままの畑のようなものであった。地面はかちかちに固まり、雑草がびっしりと生い茂っている状態である。彼の脳はこれと似たようなものであった。

従ってかけ算九九もいくら練習しても定着しないのである。覚えたかなと思っても翌日になるときれいさっぱりと忘れていた。当初、宮城は彼の脳の現状への理解がなかったものであるから、単に優二の努力や意欲の問題と決めつけてしまっていた。従って、覚えの悪いことや忘れてしまうことに対し大声で叱りつけることもままあった。だが、どんなに叱られても優二は校長室へ嫌がらずに通い、一生懸命に学ぼうとしていた。ある日、優二が「僕の頭が悪くてすみません。でも、僕は毎日学校へ来られるようになったことがうれしいのです」と、しみじみと語りかけてきたことがあった。宮城はこの言葉に胸を衝かれた。そして、自分の優二への理解のなさを痛感したのだった。それを境に宮城の優二へ対する対応が一変した。怒ることはなくなり、粘り強く、しかも噛み砕くように丁寧に教えるようになった。このことが効を奏したのか優二の理解力も段々と高まって行った。宮城は教えることは力業ではないことを改めて知った。学ぶ環境を整え、学ぶ者の心の状態を解きほぐすことが先決であることを教えられた。

「ねえ、さっきのスマホの着信は誰だったの」

「ああ、桜小学校校長時代の教え子だよ。ちよつと事情があった子だね。卒業してもう十年ほど経っているけどね」
宮城は妻に説明しながら、返信をしなければならないと

思う。三百ミリリットルのカンビール一缶で宮城はほろ酔いである。段々に億劫になって行くのが分かって来た。

「あなたは幸せね。担任だったらまだしも、校長だったあなたに当時の在校生から電話がくるなんて普通ないわよ」

「その子は事情があつて五年間ほとんど通学せず、従つて学力がほとんどなく校長室で学習支援をした子だったのよ。だから他の子たちとは事情が違うという訳」

「なるほど。でもその子幸せだったわね。手厚い個別指導を受けて」

妻の静佳も小学校教員であつた。従つて小学校の内情とか子どもたちの抱えている問題などはよく承知していた。妻の言葉に宮城は「幸せだったかどうかは分からないよ」と口から出かかったが止めた。きつと話が長くなるに違いないと思つたのである。ほんのりとアルコールに浸された脳は細かな説明など忌避するに違いないと思つたからだ。

だるさを増した体をまるで持ち上げるように「よいしょ」と声を出して宮城は二回の書斎に向かった。椅子に座るなりスマートフォンを取り出し優二の着信番号をクリックした。しばらく着信音が鳴つて、「はい」という声が聞こえた。「宮城だけど浦上君ね。さつき電話をもらったけど」

「あつ、先生。ちよつと困つたことが起きて」

「どんなことよ」

宮城は瞬間お金のことかなと思つた。

「ちよつとややこしいので電話ではなく直接会つてお話ししたいんですが。出来たら明後日の夕方五時頃がいいんですが」

宮城は優二が先日の食事の件には一言も触れることなく、その上一方的な言い方に気分を害した。しかし、努めて明るく

「ちよつと待つてよ。予定表を確認するから。五時半頃だったら都合つくね。場所は」

「先日の寿司屋でいいです」

「寿司半藏ね」

「そうです」

よろしくと言うどころか、一方的に押しつけて来るような言い方に宮城もさすがにむつとした。先日の寿司屋での猫なで声で「せんせい、せんせい」と持ち上げるような言い方とは大違いであつた。

「ところでこの間の寿司はどうだったかね。花菜さんはいぶ気に入つたみたいだったけど」

宮城はわざとらしく言つた。言つた瞬間大人げないと悔やんだ。相手は二十歳ちよつと過ぎの若者である。言葉遣いは未熟であつてもしょうがない。これから社会に揉まれて学んで行くはずである。年長者らしく寛大な気持ちを持つべきであると舌打ちをした。

「ええ、まあでした」

優二の応えにさすがに宮城も腹に据えかねてきた。まるで喧嘩を売って来ているようにも取れた。たった今の自責の念が吹き飛んでしまった。

「そうか。あまり口に合わなかったみたいだね。明後日の場所は替えたらどうかね」 宮城はほんの少し怒気を含めて言った。

「あつ、いいですよ、あそこで。駅近なので便利ですから。じゃ、明後日五時半半蔵で」

そう言うとき優二は一方的に電話を切った。

宮城は酔いもすっかり醒めてしまった。優二の度重なる無礼な物言いに怒りがふつふつと湧いて来るのを覚えた。

「あんな無礼な言い方に我慢する必要はなかった。すぐに断ればよかったものを」と、自分をなじった。それにしても宮城は思った。あの態度はなかりうと。小学校時、それなりの熱意をもって懇切丁寧に教えた。それに応えるかのように感謝の気持ちをもつて示していた優二であった。

子どもと言え、その人柄に宮城は密かに尊敬の念さえ持っていたのである。純朴で謙虚、そして素直な人柄だった優二だからこそ小学校卒業以来の出会いであったが、すぐに会うことを承諾したのだった。宮城はひどく裏切られた思いに駆られるのであった。あるいは、とも思った。宮城の気が付かないところで傷つけてしまったのかとも思う。し

かし、終始和やかに過ごし、別れ際に優二は、宮城の手を両手で強く握りしめ感謝の気持ちを過大なほど述べた。妹の花菜もあふれるような笑顔で感謝の言葉を述べ、あまつさえ宮城の体を抱きしめ別れを惜しんだほどであった。やはり、と宮城は思った。きつとお金の無心に違いないだろうと。だからこそ逆に強い態度に出たのだろうと。宮城は先ほどの怒りや不審な気持ちが氷解して行くようだった。「やはりそれに違いない。気の毒な境遇が続いていたからな。しかし、お金の無心には応えてはならないぞ」と気持ちを引き締めるようにその言葉を口にした。

宮城は教員を退職後、カラベ鉄道さくら駅近くに学習支援を主目的とした事務所を開設した。現在是不登校や学習遅進児たち総勢十人程が学習支援を受けに通っている。その他保護者の子育てや教育相談も行っている。また、近くの短大に週一回非常勤講師として通っている。物事というものはいったん動き始めると、仕事量は増えることはあっても減るということはない。あたかもその仕事が人格を持って宮城の場合もそうである。傍からは退職後の気ままな片手間仕事のように見られ、よく「幸せな第二の人生ですね」とか、「好きなことをやって過ごせるうらやましい余生」とか言われている。しかし、実際は現職の時と同じように雑事や授業の準備などに追われる多忙の日々となっているのだった。

事務所は友人の広田洋一の所有ビルの五階の一室である。広田が無料で提供してくれたものである。広田は宮城が桜小学校の校長の折に、PTA会長をしていた。広田の年齢は宮城のちょうど一回り下であった。その年齢差にもかかわらず何かと気が合い親交が深めていた。広田の本業は不動産業である。不動産の売買、その他に数力所にビルやアパートを所有し、その賃貸も行っていた。全て自社所有のものばかりであったので極めて安定した業績を残していた。宮城が定年退職を一年後に控えた時のことであった。広田が「先生、退職後はどんなことをする予定ですか」と尋ねてきた。宮城は、不登校や学力遅進の子どもたちの支援の教室を開きたいという話をした。それは宮城が現職の頃から温めていた計画であった。その時、広田は「それならうちのビルの五階を使ってくださいよ。どうせ借り手はなく空いているのですから」と、いとも簡単に言うのであった。「駅近の便利なところですから家賃は結構するんでしょう」と答えた。すると広田は「なあにただで結構ですよ」と軽く言うのであった。元々広田は度量の広いところがあった。折に触れてのPTA役員の懇親会や行事後の懇親会などでは無造作に大枚をはたいて驚かせることが度々であった。しかも会議や行事計画などに対しては余計な口を挟まない。それどころか副会長以下に任せっきりであった。任せっき

りであるとそれはそれで無責任の謗りを受けるのだが、広田の場合はその人柄のせいか非難めいたことは一切なかった。そんなこともあって他のPTA役員からは絶大な信頼があった。その上、学校の行事や運営などには批判などは一つもなかった。むしろいつも協力的であった。こんなわけでPTAと学校は蜜月の関係といってもよく、他の学校からは羨ましがられるほどであった。従って宮城の学校経営にも大きなプラスであった。ただ何事も針小棒大に言う癖があった。さらに隠し事が出来ず、内緒事の相談は難しいところがあった。しかしそれも彼の愛すべき人柄と考えると何の障害にもならなかった。

宮城が退職一ヶ月程前に広田の会社の近くの行きつけの焼き鳥屋で飲んでいたら、広田の勧めで始めたスキューバダイビングの話で盛り上がった。広田の妻はフィリピン人で、彼女の実家はセブ島にあった。そのセブ島はダイビングのポイントが至るところにあり、海水の透明度も高く、魚種も多いことで有名であった。そこをダイビング用のボートを借り切って一ヶ月ほどゆっくり滞在しようというのが広田の勧めであった。いかに退職後の話とはいえ、さすがに一ヶ月も家を空けることは不可能なことであった。ましてフィリピンに一ヶ月もの滞在を宮城の妻が許すはずもなかった。宮城はやんわりと「ちよっと検討しましょう」と答えた。広田は「そうですね」とすんなりと引つ込めてし

まった。広田の淡泊さでもあった。

実は、宮城は彼の念願であった学習支援のボランティア団体を立ち上げる計画を進行させていた。残された課題は事務所のことであった。以前この事務所借用について広田はいとも簡単に理解を示していた。しかし、宮城にすればいくら友人でも簡単に切り出せる話ではなかった。しかし、それを解決しなければそれ上計画が進行しないのである。宮城は飲みながら、且つ彼の俗人離れた海外スキューバの話に相槌を打ちながら事務所用の話の切り出す機会を窺っていた。広田が折良くトイレに立ち上がった。宮城は手を拭き拭き椅子に戻った広田に「実は会長に相談がありました」と話し掛けた。宮城は広田のことをPTA会長時代の口癖のままに会長と呼び続けていたのだ。

「何ですか」

という広田の言葉に、宮城はさも言いにくそうに、

「実は退職したら不登校や学力遅進児の学習支援をしたいと計画を進めているんですよ」

「なるほど」

広田は全く関心を示さない。宮城は「これは脈が無いな、もしかしたら忘れてしまったのかな」と思い、話を切り出すのをためらった。しかし、駄目元と思い、

「以前にお願いしたと思うんですが、事務所設置の件です」

「あつ、そんなことがあったみたいですね」

広田はやはり忘れてしまっていたのだと宮城は思った。

「事務所をお借りできないかどうかと思ひまして」

「ああ、思い出しましたよ。いいですよ、使ってください」

「いいんですか。本当に大丈夫ですか」

宮城は喜びを押し隠しながら念を押した。

「いやあ、問題ないですよ。どうせ遊ばしている部屋ですから。先生に有効に使ってもらえれば部屋も僕もうれしいですよ」

広田はめずらしく洒落たことを言った。

「ところで家賃はいかほどで」

「先生はボランティアでやられるんですよ。それなら僕もボランティアですよ。気にしないで遠慮無く使ってください」

宮城は内心小躍りしたいほどのうれしさであった。いくら友人の関係とは言え、広田がいとも簡単に承諾を下すとは考えもしなかった。「多少考えさせてください」とか「父親にも相談をしないと」ぐらいは言うはずと宮城は考えていた。宮城は広田の度量の広さと決断の早さに感動し、感謝した。この夜の酒は殊の外旨く、量も進んだ。

宮城が広田から事務所を借りるに至ったのはこのよう経緯があった。

宮城はあまり気の進まないままにさくら駅ビル三階にある「寿司屋半蔵」店に向かった。駅の時計はちょうど五時を示していた。約束の時間にはまだ間があった。「何も早く行つて待つ必要はないな。むしろ少し待たせた方がいいかな」と宮城は思い、下の階の本屋に向かった。注文したい本のことを思い出し、いい機会だと思った。宮城の欲しい本はやはり在庫がなく注文をしなければならなかった。手続きを終え、書店の本棚や平積みの本を眺めているうちにあつという間に約束の五時半は過ぎていた。宮城はゆつくりと歩を進め五時四十分に店に入った。店内に「いらつしやいませ」という大きな声が響いた。校長時代の教え子の石川が近づいて来て「先生、こんにちは。今日はお一人ですか」と笑顔を浮かべながら尋ねて来た。「待ち合わせなんだけど。浦上と言うけど来てるかな」と聞いた。「お見えになっておりません。開店してすぐですのでお客様は先生が初めてです」と石川は答えた。「それじゃ待たしてもらおう。奥の個室の方がいいな。多分私を含めて三人だと思う」。石川は「かしこまりました」と言いながら奥の部屋に案内した。部屋と言っても薄い板で簡単に仕切られているだけである。四人ずつのテーブルが二つ置いてある。いわゆる炬燵仕様になっている。足が伸ばせて楽である。それに他の客の視線を気にしなくてもよい利点があった。

宮城が席に着いて十分程経つて優二が石川に案内されて入つて来た。

「暑いですね。もう九月も半ば過ぎでしょう。天氣がヤバイつすよ。ああ、俺生なまなう中ね。暑いので出来るだけ早くね。先生も同じでいいですね」

「ヤバイのはお前だろう」と、宮城は叫びたくなった。人を誘つておいて遅刻はするし、挨拶もろくにしない。この男は一体何様のつもりだろう」と、さすがに宮城は氣色ばんだ。

「料理は後で」という優二の言葉を聞いて石川は下がつて行つた。

「天氣の話はいいとして、ところで話つていうのは何なのだい」

宮城はむつとして言つた。

「先生、話はまず一杯飲んでからにしましょう。今日はちよつとした力仕事をして来た帰りですので、喉がカラカラなんですよ」

そう言う優二はおしぼりで顔から首、そして腕をこするように拭いた。おしぼりはたちまち黒く変色した。力仕事をして来たというのは本当のことようであつた。

「この間聞かなかつたけど仕事は何をしているの」

「仕事ですか。なあにたいしたことはしていませんよ。まあ言つてみれば派遣業みたいなものですよ。いわゆる3K

と言われる仕事は結構人手不足なんです。いろいろな伝手を頼って3Kでもやれる男を捜し、3K会社に紹介しているんです」

「それはなかなか気骨の折れる仕事だね。じゃ、結構実入りがいいんじゃない」

「それが先生大変なんです。人の紹介と言っても、いわば商品みたなものです。例えば病气持ちとか、体力がない者、それと根性なしとか、こういうのを不良品と言っているんですが、この不良品は返品されちゃいます。その際、返品の手数料をこちらが払う仕組みになっているんです。ケースによってまちまちですが一人当たり平均三千円ってところですか。大きいですよ。とにかく一週間が基準ですから、この期間だけは辛抱させるんです。でもね、先生最近は本当に忍耐力のない奴が多くなつて参つてますよ。もう少し忍耐力を付ける教育をしてください」

優二は能弁であつた。こんなにおしゃべりな男とは宮城も思いもしなかった。しかも「忍耐力を学校で身に付けて」などと言われるとは内心驚いてしまった。「やはり社会に出て揉まれたせいなのか」と宮城は改めて優二の顔を見つめた。

「あつ、ビールが来ましたよ。まず、乾杯と行きましよう」

そう言うと優二はジョッキを持ち上げた。そして一気に

飲み干すと、プツプツと息を吹き上げた。惚れ惚れするような飲みっぷりであつた。その後ビールを追加し、さらにお任せ寿司やサラダなどを勝手に注文して行つた。宮城はジョッキのビールをちびちびと舐めるように飲んだ。

「先生、どうしたんですか。もつとガンガンやってください。どうせ先生のおごりですから」

宮城は二の口が告げられなかつた。そして、優二の狙いはこの「たかり」にあつたのだと得心した。月に一回ほどならおごつてもよいだろうと宮城は安堵した。飲んで食べたとしても一万円内で済む話である。宮城の住む社会とは別な社会を優二から聞くのも悪くないと思つた。オーダーした寿司が出てき、ビールの空ジョッキもいくつか並んだ。宮城は再び優二に今日の本題について促した。

「実は」と、優二は一呼吸を置いて、「妹のことなんです」と、続けた。

「妹、花菜ちゃんのこと」

「花菜ちゃんがどうしたの」

「先日、先生にここでご馳走になつたでしょう。その時のことです」

「その時何かあつたの」

「先生、心当たりはありませんか」

「心当たり」

優二は変なことを言い出してきたと、宮城は少しばかり

り不安な気持ちに襲われた。

「何もないけど。三人で結構楽しく過ごしたじゃないか。心当たりと言えばそれくらいだよ」

「先生、とぼけないでくださいよ。こっちにはちゃんとした証拠があるんですよ」

「おい、いい加減なことを言うんじゃないよ。それとも言いかかりを付けて脅そうというのか」

さすがに宮城は怒りを隠すことが出来なかった。

「だいたいね、先ほどから君の態度は何なんだよ。無礼と言うか、傲慢にも程があるじゃないか。卒業以来初めて出会って、君たちが元気に過ごしていると言うので私も心を動かされご馳走したんじゃないか。言いたくないけど、普通はそのお礼を言うのが先だろう。それもなしに『心当たり』だの『とぼけないで』などの言い草はないだろう。それなんだ、『証拠』などとは。まるで私が犯罪でも犯したようじゃないか」

宮城の怒りの言葉は止まることがない。

「『証拠』と言うんだったらどんなものかここで見せてもらおうじゃないか」

「先生がそこまで言うんだったら証拠をお見せいたしましょう」

そう言うと、優二はおもむろにスマートフォンを取り出すと画面を表示し、「先生これを見てください」と、差し

出した。

宮城は差し出されたスマートフォンの画面を見た。そこには宮城と花菜が笑顔で並んでいる画面があった。久闊を交わす教師と教え子の麗しい写真と言えば全くその通りであった。

「この写真のどこが問題なのだ。えっ、一体」

「先生、よく見てください。先生が花菜の手を握っているんじゃないですか」

「手を握っている。そんなことはないだろう。むしろ花菜ちゃんが私の手を握っているんじゃないか。握っているというより私の手の甲に花菜ちゃんの手が置いてあるということじゃないか。どが一体問題なんだ」

「先生、冗談も休み休みにしてくださいよ。二十歳そこそこの若い女性がなんで六十過ぎの年寄りの手を握りますか。商売女なら話は別ですよ。花菜は素人の女性ですよ。まだ男も知らない女です。そんな女が自ら進んで年寄りの手を好きこのんで握りますか。これはセクハラですよ」

宮城は、優二の「老人」とか「年寄り」という言い方に悪意を感じ、怒りがこみ上げてきた。そして、宮城は優二の真意がようやく理解できた。明らかに美人局であり、まんまと引っかけってしまったと思った。同時に、なぜ自分が獲物としての対象にならないのかと腹も立つのであった。優二が在学中は誠心誠意彼のために力を尽

くしたはずなのである。そんな自分を罫に嵌めて金をむしろ取ろうという優二のさもし根性が許せなかった。

「セクハラと言うけど、見方によっては親しさを表現する行為と見られるじゃないか。まして、私はよこしまな気持ちなどこれっぽっちもないのだからね。君の言い方はどう見ても脅しだよ。出るところに出たら君の方が恥をかいちゃうよ」

「先生も往生際が悪いですね。写真はこれだけではありませんよ。他に決定的なものがありますよ。ご覧になりますか」

優二は落ち着いて丁寧な言葉を使う。宮城は優二の言葉にはととなった。確かに会計を済ませて店外に出た時花菜が宮城に抱きついて来た。

「先生、この写真をご覧になってください。アルコールで顔を赤くして、しかも鼻の下を長くした老人がいやらしく写っているでしょう。これを見ても心当たりがないとおっしゃるんですか」

優二はまたしても宮城のプライドを傷つけるような言葉を会話の中に入れてくる。優二は宮城の心をかき乱すために敢えて使っているのだろうと推測が出来た。ここでまともに怒りをぶついたら優二の思う壺にだと、じつと我慢をした。

「君も見えていて分かっているはずだ。あの時は花菜ちゃん

から私の方に抱きついてきたのだよ。咄嗟のことで私には避けようがなかった。いや、避けたら彼女が気分を害すのではないかと黙って受け入れたんだ。それを君は悪意を持って私を脅しに掛けるなんてもつてのほかだよ。教え子とは言え許せないよ」

「何遍も言いますけど許せないのはこちらの方ですよ。何も大げさなことを言っているんじゃないんです」

「ところで花菜ちゃんはどうしているんだよ。これほどまでに君が言い張るなら花菜ちゃんの言い分も聞きたいよ」

「だから言ったでしょう。花菜は信頼していた先生にこんなセクハラをされてとてもショックを受けてるくに話も出来ない状態なんです。こんな状態で先生にあった途端、大声で喚かれたら困るのは先生でしょう。その辺のことも僕は配慮をしているつもりなんです」

優二は花菜を宮城には絶対に会わせない魂胆である。花菜は小学生の頃から無口な子で、教室でも陰のような存在の子であった。学習はやはり遅れがちで、それは学年が進行しても変わらなかった。どちらかと言うと次第に「お客さん」的存在になつていった。しかしながら、無口でいつもにこにこしており性格はいたって穏やかであった。それだけに「花菜ちゃん、花菜ちゃん」とクラスの子たちには可愛がられていた。この寿司屋で会った時も小学校時代の印象と変わらないように宮城には思えた。それだけに優二が

言うような悪意を花菜が持つはずがないと宮城は考えるのである。たとえ幾ばくかの悪感情を持ったとしても、それは優二からの入れ知恵に違いないと宮城は確信した。宮城はこれ以上セクハラ問答を繰り返してもらちが明かないと思つた。

「ところで例えばだよ、いいか、ここが肝心なところだ。あくまで例えばの話だ。もし、私がセクハラをしたとしたら、私にどうしろって言うんだね」

「先生、例えばはありませんよ。事実です。あくまでも。花菜が泣いていることも含めてね。その前提を崩しては話が進みませんから」

優二はあくまでも強気であつた。宮城は優二と話を進めれば進めるほど怒りが増し、同時に彼の執拗さに辟易してきた。

「分かった。だから私にどうしろと言うんだね」

「どうしろって言われるんですね。それは私から言えませんが。いやしくも校長先生をなさった方に高校もろくくつぽ卒業をしていない私ごときが、こうしなさい、ああしなさいなどの指図は出来っこありません」

「しかし、確認だけど花菜ちゃんに迷惑を掛けたことへの償いと言うことなんだろう。そうすると当然君の方に具体的な要求というものがあるんだろう。これは一種の交渉ごとであるから、君の要求の中味がはっきりしないと交渉

の進展は望めないだろう」

「先生ちよつと、君、君と、さも私が加害者のように言っています、私はあくまでも仲介人ですからね。そこんところ誤解しないでください」

そう言うビルルのジョッキを傾け、一呼吸を置いて続けた。

「くだいようですが、もう一度申し上げます。先生のセクハラで花菜はとても悲しみ、そして傷ついています。尊敬していた校長先生がまさかこんなことをされるなんて思いもしなかったからです。良識ある先生ならそこるところはよくご理解いただけると思います」

優二は、恐喝罪に問われるような言質がないように巧みに避けていると宮城には思えた。そのことは取りも直さず優二自身が己の罪を自覚していることの証左でもあると宮城は思うのだった。

「君は私が花菜ちゃんにセクハラ行為をしたという確信のもとに話をしているが、これは当事者同士が決めることではないよ。しかるべき第三者が裁定することだよ。この映像だつて見る人によつて君の主張とは真逆に取れるからね。被害者であると言っている当の本人の花菜ちゃんの意見が聞けていないだろう。一方的に花菜ちゃんの兄である君の意見のみしか聞いていない。これでは君の話に簡単に傾けることは出来ないよ。こんなことは世の中の常識だよ」

宮城の理路整然とした話にさすがに優二は沈黙してしまつた。しかし、それも一瞬のことであつた。

「先生の言うことには確かに一理あります。でもね、例えばセクハラでないとしても、元校長だった人が、教え子に抱きついたという噂がこの界限で広まつたらどうします。先生も知つての通り、人間つてこういう話が大好きですからね。ことの真偽なんてどうでもよくなるんですよ。話が十人目の人に伝わる頃には十倍にも百倍にも広がっていますよ。それもおもしろおかしくね。そこんとこを私は心配しているんですよ。先生には小学校の時ずいぶんお世話になりましたからね。そんな恩人の方が苦しんだり、悲しんだりすることは僕としても本意ではありませんから」

優二は今度は泣き落としにかかつて来た、と宮城は思つた。社会に出て揉まれずいぶんと世知に長けて来たとも思つた。そして、話をすればするほど優二の魂胆は金であるということが明白になつて来た。しかし、宮城は、こんな話に乗り易々と現金を渡すようなことをしてはならないぐらいは十二分に心得ていた。

「どうだ優二君、時間もだいたい経っている。この話はお互いもう少し考えてからにしないか」

「考える時間を、ということですか」

「そうだよ。だいたい、私はまさかこんな話をいきなり聞くとは思ひもなかったからね。生真面目で誠実だった小

学校時代の君の印象をそのまま持ち続けて来たから。本音で言うとなんか驚いたし、残念だよ」

優二は、宮城のこの言葉に何も答えず、

「分かりました。僕もしかるべき人にもう一度相談しますから」

優二は「しかるべき人に」と言つた時、頭を上げ鋭い視線を宮城に注いだ。そして、薄い笑いを浮かべた。

宮城は砂を噛んだような気持ちで帰宅した。飼犬に噛まれたような思いでもあつた。宮城には優二や妹の花菜に對しずいぶんと好意を持つて接したつもりでもあつた。特に優二には彼の学習の遅れに對し、無理にでも時間を取り、誠意を持つて教えたのつもりであつた。彼が六年の途中から転校した後も、時折思い出し心配していた。だからこそ彼との再会を喜び、食事もご馳走してやつたのであつた。一方、宮城は「だが」とも思うのである。小学校で別れて以来九年の歳月が経っている。優二は児童保護施設で高校卒業まで過ごしたはずである。卒業と同時に施設を出て社会人として暮らして来た。宮城が、想像する以上の辛さを体験して来たに違いない。その中で騙したり騙されたり、百円の金にも困るような生活があつたかもしれない。そんな優二から見たら、宮城は苦勞を知らない甘い男に見え、金を引き出せる男に見えたかもしれない。しかし、と宮城は思う。彼の元教師として、また社会人として毅然として

彼に対峙して行かなければならないと。それが結局優二のためにもなるはずだと。

それにしても誰に相談すべきかと宮城は思案した。家のドアを開けながら「ただいま」と奥に声を掛ける。妻が「あら、早かったのね」と言いながら出てきた。「広田さんから電話があつたわよ。今日は遅くなりますと答えたら分かりました、と切ったけど」

「ああ、分かった。ありがとう」と宮城は答えた。

「どうしてスマホに電話しなかったのかな」と思いながらスマートフォンに着信を確かめた。確かに着信があつた。実は、宮城は優二との話し合いの前にマナーモードにしていたのであつた。それをすっかり忘れていたのだ。そしてこの頃物忘れが激しくなつて来たように思った。そんなことを思いながら「そうだ、相談には広田が持つて来い」だと自然に笑みがこぼれてきた。膝を叩きたいとはこのことだと次に苦笑に変わった。そして「灯台下暮らしとはこのことだ」と内心思いながら、少し気持ちが軽くなった。

「先生それは完璧な脅しですよ。言っちゃ悪いですけど先生を与し易いと見たんですよ。まあ、騙すより騙される方がよいつて世間では言いますけどね。ましてや先生は元校長という立場で、他の人に比べれば余計に世間体を気にす

る訳ですよ。相手に非がある場合でも内緒事で済ましがりですから。それだけに、こういう立場の人は彼みたいな者からは格好のターゲットになるんですよ」

さすがに広田はその仕事柄幾度も修羅場をくぐり抜けて来ただけはあつた。核心をすぐ見抜いたのである。

「どうしたらいいでしょうか」

「絶対に金を渡しては駄目です。びた一文もね。少しでも金を渡したら相手は図に乗つて要求を吊り上げて来るか、格好の獲物として離さないかですよ」

「やっぱりそうですね。私もそう思っているんですけど、相手が教え子でしょう。穏便に済ませたいんですよ」

「先生ね。こういうことは穏便には行かないんですよ、金を払うか拒否するか二者択一です。今回の場合は火種を残さずきつちりと片を付けないといけませんよ」

「そうするとどうなりますかね」

宮城は心許なさそうに広田を見る。宮城は遙かに広田より年上であるが、教員一筋の宮城と危ない橋を幾度も渡りながら商売をしてきた人生経験の差がどうしても出てきてしまふ。人間四十を過ぎると年齢などは関係なくなる。人生で獲得し、磨き抜いてきた度量や判断力が物言うし、人間の大きさを決める。

「当時、先生と教え子の兄妹二人の計三人でしたね。その他に第三者はいなかった訳ですよ」

「そう、三人だけでした。他に誰もいなかったです」

「ということは、客観的な事実を証明する人間はおらず、写真だけが物証としてあるということですね。先生の話によると、その写真では先生が抱きついているとか手を握っているなどには見えないということですね。しかし、これは現物を見ないとなんとも言えませんからこの際置いておきましょう。まあ、私のささやかな経験から見ても脅しという面が強いようですね。いわば当たり屋に当たってしまったということですかね。こういう輩は過去に何回か同様なことをやっています。ですから、この男のことをちよつと調べてみる必要がありますね。取り敢えず住所です。出来たら職業もですね。あつ人材派遣業ですか。しかし、これは怪しいですね。二十歳そこそこでこの仕事をやっているなんてあまり考えられませんね。使い走りと考えればアリですけど。いずれにしてもまず住所ですね。それが分かれば次の手が打てますから」

広田の話を受けて宮城は行動を開始した。しかし、電話で優二の住所を聞いても優二は怪しんで簡単に教えてはくれないのではないかと宮城は思った。しかしながら、他に手段を思いつかない。やはり直接優二に尋ねる他はないと思った。宮城はどういう口実にしようかと思案を重ねた。彼は取り敢えず当面の問題には触れず、山梨の友人から葡萄がたくさん送られてきたのでお裾分けしたい、という理

由にしようと思いついた。山梨の友人から贈られて来たのは事実であった。宮城は自分ながらにうまい考えたと思わずにやりとした。

宮城は優二に電話を掛けた。優二はセクハラ問題の件だろうと思ったではない。しかし、宮城はその話は一言も持ち出さず「迷惑を掛けているので山梨から産地直送で甘い葡萄を贈りたい」とだけ伝えた。どうやらこの言葉に優二は心動かされたようだった。「先生、例の件についての回答は早くお願いしますよ」と言いながら簡単に住所を教えてくれたのであった。あまりに呆気なくことが済んだものだから宮城はいささか拍子抜けの感があった。早速広田に優二の住所を連絡をした。

広田の住まいは稲市であった。稲市は東京都心から私鉄の急行で一時間、十分な通勤圏内であった。それに加え、JR線にも接続してターミナル駅として近年急速な発展をしている。広田は、珍しく仕事で忙しいので二、三日後に連絡すると返答があった。「珍しく」とは広田自身の言葉であった。「本人も結構ヒマしているのを自覚しているんだ」と思うと宮城は思わず苦笑いをした。

三日後、広田から宮城に「会いましょう」という電話があった。せっかちな広田の面目躍如である。どうやら迅速に動いてよい情報を掴んだらしいのである。

「先生、すごい情報を得ましたよ」

開口一番、広田は笑みを「浮かべながら言った。

「えつ、すごいってどんな情報ですか」

間一髪、宮城も応える。

「それがね先生、驚かないでくださいよ。奴、生保受給者だったんですよ、二十一歳で。ふざけた野郎ですね。これだけでも許せないですよ。とちめてやらなきゃ」

広田は日頃から生活保護の不正受給者については腹を立てていた。

「まさか生活保護の受給者とは、私も信じられないですよ。だって見た感じは心身共に健康そうで、自分でも働いていると言っていましたから」

「そこですよ、問題は。先生みたいにまじめで善良な人には分からないでしょうが、私みたいに不動産業で手広く仕事をしていると、人間の裏の汚い面は飽きるほど見ていますからね。病气やけがで仕事を失い収入がないということで、簡単に受給申請をする輩が多いですよ。特に精神疾患は外から分かりませんから医者との判断一つです。本人が鬱病みたいと訴えれば、医師はその線で診察を進めますから。なあにこの手の輩はこういうことはよく勉強していますからね。鬱病の症状は全て頭の中に入っています。医師も患者の訴えをむげに退ける訳には行きません。行政は書類さえ揃っていれば受理せざるを得ない。今はこんな状況でしょう。社会保障費なんていくらあっても足りないのは

当然ですよ」

「すると優二、浦上のことですが、彼は仮病を使って生活保護の受給申請をしたということですか」

「いや、それは不確かですが、不正申請で生活保護費を受給していたとすると、当然これは詐欺罪に当たります。万に一つ不正でなくともあの若さでしょう、就労活動をきちんとやっているかどうかですよ。最近、不正受給者への風当たりは強くなっています。自治体によつては審査や指導が甘いところがあるらしいんです。浦上がその辺を付けて受給している可能性もあります。とにかくこの点が彼の弱点であるのは間違いないです。もう少し彼の身辺を調べてみる必要がありますね。もしかしたらもつと彼の弱点がみつかるかもしれませんよ」

不正受給に腹を立てているだけに広田は生活保護についてはなかなか詳しい。

「取り敢えずどうしましょうか」

宮城は思案顔で広田に尋ねる。「そうですね、一度浦上の住まいを訪ねてみますか。どんな生活をしているかぐらいは把握しておいた方がよいのではないかと思います。今後の彼との交渉にも役立つかもしれませんから」

広田はまるで年下の者に教えるように懇切丁寧である。

「いつがよいでしょうか」

「善は急げと言うでしょう、出来たら今日でしょう。幸い

住所は分かっていますからすぐ探せますよ。先生のご都合は大丈夫ですか」

主客転倒である。普段から広田は行動的で、労を惜しまないところがあつた。また、好奇心が非常に強いところもある。今や宮城の問題をあたかも自分の問題であるかのようにつえてしまっているのだ。宮城としては願ってもないことであつた。

「私は全く支障がありません。それより広田さんはよろしいんですか。会社の方の仕事もあるんでしょうから」

「なあと会社の仕事は社員に任せておけばいいんです。たいたいした内容の業務をやっている訳ではありませんから。どうしても言う時はスマホに連絡が入りますから」

「申し訳ありません。それではよろしく願います」

宮城は広田の運転する車で優二の住まいへと向かつた。今年は台風の当たり年で、既に三つの台風が上陸している九州に上陸したものが本州にはたいした被害をもたらさなかつたが、しかし北海道や北日本には大きな被害をもたらした。その後も台風の発生は続いている。その影響で澄んだ秋空が少しも現れない。この日もどんよりとした厚い雲が空を覆っていた。「こんなどんよりとした天気が続くと気分もすっきりしませんね。ところで最近の稲市の発展はすごいですよ。地価も相当上がっています。稲駅から徒歩二十分圏内のマンションは即完売ですよ。それに比べると

さくら市はあんまり土地が動いていないですよ。アパートの賃貸の手数料は微々たるもんですからね、これで社員の給料をまかなうなんてとても出来ない相談です。やはり不動産業は物件の売買が本命です。自社物件の売買が一番利幅がありますけどリスクもありますから。銀行の融資を抱えたまま売れないと、どうしても値下げをせざるを得ないでしょう。場合によっては利益を度外視せざるを得ない時もありますから。バブルの時のように黙っていても右から左へと売れる時代はとくに過ぎましたから。あの時代は本当によかつたですよ。おっと、話が逸れちゃいましたね。浦上の家は稲駅から結構離れていますね。枝番号があるのでアパートと思うんですが。なんか段々と畑が増えてきましたね」

広田が言うように密集した家並みしばらく続くと、畑や林、それに小川などの風景が見られるようになった。開発以前の風景が垣間見ることが出来る。開発に取り残されたのだろうか、所々に雑草地が広がっている。その雑草地の一つのところに赤い塊がいくつか見える。

「あの赤い塊のように見るのは何でしょうかね。花ですか」

「広田さん、あれは彼岸花という花ですよ。マンジュシャゲとも言います。鮮やかな朱の色がこの時期に一番目立つ花ですよ」

「先生は花も詳しいんですね」

「子どもの頃はよく見ましたからね。懐かしいですよ。目立ってとても美しいんですが墓地によく咲いていたせいかわらばこの花を嫌っていましたね。土葬された人のエキスを吸っているから赤い花が咲くんだ噂し合っていましたよ。まともに考えれば全くあり得ない事なんですが。しかし子どもたちはたわいもなく信じていたんですね。ですからどちらかと言うと憎んでいたという方が適切でしたね。見つけるとへし折っていましたよ。今となつてはひどいことをしたと後悔しています」

「へえ、花にも憎まれるものがあつたんですね。見かけによらず、という言葉があります、人ばかりでなく花にもあるんですね。憎まれものが。勉強になりましたよ。しかし、この辺はまだまだ自然が豊かですね。緑を見るとほっとしますね。やはり人間には緑が必要なのかもしれませんね」

「広田さんがおつしやるとおりですよ。駅周辺のビルの林立に比べると、緑が残るこの辺りは住環境としては遙かにいいですね。駅に行くには徒歩では無理でしょうけど。バスを利用すれば渋滞時間帯以外は二十分圏内でしょう。稲市は発展の余地はまだ十分にありますがね」

「先生、ここが問題なんですよ。都市が成長するというのは人も物も時間も流入して来ると言うことなんです。流入

してくる人間の中には人生の落伍者もいる訳です。簡単に言うとうホームレスのような人たちです。あるいはそれに近い人たちです。ホームレスの社会にもネットがあるんですよ。どこの市が判定基準が甘いとか、食物や安全な場所が手に入りやすいとかの情報が結構出回っているんですよ。生きるために彼らも情報には敏感にならざるを得ない訳です。彼らも情報からは逃げられないという訳です。そろそろ近いですね」

意外に早く優二が住むと思われる場所に来了。カーナビが「近くに來ましたので案内を終了します」とアナウンスした。

「どうもあの建物らしいですね」

広田が指指す方向に二階建ての建物が見えた。明るいくリーム色に塗られた壁が曇り日の中で引き立っている。

「アパートというよりなんか寮みたいな感じですね。午後の三時過ぎであまり人出はありませんが、降りてみますか」

と、宮城は広田に問いかける。辺りは住宅がぼつりぼつりと建っている。しかし、人通りは見かけない。午後三時をちよつと過ぎた時間であるが、静寂が流れている。

「ちよつと車の中で待ってみましょうか。あのアパートから出てきそうな感じがするんですよ。変にうろうろしていると警察に通報される恐れがあるんですよ。最近はこのよ

うな静かな住宅の住民は、とても警戒心が強くなっているからね。誰もいないと思っても家の中からだれかがじっと我々を観察しているかもしれないから」

宮城は広田の言葉にまさかと思った。しかし、考えてみれば領ける言葉であった。宮城自身も三年ほど前は現職の小学校校長であった。その折に何度も「知らない人にはついて行かない」とか「誘われても車には絶対に乗ってはいけない」と、朝会などで話したことが度々あった。人間不信を否応なしに押しつけていた。こんな世の中であるから住民が見知らぬ訪問者に警戒を持つのは当たり前と言えは当たり前のだった。十分も待たないうちに一人の男がアパートの間から出てきた。広田の予感は一瞬正しかった。右足を少し引きずっている。頭髮がぼさぼさとして、痩せていた。広田はドアを開けようと手を掛けながら「先生はここで少し待っていてください」と言った。そして、外に出るとにこやかな笑顔をしながら男に近づいて行った。二言三言話し掛けると男が笑った。それに併せて広田も笑い声を上げた。広田はすぐに男の心を掴んだような気配だった。そして宮城を手招きして呼んだ。宮城は緊張しながら広田に近づいた。

「こちら大学の先生の宮城先生です。ええとお宅さんは何さんでしたっけ」

広田はいかにも勿体をつけて宮城を大学の先生と紹介し

た。宮城は「パートの短大の教員ですよ」と口の中で訂正をした。広田は男に圧力を掛けたのだ。男は目を大きくして宮城を見つめ、恐縮したように軽く頭を下げた。そして、釣られるようにして「安西です」と答えた。

広田の計略は図星であった。

「そうそう、安西さんでしたね。この頃物忘れが激しくて、いや生まれた時からでした。ごめんなさいね。宮城先生が土地を探しているんですよ。この辺の静かな環境が気に入ったんです」

突然、宮城は土地を探しに来ていることになってしまった。さすがに宮城は広田の話を否定するほど愚かではなかった。すぐに調子を合わせて行く。

「この辺も高いんですよ。僕らの給料じややつぱり手が出ないだろうねえ」

宮城の話し掛けに、男はぼかんとしている。

「いやあ、実は安西さんを地主さんと間違えたんですよ。先生、先生だって安西さんを見ましたら地主さんに見間違えるでしょう。安西さんは貫禄があつていかにも地主さんって感じがですよ。ところがどうやら私の堪違いだったみたいで、謝っていたところなんです。それにしても安西さんは風格がありますよ。先生もそう思いますよね」

見え透いた嘘もこうも堂々と言うと真実に聞こえるもの

である。さすがに安西は氣恥ずかしく思ったのだろう。安西は間髪を入れずに、

「それほど私は貴族なんてありませんよ。まるっきりの貧乏人ですよ」

そう言いながら安西はにこにことしている。地主に間違えられたことがよほどうれしかったに違いないのである。虐げられている者ほど他人からのほめ言葉は身に沁みるものなのである。

「本当に失礼をしました」

と言いながら広田は煙草を取り出した。そして、「セブンスターですが一本どうですか」と言つて安西に差し出した。

「ありがとうございます」と言いながら安西は手に取った。広田はライターで火を点けてやる。

「ちようどたばこが切れて買いに行くところだったんですよ。本当にありがとうございます」

「安西さんの銘柄は」

「広田さんと同じです」

「セブンスターですね。ちよつと待ってください」

と言うと、広田は車に戻り、煙草を二箱持つて来た。

「お詫びです。取つておいてください」

と、言いながら遠慮する安西の手に煙草を押し込んだ。

「すみません、すみません」と、頭をぺこぺこさせながら

安西は何度も礼を言つた。

「安西さんはこの近くにお住まいですか」と宮城が尋ねると、安西は後ろを振り向きながらアパートを指差した。

「あそこのアパートですか。きれいで住み心地のよさそうなアパートですね。結構するんでしょう」

「家賃ですか。実はそうなんです。本当に高いんですよ。駅から遠いくせに」

安西は「くせに」という言葉に力を込めた

「そうですか。実はですね。土地を探しながら人も探しているんですよ」

宮城は広田の話術の巧みに驚いた。話術というより相手の懐に飛び込む妙にある。宮城は別人を見るように広田を見た。安西が生保受給者の浦上が住むアパートから出てきたということは、安西自身も生保受給者である広田は既に見抜いていた。しかし、広田は絶妙に安西の自尊心をくすぐりながら話を進めて来た。

「どんな人ですか」

安西は、さも興味あるように広田を見上げている。安西は大柄な広田より十センチほど背が低い。

「浦上という若い男なんですが」

その途端、安西の顔色が変わつた。

「浦上優二でないですか」

「ええ、そうです。よくご存じですね」

宮城は安西の顔色を窺うようにしながら答えた。

「すみませんが、浦上には関わりたくないんですよ」

安西は今までの柔和な表情を一変させ、険しい顔つきになって言った。

「何か不都合でもあるんですか。安西さんにご迷惑をお掛けしたくないので無理は申しません」

広田は丁寧な物言いに応じた。

「浦上はやはり評判が悪いようです。予想したとおりです。しかし、あんな奴をのさばらしておくのも腹が立ちますね」

広田は、安西にも聞こえるような声で宮城に話し掛けた。

「どうやら無駄骨でしたね。しかし、浦上をとちめるいいチャンスだったんですが、残念でしたね」

宮城も大きな声で応じた。

二人の会話を聞いていた安西の態度が変化して来た。先ほどの険しい表情が和らぎ、何か訴えたいような表情を見せてきた。その変化を広田は見逃さなかった。

「浦上には我々も困っているんですが、安西さんも何か迷惑を被っているじゃないですか。ご迷惑でしょうが、出来ましたら私たちの相談に乗っていただけませんか。勿論貴重なお時間をいただく訳ですからそれ相応のお礼はさせていただきます」

広田が二箱の煙草をくれた効果は続いていた。

「まあ、今日は暇ですから。まあどっちでもいいですよ」

「どっちでもいい」というのは、安西の肯定の気持ちを婉曲に表現していることは二人にはすぐ理解できた。

「実は、私たちはお昼はまだ摂っていないんですよ。もし差し支えがなかった一緒にどうでしょうか。お願いしますよ」

広田はいかにも相手の恩恵を願うかのような口調だった。

「それほどおつしやるならお茶をご馳走になりますか」

「ありがとうございます。それでは申し訳ございませんがこの近くのアミレスにでも案内していただけませんか」

広田の懐柔策は見事に効を奏した。宮城は内心舌を巻いてしまった。仕事を通して身に付けたのか、はたまた天性のものか宮城には判断がつきようがなかったが、相手のプライドを傷つけず、なおかつ自分の欲する方向にもつていく話術は宮城も学ぶべきところがあった。反面、下手をすると騙しのテクニクにも通じる恐れを宮城は感じた。

五分もしないうちに片側二車線の広い道路に出た。その道路に入ると、ものの二分も経たないうちに様々な種類のレストランが連なっていた。その一つのレストランの駐車場に広田は車を駐めた。車から降りると西の方に山々が連なっているのがぼんやりと見えた。

「今日は見えませんがここから富士山がきれいに見えるんですよ。富士山が見えないのに富士見町という町名を付け

ているところがあります、ここは本当に富士山が見える富士見町ですよ。一月頃の晴れた日にはぞくぞくするほどきれいな富士山が見えますよ」

安西はさも富士山を見ているように目を細め、西の方を指差した。よく手入れされた一面の畑が広がり、それほど高くない建物が点在していた。西の空にはどんよりとした雲が垂れていた。

「飲めるんでしょう。私は運転をしているから飲めませんが、お二人はどうぞ一杯やってくださいよ」

「喉も渴いていることだし、富士山の話も聞きたいので生中をもらいますか」

広田に合わせるように宮城は応じた。

最初は遠慮がちだった安西は二杯、三杯と重ねるごとに遠慮が消え、そして饒舌になって行つた。安西はたやすく広田の自家薬籠中のものとなつてしまった。広田の間に何でもしゃべり、また、問われないことまで話した。

安西が出てきたアパートは、生活保護受給者たちが住む寮であつた。

「そうすると浦上もあの寮に住んでいるですね」

宮城の問いに安西は「そうですね」といとも易々と答えた。宮城には予想もしていない展開だった。思わず宮城と広田は顔を見合わせた。

「だって彼は病氣もけがない、いたって健康そうに見える

ますよ。しかも若いでしょう。信じられませんか」

「なめに簡単ですよ。精神疾患っていうことですよ。心の病は外からは判断が付きませんから、本人が鬱だ躁だと言ひ張れば医者は否定できませんから。しかし、ワルガミもいい玉ですよ。あつ、ワルガミね、うらがみの浦を悪人の悪に言い換えて言っているんですよ。うちらは」

「と言うことは、浦上はみんなから嫌われているということですか」

広田はさも納得したように大きく頷きながら話を続けた。
「あいつはワルですよ。寮長やオーナーのパシリをやつていてうちらをくいものになっているんですよ」

「くいものですか」

「そう、くいものです。簡単に言うとホームレス狩りをやっているんですよ。うちらの寮の部屋が空くでしょう、そうするとワルガミが入寮者を探して来るんですよ。その対象者はホームレスです」

「しかし、それほど大きくもないこの町にホームレスの人がそれほどいるとは思えませんけど」

「広田さん、失礼ですけどそこは素人さんが考えることです。何もこの町と限定していませんよ。横浜や川崎など大きな街に行けば対象者はいくらでもありますから」

「だけど、市外者は受給者にはなれないでしょう」

「すみません、広田さん。そこもうまいことやれるんです

よ。市内で見つけたことにすれば簡単ですから。それは広田さんみたいな話術ですよ。うまいこと丸め込んでワルガミの言うとおりにさせるんですよ。とにかく受給資格にはまず第一に定住地が必要ですから、それでうちの寮を紹介する訳です。紹介って言えはきれいですが、問答無用です。断れば話は打ち切りです」

そこまで言うのと「ちよつとすみません」と言つて安西がトイレに立った。

「先生、すごい収穫ですね。一応浦上が生保受給者だと言うことは纏んでおりましたが、これではつきりしましたね。やつぱり奴は食わせ者だということがはつきりましたよ。先生は絶対に奴の話には乗らず、ましてや金など払っちゃいけませんよ」

「それにもまして違法行為までやっていると言うじゃないですか。浦上にとってはこのことが役所にばれたら大変なことになりますよ。私を脅している場合じゃありません。ところでこれからどんなことを安西さんから聞き出して行きますでしょうか」

「そうですね、この際だからホームレスがどうやって受給者に仕立て上げられて行くか、また寮の内部事情なんかも聞き出した方がいいですね。こんな絶好の機会はないでしょうから。帰りに三千円も包んでやつたらいいと思いますよ。彼らにも一番大事なのはお金ですからね。先生はど

う思われますか」

「広田さんのおつしやる通りです。お金は私の方で用意しますから」

その時、手を揉み、少しばかり足下をふらつかせながら安西が戻つて来た。

「やあ、お二人さんにはすつかりご馳走になりました。そろそろお暇しないと」

「まあ、いいじゃないですか。私たちはまだ食事をしていませんから、その時間だけでも付き合ってくださいよ。そうですね、先生」

「そうですね、安西さん。折角知り合つたんじゃないですか、もう少し付き合ってくださいよ。帰りは送りますから。広田さんオッケーですよ」

「それは勿論ですよ。安心してください」

そんな勧めを待つていたかのようにな安西は「すみません、甘えついでに焼酎をいただいていいですか」と二人の顔を交互に見た。

安西の生活保護支給額は十一万円であるという。その中から食事費三万円、住居費四万円が差し引かれる。水道、光熱費は別に支払うと手元には三万七千円ほどだが、最終的には二万円ほどである。食事は三食付けで、一食三百円である。食べても食べなくても全額支払うことになっている。洗濯、風呂、トイレは共同である。これらの清掃は当

番制になっている。食堂での盛りつけ、片づけもそれぞれが行う。

生保受給者たちは得てして人間関係がうまく築けないという。従って、寮内でのトラブルも結構多い。寮内で傷害事件や殺人事件が発生すると寮の評判を落とすばかりでなく、行政の支援ももらえなくなる。従って、このような問題を起こさせないのが寮長の手腕にかかっている。しかしながら現実的にはいつも寮長が見張っていることは出来ない。どうしてもサポートをしてくれる人材が必要になってくる。その役目を浦上が担っているという訳である。他の住人にすれば、寮長は煙たい存在であり、搾取者にも見る。その飼犬的な者が浦上である。住人のちよつとした不満や要求は権力のある寮長よりもその手下である浦上に向かわざるを得ない。まして、浦上は隠れた収入を得ている。住人の不満、怒り、嫉妬が浦上に向かうのは当然であった。生活保護者あるいはその受給候補者を担当する地方の担当課は生活福祉課である。名称は市区町村によって多少異なる。生活保護申請に当たって一番厳しく審査されるのは申請者の資産状況である。銀行口座の残高、生命保険等の有無、土地家屋、自家用車等の有無も厳しく調査される。また、身内の扶養調査も行われる。これらの審査・調査等を行う担当がケースワーカーである。ここをクリアして生活保護係が担当となり、支給額が決定される。お金の支給

の他、医療費が無料。さらに整体、整骨院への通院も回数制限があるにしても認められている。確証のあることではないが、さらに大きな問題がある。それは受給者による薬の転売である。薬の中でも特に睡眠導入剤（睡眠薬）の需要が高い。受給者の中には睡眠薬が不要にも拘わらず複数の医院を巡り何かと口実を付け、また症状をつくり上げて睡眠薬を手に入れる。それを転売する訳である。転売できるということは闇のルート、市場が形成されていることでもある。

行政の生活保護者支援は経済的な問題、健康の問題ばかりでなく就労支援も大きな目標になっている。そこを担当しているのが就労支援係である。ここはハローワークと常に密接な連絡を取り合っている。一人でも多く、そして少しでも早く就労させることは各自自治体の予算節約に直結する。しかし、現状は必ずしもそうになっているとは言えない状況がある。脅しや泣き落としには人間誰しも弱い。そういう弱さは職員にもありがちである。また、よく言われるお役所体質である。何事も事なかれ、安全、無難主義が運びっている構図は否定できない。

安西が入居している施設はNPO法人組織となっている。この組織は基本的に単年度決算で、しかも内部留保は認められていない。その代わり税法上の優遇措置がなされている。しかし、どのような組織にも抜け穴は存在する。生保

受給者の寮もその例に漏れない。勿論健全な運営を行っている施設は大部分である。安西の話によると彼の寮もかなりあくどいやり方をしているらしい。例えば布団の購入である。入寮者がある度に布団の購入が認められている。しかし、現実には布団の耐久性は結構ある。新入寮者がある度に布団を購入する必要はない。しかし、安西の寮では購入していると言うのだ。とすると必ず布団は余ってくる計算である。その余った布団はどうなるかと言うと、それを購入する業者がいてそこに売却する訳である。勿論その収入は利益としては計上しない訳である。いわゆる隠し収入である。その他入所者たちが使うトイレットペーパー、洗剤、石鹸などの細々とした消耗品を市場価格より高い値段で設定して入所者から徴収している。この差額も寮経営者の懐に入る仕組みになっている。入所者たちは結局、ぎりぎりの生活を強いられている。彼らは搾り取られる、即ち被搾取者とも言える。貧困ビジネスと言われる所以である。ところで、底辺で生きている者たちの生活費の原資は税金である。結局、その税金が貧困ビジネスの経営者の懐に入ることになっている。貧困ビジネスを営む者たちを善良な市民の税金を通して支えているという構図なのである。

このような状況であるから、入寮者の大部分は不平、不満を持っている。本来なら入寮者たちが団結して待遇改善の要求などをして解決すべきである。しかし、彼らの大部

分は事なかれ主義、長いものには巻かれるということがすっかり身に染みついてしまっていて、とても団結どころではない。陰で鬱憤を晴らすか愚痴を言うのがせいぜいである。しかし、中には声を出して抗議をする者もいる。こういう時には浦上の出番である。勿論暴力で解決などはせず、巧妙な嫌がらせ、時には不法な金銭要求などを仕組みそういう男を孤立させるのである。結局、多勢に無勢である、ほとんどの者が嫌気をさして他市に逃れて行く。他市に行ってもやはり生活保護の受給者になる。結局堂々巡りな訳である。退寮した者の補充は、浦上たちが市内や他市に出向いてその候補者を基軸にしてお金の循環システムである。生活保護受給者を基軸にしてお金の循環システムがしっかりと確立をしているということである。

安西から概略こんな話を聞いて宮城も広田もさすがに目を合わせて大きな溜息を付けた。ある意味では二人にとって予想だにしない大きな収穫と言ってもよかった。特に宮城にとっては浦上の攻撃を交わすための貴重な知識と思われた。

安西は日頃の不満を一気に吐き出し、その上、好きなビールをたらふく飲み上機嫌であった。

「いやあ、安西さん貴重なお話を本当にありがとうございます。私には無縁な世界の話でしたが大変興味深く伺いました。これをご縁にお付き合いさせていただきます」

そう言う手を差し出し握手を交わした。

「全く広田さんと同じ意見です。感謝します。なお、浦上さんには今日お目にかかったことも、お話を伺ったことも内緒にしてください。安西さんにご迷惑をお掛けすると行けませんから。それとこれは広田さんと私からのほんの気持ちです。お受け取りください」

そう言うとき、宮城は白い紙包みを手渡した。

「いや、それは困りますよ。こんなにご馳走になっているんですからそれで十分ですよ」

そう言いながらも安西の頬は緩んでいた。そして両手でそれを押し戴くようにして受け取った。

外に出ると雲に覆われている西の空が薄赤く染まっていた。襟足を当たる風がかすかに涼しさを含んでいた。宮城はやはり季節の移ろいは確かなものだと感じた。

「西の空が赤くなっていますから明日は晴れかもしれませんね」

「先生、本当ですか。とにかくこのねちっこくて湿気の多い天候が続いているでしょう。洗濯物の乾きが悪くてみんな困っているんですよ。晴れるといいなあ」

安西は赤い顔の頬を膨らませブワッとして強く息を吐いた。そして宮城と広田に近寄り手を取ると何回も握手をした。宮城は荒れた安西の手が思いの外強い握力があることに驚いた。

「じゃあ車に乗ってください。寮まで送りますよ」

広田が柔和な表情を出して安西に問いかけた。そして安西の肩を抱えながら「ワルガミの情報があつたらどんなことでも教えてください。悪いようにはしませんから」と言いながら名刺を渡した。安西は名刺をさも大事そうに持って「はい、分かりました。必ず連絡いたします」と答えた。その様子を見ながら宮城は「自分にはとても真似が出来ないことだ」と、感心した。

「実はね、稲市役所に知り合いがいてね。偶然君の名前が出てね、いろいろ事情を知ったんだよ。優二君も大変なんだね」

宮城は優二がテーブルに着くなり間髪を入れずに言った。広田と入念な打合せをした上のことだった。広田は「とにかく先手必勝で行ってください」と宮城にアドバイスをしてくれたのだ。勿論「稲市役所に知り合いがいる」というのも出任せであった。

「何のことですか」

優二は少しどもりながら応えた。

「いや、別にたいしたことではないんだが、優二君生活保護を受給しているんだってね」

もし、優二が冷静だったら「そんな個人情報をごくから仕入れたんですか。もし、市役所の人間だったら情報漏洩

で首もんですよ」と逆襲してくるところだったが、優二は宮城の予想通り、完全に恐慌状態に陥ってしまった、思考が停止してしまったのだ。そして、「仕方がありません。働けない精神状態なんですから」と答えるのが精一杯であった。

宮城は、優二の「働けない精神状態」という言葉を聞いた時「しめた」と思った。攻勢に転ずるきっかけができたと考えたからである。広田の狙い通りであった。

「生活保護の受給がいけないとは言っていないよ。最低の生活を保障して行くのは国の役割であるからね。若い優二君だって働けないということであれば何の遠慮もなく受給の申請をしても全く問題はないよ」

優二にも二十一歳という若さで、しかも虚偽の理由で支給している後ろめたさはあるようだった。宮城は、生保受給の話には深入りしないようにした。「個人情報漏洩問題」への進展を恐れたからであった。同時に気持ちに余裕ができたように思えた。

「それと君が住んでいる寮ね、そこで寮長の代理人みたいな仕事もしているんだって。君は昔からそうだったけど優秀だからね。そんな大事で神経を使う仕事もしっかりこなしているんだ」

優二はどきりとなった。まさかそこまで宮城が把握しているとは思ひもなかった。迂闊なこととは思えないと思っ

た。二人の間に沈黙が続いた。その時宮城のスマートフォンに着信音が鳴った。宮城は「ちよっと失礼するね」と優二に伝えると廊下に出た。広田からの優二に関する情報だった。

広田は安西からの情報であると前置きをして、話を始めた。それによると優二は他市の同業者であるスカウトとホームレスの獲得を巡ってトラブルになったと言う。その際に優二がある組織の名前を口走って相手を脅したというのである。不幸なことにそのことがその組織の構成員の耳に入ってしまったと言う。今のところ何の動きもないがただでは済まないだろうということであった。「優二の耳にも届いているの」と、尋ねると「それは、はっきりしていない」と言う。

宮城はそれを聞いて暗い気持ちになった。優二の軽はずみな言動が取り返しのできない結果をもたらそうとしているのである。優二が口にした組織の社会では面子というもの極めて大事にしている。こんなことは誰でも知っていることである。組織の名を騙るなどはその面子をつぶす典型的なことである。優二はどうやって解決を図ろうとするのだろうか。結局はお金か身体で贖うしかないだろうと宮城は思う。そうすれば余計に、しかも緊急にお金が必要とするに違いない。今日の優二の様子では自分の言動がまだ露見していることを優二は知らない、と宮城は判断した。

宮城は優二との問題は今日中に決着を付けなければならな
いと思った。

「広田との電話の間に、優二は態勢挽回を図ったようであ
る。宮城が席に着くなり、」

「先生、生保受給とセクハラ問題は関係ないですよ。生
保の問題は僕個人の問題です。先生の妹に対するセクハラ
と切り離して話し合しましょう」

「優二君の言うとおりだよ。生保受給のことで私は何も君
のことを批判などしていないよ。しかし、収入を申告しな
いまま生保の受給をしていることが問題だと言っているん
だよ。君の得ているお金は税金だからね。市民がそんなこ
とをしたら黙ってはいないだろう。しかも、君が寮長とグ
ルになつていることまで知れ渡ったら寮のNPO団体の認
可まで取り消されるよ。そういうことを私は心配してい
るということだよ。あくまでも優二君のことを思つてのこと
その辺はよく理解してほしいんだ」

「先生のご厚意は分かりました。でもね、妹の気持ちはど
うなるんですか。先生という立場なら他人の気持ちを汲み
取るということの大切さはよく分かるんじゃないですか。
その辺のところはよく理解してほしい、という先生の言葉
をそっくりお返ししますよ」

「そのことだよ。妹の花菜ちゃんの気持ちも知りたいんで、
是非彼女に会わせてくれないかな。決して君のことを疑つ

ている訳じゃないんだ。彼女を本当に傷つけているんな
ら直接謝りたいんだよ」

「それは前にも言ったじゃないですか。先生に会うこと
自体、妹は怖がっているんです。会うことはとても無理で
すよ」

「でもね、常識的に考えて被害者である人に一度も会わず、
間接的に聞いた話だけで慰謝料とか迷惑料を支払うことは
あり得ないだろう。私がいくらお人好しでもそこまでは折
れることは出来ないよ」

「じゃあ、あの写真を公にしているんですか。先生の今の
立場も地位も失いますよ。それでいいんですか」

「優二君、それは立派な脅しだよ。録音しているからね。
訂正はきかないよ」

「先生、それって汚いですよ。先生こそ脅迫じゃないです
か」

「どちらが脅迫をしているのかは録音を聞いたら分かるは
ず。ここでもう一度聞いてみるか」

「そう言う」と録音機をジャケットの内ポケットから取り出
した。それは普段宮城が英会話練習用のために使っている
ものであった。

「やっぱり先生って汚いよな。こうやって俺みたいな弱い
者はいつも虐げられて来ているんだよな」

「虐げられているなんてどういうことよ。今だってきちん

と生活保護を受け何とか生活しているんだろう」

「それは表面上のこと。おい私たちのようにゴミみたいに底辺で生きている者たちはいつまで経っても浮かび上がれないのよ。小学校の時には先生にはすごくお世話になりました。お陰で何とか新聞ぐらいいは読めるようになったし、銭勘定も間違いない出来るようになりました。母親がパクられた時にも助けてもらいました。しかし、小学校も中学校もいじめられ通しだったんですよ。先生には分からなかったでしょう。それにパシリもさせられていたんです。辛い暴力はなかったんです。それは兄貴のお陰です。兄貴がヤンキーグループの一員だったからです」

宮城には初耳であつた。まさか優二がいじめに遭つていたとは想像もしていなかった。彼の担任の遠山は指導力があり、子どもたちから信頼もあつた。彼の学級はいつも温かな空気が流れ、まとまりのあるクラスであつた。

「遠山先生のクラスで」

と、宮城は思わず聞いてしまった。

「いや、遠山先生もクラスの人たちもよくしてくれました。他のクラスや先輩たちですよ」

「いやあ、そうだったのか、知らないでいて悪かったね」

「もう過ぎたことですからいいですよ。でも施設にいた時も辛かったですよ。とにかく規則が厳しくて。それに兄妹がばらばらになつてしまつたでしょう。寂しかったし、妹

のこともとても心配でしたよ」

優二の話を聞き、宮城は当時のことを鮮明に思い出した。

「校長、大変だ」

開け放しのドアと壁に両手を広げ情野天馬が叫んでいる。息も荒い。手で体の勢いを止め、校長室へ飛び込んで来ないのが天馬なりの矜持だったのかもしれない。十時二十分から始まる中休みの時間帯でのことだった。

「おう、どうした」

それに呼応するように宮城も叫んだ。天馬は優二と同じ五年生、優二とはクラスが違つていたが、優二の最初の友人であつた。天馬は学習が遅れ気味で時々喧嘩などの暴力沙汰を起こしている。いわゆる問題児であつた。教師に叱られたり気に食わないことがあると学校を飛び出すのが常習で、担任を含め教師たちからの受けは芳しくなかった。

天馬は彼特有の嗅覚で優二に親しいものを感じたのかもしれない。天馬が積極的に優二に近づいて行き、何かと面倒を見ていたのであつた。宮城は校長室のドアをいつも開けっ放しにしていた。休み時間には出来るだけ校庭に出て子どもたちと一緒に遊んでふれ合うようにしていた。宮城は出来るだけ天馬をドッチボールなどに誘うようにしていた。そんなことの積み重ねがあつてのことか、天馬はよく校長室に顔を見せるようになった。

「優二の母ちゃんがパくられたんだよ」

「えっ、」と、一瞬宮城は言葉を失った。そして、

「どうして天馬はそれを知ったんだよ」

「優二のあんちゃんだよ」

「あんちゃん、あんちゃんはどこにいるんだ」

「下だよ」

天馬は事件の第一報をとにかく校長に知らせようと走ってきたのであろう。言葉もため口になっている。宮城が勤める学校は職員室や校長室の管理また児童や職員玄関は二階になっている。校長室の真下が校門から校庭に抜けるコンコースとなっている。天馬が言う下とはこのコンコースのことである。

「優二のあんちゃんの名前はなんて言ったっけ」

「ヒナタです」

「そうだったな。じゃ日向をすぐ連れて来いよ」

宮城も天馬に釣られて乱暴な口調になっていた。「それにしても」と、宮城は思う。天馬はずいぶんと日向と仲がよさそうだったと。類は類を呼ぶと言うが本当のことだと。天馬が日向を連れて来た。入り口で戸惑っている日向に「入れよ」と天馬が誘う。日向はおずおずと二三歩中に入った。躊躇している。誰も校長室には喜んではいらないものである。ましてや日向は宮城とは初対面である。「大丈夫だよ、心配するな」と天馬はすっかり先輩気取りであ

る。宮城は立ち上がって日向の側に進んだ。そして、「大変だったね。でもねあまり心配するんじゃないよ。取り敢えず座りなさい」と来客用のソファを勧めた。

日向の話によると早朝の七時頃、警察が事務所に「乱入」してきたと言う。そして母親と同居の男が逮捕された。さらに部屋がくまなく搜索され足の踏み場もない状態だったと言う。

「今、事務所つて言ったよね。どこよ、そこは」と、宮城は日向に尋ねた。すると、どうやら工事現場にプレハブ小屋のようだった。男はそこで働く男たちの監督をしているようだった。さらに話を詰めて行くと住んでいたアパートからは半年前に引越していたのだ。そこは彼らの学区外にあたる。男は「普通の人でない」と日向は言った。どうやら麻薬の常習者だったようだ。日向の母親は男の愛人になり、やはり麻薬をやっていたのだと言う。幸い、子どもたちには何の被害がなかった。

「それにしてもその事務所から学校までどうやって通っていたんだ」

宮城は少し苦い顔をしながら日向に尋ねた。もう半年にもなるのに優二たちの転居の事実や家庭事情を全く把握していないことに忸怩たるものがあつたからである。

「僕は自転車です。花菜を後ろに乗けて通っています」

「優二はどうして来ているんだ」

「はい、優二は歩いたり、走ったりです」

宮城は天を仰ぎたくなる思いであった。兄が妹を荷台に乗せて自転車を踏み、弟は小走りについて小一時間も学校まで走る様子を思い浮かべると切なくなつた。なんという健気なさだと思つた。それにしても子どもたちが本当に麻薬禍に見舞われていないのが心配でならなかつた。宮城は天馬に「下へ行つて二人を呼んでおいで」と言つた。天馬は「よっしゃ」と言いながら駆けて行つた。「駆けるな」と言う宮城の言葉など届きようもなかつた。

通常なら学校に着くや否や教室に行つていたのだが、今日は優二も花菜も渋つていたと言う。そこへちょうど天馬が通りかかったのである。すっかり親しくなつていた日向は天馬に事情を話したのだ。お調子者の天馬は「校長に話してくるから待っている」と言い、校長室へ駆け込んだという次第だった。

宮城は天馬が優二たちを呼びに行つてゐる間に、隣室の職員室へ行つて教頭と担任の遠山に事情を話した。二人とも驚き、呆れ、「なんて言う親だ」と言つた。宮城は二人を校長室に招き「もう少し事情を確かめよう」と言つた。天馬にはこのことは絶対に内緒にして教室へ戻るように伝えた。しかし、すぐに噂は広がるだろうと思つた。天馬の性格では一分たりとも持たないだろうと思つた。花菜に事情を聞くのはあまりに気の毒だったので、優二から確認の

意味も込めてもう一度尋ねた。天馬の言うことと大差はなかった。しかし大事なことが抜けていた。警察の婦人警官から学校へ行つて荷物を取り、すぐ戻るように言われたというのである。宮城も二人の教師も警察からの連絡があつてもよさそうだと思つた。しかし、今まで誰もこの情報を得てはいなかつた。中学生と小学生二人である。母親一人が保護者である。その保護者が逮捕されればこれは児童相談所の出番であるはずである。警察から連絡がなくても児童相談所からはいずれ何らかの連絡があるはずだ。宮城はその連絡が入ったらすぐに伝えるよう二人に話した。そして、当面秘密事項にして三人以外には漏らさないことも確認した。取り敢えず、中学校の校長と教育委員会には報告しなければと思つた。また、日向に尋ねるとお金は一銭もないと言う。朝食もまだだと言う。宮城は食事代として三千円を与え「大事に使いなさい」と伝えた。また、万一のこととも考え学校の電話番号をメモ書きにして持たせた。

その後、児童相談所から連絡が入り、三人の処遇が決まつた。どこの相談所も定員一杯で三人を引き取る余裕がなかつた。結局、三人はそれぞれ別々の相談所に引き取られて行つた。

「相談所や児童保護施設でも僕はいじめられたです。多分、兄貴や妹も同じだと思います。たいいていの子は両親のどちらかか、あるいは二人とも亡くなるか、はたまた離婚で預

けられるんですが僕たちは犯罪者の子なんです。何もしやべらなくてもどこからか漏れちゃうんですよ。それで『犯罪者の子』つてずいぶんいじめられましたよ。いじめより辛いのは無視ですよ。施設や学校でも無視されると誰も助けてくれないんです。友達も欲しくても誰もなってくれないんですよ。まるでゴミ扱いです。回りにたくさん人がいるのにいないと同じです。ひとりぼっちです。この辛さは経験した者でないと分かりません。先生のようにですよ、校長先生までやった恵まれた人には尚更分からないと思いますよ」

宮城は優二の言うことに少しの反論も出来なかった。優二たちが母親の逮捕という惨劇を目の当たりにしたことも母親や男の勝手で通学に一時間かかる離れた飯場小屋のようなどころに転居させられたことも知らなかったのである。

「母親の犯罪は僕らには全く関係ありません。それにも拘わらず、ずうっと付きまとって離れないんです。社会に出てからもそうですよ。ろくな仕事になんか就けません。同僚に家庭のことを尋ねられても何も話せません。いつ、どこから母のことがばれるか分かりやしませんからね。分かったらそれでおしまいです。しゃべらなければしゃべらないで変人扱いでしょう。結局、自分の居場所がないんですよ。信頼できるの妹だけです。兄貴は昔から全く当てに

なりませんから」

宮城のセクハラ問題は二人の話題から消えてしまったかのようにだった。優二は今までの溜まりに溜った鬱憤を吐き出すように宮城に話し続けた。それは話というより訴えに近いと宮城は捉えた。

「まあ、ビールを飲んだら。さつきから話し続けて喉が渇いたでしょう」

宮城の言葉に泡の消えかけたビールをゴクリゴクリと優二は飲み干した。

「先生はお金のない苦しみは経験したことがありますか」

「それはあるよ。今だつて苦しいよ」

「先生、先生の言っていることと僕の言っている苦しみの次元は全く違うと思いますよ。先生も知つてのように僕が初めて学校に通い出したのは五年生の時です。それまで何をしていたかと言うと妹の世話や家事をやらされていたんですよ。とにかくしょっちゅう引越すから。何ヶ月も同じところに住まないんです。そんな時は本当の父親がいたんですが、トンネル工事やダム工事の現場を転々としていたんです。父親が事故死してようやく賑やかな場所で生活するようになったです。それが桜町ですよ。でも知つての通り悪い男に母親がつかまってしまつて、転々生活に逆戻りですよ。父親がいた時には食うことには困りませんでした。死んでからです、苦しくなつたのは。こんなこと

言うのは辛いんですが、僕の母親は男にだらしないんですよ。とにかく男がいなくて駄目なんです。後になって気づいたんですが、父親が工事現場で事故死したので結構な見舞金や労災保証金をもらったはずですよ。しかし、母親はほとんど男に貢ぐかむしろ取られたんですよ。家事もあんまり得意でなかったです。外に出歩くことが好きで、結局食事も掃除も洗濯もみんな僕の仕事です。兄貴は兄貴で暴走族仲間に入っていて頼りにならなかったです。母親は時々お金をくれますがそれでおかずがいつも買えるとは限りません。一円がない時だってしょっちゅうありましたよ。いつか醤油を買いに行ったら本当に一円が足りなくて涙を流しながら家に帰ったことがありますよ。今だって少しも贅沢なんかしていませんよ。とんかつやステーキを腹一杯食べたいなあとと思うこともあります。食べたなら小遣いがなくなっちゃいます。たばこが買えません。これは内緒ですけど小遣いを少しでも多く貯めて妹に上げたいと思っているんです。妹も働いていますよ、正社員ではありませんから生活ぎりぎりです。妹だけは何とかまともな生活を送らせてあげたいと思っていますんですよ。今回の先生のセクハラ事件も妹に対してのことだけに許せないんですよ」

優二は再び「セクハラ事件」を持ち出して来た。

「何回も言ううただけ私にはセクハラをしたという覚えは全くないよ。君が証拠に挙げる映像にしてもどのよう

も取れるものだろう。第一被害者である花菜ちゃんに会わせようとしなことが君の弱みを暗示しているんじゃないか」

「先生、何回も同じことを言わないでくださいよ。本人は会いたくないと言っているし、被害を受けたとも言っているんですよ。その交渉は兄である僕に一任しているんです何らかの誠意を示してもらわないと我々は引き下がれません」

「それなら聞くが誠意って何だよ。はつきり言ってもらおうじゃないか」

「だからそれは先生が示すことですよ」

優二の真意は明確であった。しかし、ここで宮城が折れて幾ばくかの金額を示したところで承知はしないだろう。相当の金額ではないと優二は引き下がらないに違いない。また、一度では済まないことも十分に考えられる。このことは広田からも念を押されていた。

「はつきり言おう。私は君に一円たりとも払う意思はないよ。もし、それで不満ならその写真なり何なりをどうにでもするんだね。ただし、こちらにもそれ相応の対処をするから覚悟はするんだね。前回同様、今日も録音しているからね」

「先生、どうしても駄目だって言うんですね。じゃ、本当にこの写真を流しますよ」

「分かった。まあ、かつての教え子だから一つだけ言っておくね。君の生活保護費の受給ね、違反だよ。福祉課に通報したら直ちに調査が入り、君は最低でも虚偽で受給した金額を返済しなくちゃならないよ。勿論臨時収入の件もあるしね」

宮城は組織の名を騙り入寮者をスカウトしていた件で、その組織の者が優二を探していることは伏せた。いずれすぐ分かることでもあり、恐怖の時間は少ない方がいいだろうと考えたからだった。

「先生、どうしても駄目ですか」

優二は少しの間を置いて苦い表情で問うた。

「なんとしても駄目だね」

宮城はきつぱりと答えた。優二は苦い顔のまましばらく考えていた。そして顔を上げると、

「先生、何とか助けてください。今までのことは謝ります。少しでもいいんです。お金を貸してください。五万円でもいいです。必ず返しますから」

と懇願してきた。

宮城は気持ちが悪かった。五万円ほどなら上げてもいいかなと思った。これで喉の奥に刺さった腹立だしいトゲが取れるなら安いものだと考えた。それに貧しい兄妹たちが多少でも潤えるなら宮城の良心も満たされると思った。しかし、広田の言葉が再び浮かんできた。広田は宮城に「絶対

に、どんな形でもお金を渡したら駄目である」と幾度も念を押したのである。恐らく宮城の心の弱さ、世間知らずをおもんばかつてのことだった。

「優二君、私はもう年金生活者である。それに短大の報酬なんて雀の涙程なんだ。君に貸すほどのお金はないよ。このことはもう二度と話には出さないでくれ」

二人の間に居心地の悪い沈黙が続いた。耐えられなくなつた宮城は、「折角だから寿司を食べたら」と促した。

しかし、優二は苦虫を噛みつぶしたような表情を崩さず、無言のままであつた。宮城はジョッキに三分の一ほど残つたビールを音を立ててすすめるように飲み込んだ。

「やっぱり教師なんて信用できないな。いつだってうまいこと、きれいなことを言うがやっていることと言っていることは大違いだよ。とにかくこのことはまだ終わってはいないからな」

そう言い捨てると優二は立ち上がり、音を立てて出て行った。宮城はテーブルに両肘を付け、手で顎を押さえたまましばらく目を瞑っていた。そして、優二の言葉を幾度も反芻した。言いしれぬ空しさが彼を襲った。

宮城は電車を使わずバスで帰宅することにした。バスだと終点から自宅まで小一時間ほど歩くことになる。その時間が欲しかったのである。空を見上げると薄い月が雲の切

れ間に浮いていた。ようやく明日は秋空が見られると、宮城は心が少し軽くなるような気がした。もう秋だ、と宮城は心の中でつぶやいた。

大きな病院に隣接して保育園がある。十日ほど前だった。金網越しに園児の遊ぶ姿が見えた。砂遊びや鉄棒やかけっこなどそれぞれが自由気ままに行動しているように宮城には見えた。二、三歳児ぐらいの子たちが裸足で遊んでいる。園の方針なのだろう。いい光景だと宮城は思った。歩を止めて金網越しに園児たちの様子を見ていると四、五人ほど子どもたちが寄って来て金網にすがって宮城を見ている。「裸足で元気だね。足は痛くないの」と問うと、一斉に

「痛くないよ」と答えた。「そうか、元気でいいね」と話し、離れた。宮城にはこの園児たちの無邪気さが、正直さがうらやましいと単純には思えなかった。人の育ちは真つ直ぐではないことは誰もが分かっていることである。そうとしても人の幸、不幸とはどこで誰が決めるのであろうか。はたまた本人なのであろうか。誰も幸福を願いながら、しかし誰もが幸福にはなれない現実がある。それは行き着くところ個人の努力、あるいは運に帰着することなのだろうか。

もう暗い園舎は静まり返っていた。園庭には勿論子どもたちの姿はない。だが、なんとなく昼間の園児たちの甲高い声が聞こえるような気がした。優二にもしこのような保

育園に通うような幼児期があったらいまのような境遇にはならなかったらうと、宮城はふと思った。優二や彼の兄妹たちが無性に哀れに思えた。そして、改めて先程の別れ方でよかったのかと思ひ返した。だが、とも思う。彼らは宮城が考えるほどに不幸だとは思っていないかもしれない。そして逆境とも見られる環境を今まで生きてきている。彼らの生命力のなせる業とも言える。他人が思うほど彼らは不幸でもなく弱くもないはずである。裸足で園庭を飛び跳ねる子どもたちの足裏のように日々強くなっているかもしれないのだ。悲観したり哀れみを持つことは、その者の傲りかも知れないのである。

長いこと教師を続けて来た宮城は常に「先生」と呼ばれることに違和感を持たず、先生という響きに尊大さを植え付けられてきたのかもしれない。優二の「教師なんて信用できない」という言葉に宮城は腹を立ててはならないと思った。

保育園からしばらく歩く専用歩道になる。ここは昔、畑地感概用水であった。今は歩道として整備されて、植栽もされて格好の散歩道ともなっている。近隣の住民が何ヶ月に一回は総出で草刈りやゴミ拾いなどの整備を行っている。その道の一面に真つ赤な花が咲いていて夜目にもはつきりと見えた。茎が地面から直立し、十数本固まって咲いている。その花に、今は、葉がない。葉は花が落ちてから出て

くる。めずらしい花である。花の形は、両手を手首のところで合わせ指を広げ輪にしたようである。花びらは針形、深紅にわずかな黄色が溶けているような色である。秋の混じりけのない光線を全て吸収したような色にも見る。彼岸花、別名マンジュシャゲとも言う。白い彼岸花もあることを知ったのはずいぶんと年齢が行ってからのことであつた。「ここにも彼岸花があつた」。そうつぶやきながら宮城はまじまじと花を見つめた。

宮城が子どもの頃には、墓地や土手などあちこちに群生して咲いていたのをよく見た。固まって咲いているものだから遠目には小さな赤い絨毯が広がっているようにも見た。しかし、その赤色が毒々しくも見た。また、よく畑や田んぼの一面の墓地に咲いていたものだから「墓の死人の血を吸って赤くなっているんだ」と子どもたち同士では言い合っていた。毒々しさと不吉さがあいまって、子どもたちはその花を見ると、まるで親の敵にでも出会ったかのように憎み、ののしつたものであつた。その上、それらの花を棒で薙ぎ倒したり、足蹴にしたりした。今にして「罪深いことをしてしまった」と思うのである。後にこの花には有毒成分があるということを知った。その昔、私たち子どもたちはひよつとしたらそのことを聞き知っていて残酷な行爲をしたのかもしれない。

ここに咲いている彼岸花はどこも傷ついてはいない。宮

城の子どもの頃のような者は誰もいないのだろう。地面から黄緑の茎が屹立している様は毅然とした風格さえ感じさせる。花の絶妙な輪は造化の妙を見る思いである。しかし、過去のまがましい思いを引きずっているのか、やはり好きにはなれなかった。何か人工的な気がしてならなかったのだ。

宮城はその彼岸花を眺めながら、実は誰もが毒を内に持っているのだということに気づいた。「この自分にも」と。

これらの彼岸花のように毒を美しい朱色で覆い隠すものもある。下手な生き方ですぐに露見させる者もいる。あるいは、宮城のように気づかずにごまかして来ている者も数多いだろう。優二を責めてはみたが、それがどれほどのことかと宮城は自分に問い返すのだった。優二は彼自身の責任によることなくあたかも強い圧力によって社会の片隅に押し込まれ汲々として命を繋いでいる。命を繋ぐためには例え非道でも、その非道しかなければ選択をせざるを得ない。安全地帯、高見にいる者たちが彼を批判することはいかにもたやすい。しかも、それを大声で叫べば叫ぶほど自己満足感が満たされる。場合によっては大向こうからの喝采を浴びる。強気の者にとっては弱者の存在が不可欠なのだろう。弱者がいて自らの存在を強化されるからだ。

優二がこれから金に困ってくることは目に見えている。組

織の名を騙って金などを巻き上げたり行為は、その組織の者たちが絶対に見逃すはずはない。肉体的な制裁は勿論のこと、金銭のことも話の中に出てくるだろう。彼の収入は彼の生活を維持するのに精一杯であるはずである。例えばほんのわずかな時期であつたとしても優二は宮城の教え子であつた。優二の先を考えるとさすがに宮城は忍びなかつた。かと言つてお金を渡すことは絶対に避けなければならぬ。何か方法があるに違いないと頭の芯を絞るようにして考えを巡らした。目を閉じ集中した。ぱっと目を開けた途端一瞬の暗黒の後に彼岸花の朱が目飛び込んで来た。

「そうだと毒には毒だ」

宮城の視界が急に明るくなつた。

「一か八か彼に頼んでみよう」

彼とはやはり宮城の教え子である。彼が三十代前半の頃担任をした。優二同様、児童施設から通学していた。彼が二十代の頃街でばったり会つた。彼から「先生」と話し掛けてきたのだ。宮城は話をしていううちに彼が小学三年生の顔と姿がありありと眼前に浮かんで来たのだつた。宮城は懐かしくなり、お茶などを飲みながら三十分ほど過ごしたことがあつた。けばけばしい服装と指に太い金の指輪をしていた。まともな仕事はしていないと推測された。仕事を尋ねると、ある組織の幹部になつていと答えた。宮城と同じ県内の南部の都市に住んでいると言う。関わりは持

たない方がいいだろうと思つた。別れ際に彼は「先生、何か面倒ごとがあつたら連絡くださいよ。先生には随分可愛がつてもらいましたから恩返しをしたいんですよ」と言つて、握手をしてくれた。そのことを突然思い出したのである。まるで天の啓示のようだ、と宮城は思つた。それに従つて「駄目元で優二のことを頼んでみよう」と思つた。「藪から棒」のことでもけんもほろろに断られるのが落ちかもしれないが、やつて見ようと宮城は決心した。

中学生らしき四、五人の男の子たちが自転車で宮城の傍らを通り過ぎて行つた。部活の帰りなのだろう。何が楽しいか定かではなかつたが、彼らたちの明るい笑い声が、彼らが過ぎ去つた後にも漂つていた。それに惹かれるように宮城の口元がほころんだ。自宅までの距離は後二十分、宮城は足が少し軽くなつたように思えた。

「琅」同人規約

「琅」の円滑な発行と一層の充実を図るため、同人を求めています。

【同人規約】

資 格：特になし（但し、これまでの作品を一部お送りください）

同人費：「琅」は、年に2回（春と秋）の発行を原則としています。同人は、作品掲載の有無に拘わらず、各発行に関し5,000円（年10,000円）の同人費を納入していただきます。また、上記同人費とは別に、各号への掲載に関し、以下の掲載料を収めていただきます。

原稿掲載費

- ①10頁まで : 一律、10,000円
- ②11頁～30頁 : ①に、10頁を越える部分1頁につき1000円を加算。
- ③30頁～ : 30頁を越える部分については、原則的に無料。
（ただし、30頁を越える頁数の量、他に執筆量が30頁を越える執筆者がいる場合には、若干の費用負担を求める場合があります。要相談）

* 同人誌は、原則的に9ポイント2段組で構成されており、1頁は400字詰原稿用紙で、およそ2.5枚の分量になります。

発行誌配布

特に申告がなければ、発行誌は5部を配布します。但し、印刷前に申し出た方に限り、下記のように追加配布することができます。

- ・執筆量10頁以下の方・・・ 2部まで
- ・執筆量11頁～20頁の方・・・ 5部まで
- ・執筆量21頁～30頁の方・・・ 10部まで
- ・執筆量31頁以上の方・・・ 15部まで

* なお、発行後1月ほどして、合評会を行います。それまでの間に、同人は他者の作品に目を通し、合評会で意見を述べるようご準備ください。
（会場は、主宰者及び編集者の都合を考え、八王子近辺となることが多い。）

『琅』三十号への手紙

啓子ちゃんのためになき勉強を祈って

昭和二十年睦月

和田英夫

の銘があり、感無量でした。

昔義兄は何かの時には本を私達にプレゼントし、必ず銘を書くのが常でした。物のない時の悪い紙の本でしたがしばし感慨にふけりました。

私の手紙また若葉会を取り上げて頂き嬉しく拝読致しました。

私も稀勢の里を応援していますが、今一つ気力が足りないのがっかりしています。先場所は一寸出てきた様に思います。

伴奏は指揮者とオーケストラを一人になうので集中力がとても大変です。それで老化が防げたかと（かげの力持ち）私は有難く思っています。

先日古い楽譜を整理していますと分厚いシューベルトの歌曲全集が出て参り、その本の扉に亡き義兄和田英夫（憲法学者）からの

先日は本当に市ヶ谷までお越しくださいますして有難うございました。

くれぐれも御身体大切に。

4/30

廣江啓子

宗内 敦 先生

道路脇の平戸ツツジの控えめな淡い香りに誘われるように街路樹の緑も日に日に色濃くなりました。先生におかれましては、お変わりなくお過ごしのことと、お慶び申し上げます。

ありがとうございます。また、私の拙文をお載せいただき、また、期せずして、旧

友の赤松氏の文と並び読まれる恥ずかしさに汗顔の思いです。遠く離れて活躍する盟友の美文に感心しきりであります。

さて、牛村圭氏の「歴史に向きあい、語りあうために」は、明治から昭和の近現代史を学び直している私にとっては、大変勉強になる提言でした。正しいことは何だったのかを知るためには、思想や文献等にも偏りのない選択が必要であると留意しているつもりでしたが、発表された時代背景や資料の分析のしかたなど公平な判断が必要であることがよくわかりました。参考にしたいと考えています。

先日3月19日土曜日の夕刻に、お電話を頂き、先生のお元気なお声に触れ、懐かしさとともに温かさを感じる事ができました。ありがとうございました。ちょうど大阪場所を観戦にお見えだったのですね。前半は、先生のご鼻唄、大関稀勢の里が調子良く、盛り上がりを見せておりましたので、早朝よりNHKの「幕の内全取組」で応援

していました。「二言、三言、世迷い言（17）」で記されているように、「四股Ⅱ腰の強さ」はあらゆるスポーツの基本です。私も身をもって感じましたので、娘にも足腰の強さを説き、トレーニングさせました。

歩くことの大切さは、身をもって感じております。授業を持たせて貰わなくなつて3年間、デスクワークが多くなり、運動不足から体重が増え、おまけにストレス解消で飲む回数も多くなり、定期検診の数値が芳しくありませんでした。五十路を迎えて、自分の体には気をつけなければと、駅までの自転車通勤をやめ、往復1時間歩いて通勤しています。体重が10kgほど減り、学生時代のスーツが合うようになりました。

私は、歌を口ずさみながらではなく、学生時代に聞いていたポップスを聞きながら歩いています。若かったときにはよくわからなかった歌詞の意味に共感できるのも、年齢を重ねたからだと感じました。目には

季節の移り変わりを感じ、健康診断の数値も安定し、体調も良く、多くの恩恵を享受しています。ただ一つ、靴の底がすぐに減るのが難点ですが、新しい靴を買う喜びとして納得させています。「健康は歩行から」を実践していきたいと考えていますが、ただ一つ、趣味が無いことが困っていることです。定年までには何とか探していきたいと先生のエッセイで思った次第です。

どうか、末永くご健康でご活躍をお祈りいたします。 敬具

5/5

井口光児

宗内 敦様

前略、この度は、また「琅」をお送りいただき、ありがとうございます。

早速読ませていただきました。相変わらず貴兄の意欲的な編集ぶりを感じます。「アイ・ラブ・パリ」では、西欧文明の中心であるパリの不行き届きな諸相が描かれていて、改めて日本の細やかな気配りの文化を

誇らしく思いました。

ご健康に留意されての御活動を祈っております。 草々

5/5

菊池明

謹啓

「琅」三十号、ご贈賜わり、誠にありがとうございます。いつもいつも気に留めていただき、心より感謝申し上げますとともに、ますますご健勝で活躍されている宗内先生のお姿に、七十三歳になりました私も勇気づけられることしきりです。

宗内先生がおっしゃるように、身を守る、国を守る、世界を守るまなざしを持たなければ生きていけない時代になったとのこと心情に私も同感です。牛村先生や松村先生そして宗内先生のお言葉をじっくり拝読させていただき、後日、またお手紙をさし上げたいと思っています。よろしくお願い申し上げます。 謹白

5/6

末松義則

松村茂治 様

この度は「琅」をお送りいただきまして、
どうもありがとうございます。二本とも
拝読させていただきました。

一 本目につきましては、おそらく新自由
主義的な流れがあるのでしょうね、当該個
人自身と彼女をとりまく家庭・家族の
みに帰属させようとしている傾向があるよ
うに感じます。生態学的な環境との相互作
用やエビジェネティックな発達のダイナミ
クスは無視されがちであるようにも思いま
す…。

そんな話はさておきまして、バリシリー
ズは面白く拝読しました。二十六巻も読み
なおしてみました。そうでした、モネのお
話をお書きでした。

ヨーロッパには基本的に乗越精算という
概念は無いということ、前にどこかで伺っ
たように思います。銀座―高尾―大月の比
喩はなるほどとも思いました（関西人だと

辛いかもしれません…。心理学関係者で
も電車ネタは、お好きな方が多いので、い
ろいろと教えていただけるかもしれません
ね。

それとトイレの件は大変でしたですね。

日本のトイレ事情とは大きく異なるとはい
え…。本当におつかれさまでした。ベルサ
イユの朝顔、なるほど…ですね。それと昔
の駅のトイレは確かに壁で、下に溝があり、
アンモニア臭がきつかったように覚えてい
ます。

そうそう、三本の矢の最後の一本がどこ
にいったのか、少々気になっております。

3本目は海外で利用可能なスマホとか、ど
うでしょう？！地図とかガイドとか、日本
語でいろいろ検索も可能ですし…。

それでは、次回作（？）の文学館散歩シ
リーズも楽しみにしております。また小説
の方も是非、拝読させていただきます。

ではどうもありがとうございました。

徐々に暑くなって参りますが、どうぞくれ
ぐれもお元気で過ごしてくださいませ。
失礼致します。

5/7 成田 健一

宗内 敦 様

謹啓 「琅」三十号、ありがとうございました。
ました。巻頭の二論文、いずれも感服いた
しました。教育の終局の目的は世界平和の
実現であると思います。いまの「六・三・
三」制でいいのでしょうか。文科省は必要
でしょうか。いろいろ考えさせられました。

大兄の「エッセイ」ますます健筆ですね。
大兄が相撲に強かったとは初めて知りまし
た。お互いあと何年でしょうか。せいぜい
楽しみましょう。死ぬときは死ぬときです。
一層のご健勝ご健康を祈っております。御
礼まで。 敬白

5/8 吉村久夫

第30号、お送りいただきありがとうございます

いました。

違憲、合憲とか各界で論争が巻き上がっている「安保法案」、牛村さんの論文を何回も読み替えています。戦争を体験したものととして理屈抜きにノーです。

先日、恒例？の大津に村田さんを訪ねてきました。年々加齢現象が進んでいるように感じました。九十二歳になったそうで、歩くのも不自由で、施設内でも歩行器の使用が欠かせないようです。

帰途、京都の法然院を訪ねました。静かな本堂によい寺でした。少し離れた裏山の方に谷崎潤一郎や稲垣足穂といった文学者の墓がありました。その一画に哲学者九鬼周造の墓もありました。墓碑に、

見はるかす山々の頂、梢には風も動かず
鳥も鳴かず、ましてしばしやがては汝も休らはん

とありました。

いずれは、人生の幕も引かれる訳ですが、
せめて「戦争」という言葉を死語とし、そ

れを土産にこの世の舞台から降りたいと願っています。

琅の刊行について「もう少しがんばってみよう」とのこと心強いことです。

妄言多謝

5／8 白井 昭

宗内 敦先生

先生、大変ご無沙汰しております。

庭のアヤメが美しく咲いています。少し前まで「寒い！寒い！」と文句を言っておりましたが、「今日はなんだか暑い・・・」と思うような陽気になってまいりました。3月下旬からこのGWまで、仕事が忙しく、桜が咲いてもゆっくりとお花見する余裕もなく、気づいたらGWも終わりとなっています。

さて、琅30号をいただきました。ありがとうございます。先生のメッセージを読み、申し訳ありませんが、まず先に三浦様からのお返事を読ませていただきました。春日部さんの苦しみを一人の読者が知るこ

とでも、「希望も出て、新たなエネルギーになる」と言っていたことで、この私でも小さな力に成り得たのだと、涙が目に浮かびました。春日部さんが、思うようにならない体調の中でもカウンセラーを目指し、学んでいることを知り、私も、三浦様と同様に、春日部さんの心身の再生を祈るばかりです。

『教師は子供のを深く傷つけてしまうかもしれない存在である』ということを経験銘じておきたい」と話していらつしやします。が、母親だって、またどんな人であっても、誰かを傷つける存在になりうるということ。を念頭におき、日々の暮らしの中でも言葉や行動に気をつけたいと思いました。

私にも、統合失調症に悩む今年50歳になる従弟がおります。彼は20歳頃、理学療法士（だったと思いますが）を目指しておりました。実習先での嫌がらせがあり、本人は努力したのに実習成績を悪く評価されたと聞きました。それは、その道に進むこと

は難しいということであり、希望を失ったようです。目指したことは違う職業に就き、そこではとても歓迎されたようですが、結局は心身の不調で退職することになり、統合失調症と診断されました。86歳の伯母と二人暮らしで、仕事には就けていません。「自分は生きていてもしかなかったがない」という彼の言葉に、いつも、どう言つてあげればよいのか(?)と思います。春日部さんのように自身の辛い経験を踏み台にしてカウンセラーになろうという気持ちがあるのはまだ希望があると思います。周囲がどんなアドバイスにしても本人の心が動かなければどうにもなりませんから。紹介されていた「たいせつなきみ」、私は読んだ事

がありませんが、読んでみたいと強く思いました。自分も読んで、また徒弟にも紹介したいと思い、先ほど注文したところです。

さてさて、先生の「二言、三言、世迷い言」を読みながら、都留文の宗内ゼミで、先生のクラシックギター演奏を聴いたこ

と、スキーを先生に習ったことをまた思い出していました。こういう楽しかった思い出をたくさん持っているということは幸いです。

ところで、先生はお相撲も得意だったのですね。テニスもご一緒しましたが、さすがにお相撲はしなかったですね。

勝敗にこだわる礼節を忘れたスポーツ。競技に勝敗はつきものですが、礼節を重んじる心は大切ですね。私は羽生結弦選手が大好きで、フィギュアスケートの番組をよく見ます。羽生選手がリンクから出る時に必ずリンクに一礼する姿にいつも感心し、素晴らしい選手だと思っています。

私の息子達は、香川県多度津に本山のある少林寺拳法をずっと習っています。少林寺拳法は、開祖 宋道臣が中国の少林拳を習

得して、日本で創始した武道ですが、基本は護身で、練習は演武という「型」が中心です。合掌礼に始まり、合掌礼で終わります。鎮魂行という座禅をすることもあります。

です。練習場に入るときは靴をきちんと揃え（当たり前ですが、これが大事ですよね。）大きな声で挨拶をし、先輩を敬い、後輩をいたわりながら修練を積むことを教えられます。「自己確立」「自他共栄」を目指す武道です。競技はもちろんありますが、演武

が終わった瞬間に勝敗がつくものではないためか、勝った、負けたの一喜一憂は他のスポーツに比べれば無いように思われます。先生のエッセイ、「日本文化を守る」を読み、息子たちに少林寺拳法を習わせて良かったと思いました。

今日のお便りの最後に、「たかが川柳されど川柳（6）」にあった、「マイナンバーきつと当たるとしまい込む」に共感。なんとなくそんな気がします。私もしまい込んでいます。

まとまりのない話になりました。薬無用でお過ごしになられているご様子に安堵しております。これからもお体を大切になさってくださいね。歌をうたいながら回遊

＜『琅』への手紙＞

路を歩かれる先生のお姿を想像しながら、私も明日からまた元気に頑張ろうと思えます。 それでは。

メールにて大変失礼いたしました。

5/8 中山京子

拝復

「琅」三十号ありがたく拝受いたしました。手のふるえ相変わらずですので御判読願ひ上げます。先生のエッセーで、梅原先生の講演を聴かれたとのこと、大層羨ましく思いました。「日文研」なる学会に所属もですが、京都まで足を伸ばせること（老生足腰に自信なし）など。「人類哲学序説」の草木国士悉皆成仏の日本文化を中心に据えて未来を救う哲学をこの十年間に完成させるという梅原先生の意気込みに触れられたですね。

稀勢の里には、期待し、いつも裏切られてきましたが、今年あたりは本物になりそうな気がしますね。先生の声が聞こえて四

股を踏んでくれればいいですね。新史実によつて歴史を修正することはあるでしょうが、主義、主義者という使い方は、難しいですね。 勿々不

5/10 古明寺義勇

松村 様

拝啓

ご無沙汰しております。

同人誌「琅」をお送り頂き、ありがとうございます。僕も、ジベルニーとヴェルサイユに行つたときの武勇伝(?)を思い出して、楽しく読ませていただきました。またお会いできることを楽しみにしています。

5/10 氏家 英幸

宗内先生

大変ご無沙汰致しております、瀧川美生です。

琅29号・30号をお送りいただきまして、

誠にありがとうございます。去年からトルコに滞在しており、先日帰国してから琅の到着を確認いたしましたため、お礼が遅れてしまいました。申し訳ございません。

琅ももう30号ですね。私が明星大学に在学していた頃は、15・16号くらいでしたでしょうか。あれからもう随分と年月が経つてしまいました。私はすっかりトルコでの生活に馴染み、帰国した今も、次はいつトルコに行こうかと、そればかり考えております。

まるで季節のお便りのように届く琅は、明星時代の先生のあたたかなご指導を思い起こさせるものです。今後、末永い先生の御活躍をお祈り申し上げます。

5/12 瀧川美生

宗内 敦 様

「琅」三十号、ご惠贈いただき、有り難うございました。

三十号、三十年の歳月は、過ぎてしまえば呆気なく思いますが、継続したという事実が重大で、貴いものであります。

「歴史に向き合い、語り合うために」
歴史修正主義といわれる考え方は、いづころから表面化したのでしょうか。教科書検定違憲訴訟がつよく印象づけられております。

学問として歴史を学んだわけではない一般人である私にとり、歴史認識が、過去の人生、体験経験に大きく影響されていることは事実であります。私は戦争中、空襲により焼け出されました。被害から精神的経済的に立ち直れるまで、ほぼ二十年を要し、さまざまな辛酸を嘗めました。いまでも、アメリカに家を焼かれた、その元をつくったのが日本という「国家」である、との認識が改められません。

戦争は「悪」であります。私は憲法擁護、安保法制反対、立憲民主主義保持の立場を

尊重いたします。

「文部科学省にもの申す」
引退して二十三年にもなりますと、現場

の事情に疎くなります。それに高校勤務でしたから、「イジメ」とかいう話をついぞ聞きませんでした。長男が幼稚園、小学校のころ、ちよつとあつたらしいですが。

昔も「イジメ」はありました。私も被害者でした。東京から疎開してきた同級生のイジメられるありさまに、こつちが泣ききたくなるぐらいでした。

とはいえ私たちの世代に、「自殺」した例を聞きません。情報機能未発達の時代でしたから、あるいは伝わらなかったのかもかもしれません。

「イジメ」は、今後もなくならないでしょう。人間の本質に根差した行為だからです。「イジメ」が常に起こり得るものとの前提で、一件でも少なくする方策を考えることが肝心と思います。

イジメられるのが、どのようなタイプの子か、おおよそ想像が付きまします。腕力の秀でた子、向こうつ気の強い子はあまり被害に遭いません。

イジメる側の子に共通する特徴があるのででしょうか。昔は「悪玉」がおりまして、先生もそいつをマークしていればよい、といったものでした。

イジメる子についての研究が必要だ、という気がします。多分、「人権」が壁となり、困難だと思いますが。

「二言、三言、世迷い言」

「健康」、「老い」が、やはり気になりました。

父は重症の脳血栓を病み口がきけず記憶を失い、ほとんど植物状態のまま、二年九ヶ月床に伏しておりました。母が寝たきりになったのは一年足らずでしたが、白内障が進み、心臓障害のため手術が出来ず、耳も聞こえなくなりました。

母の最期は「老衰」の診断でした。私は「どちらの死に方もいやだなあ」と思っています。でも、自分の力でどうにかなるものではありません。

まだボケてはいないつもりです。（そういうヤツこそ危ないそうですが）日常、誰の手も借りず生活しております。五年前、すでに命を落とすところを助かり、七十日間の入院。やっと回復したと思った途端、腎臓ガンが発見され、二年前に手術。残った腎臓も相当ボロになっておりまして、三ヶ月毎に検査してもらっています。まだ透析する段階には至らないようですが。

体力回復を図り、四十代半ばより始めたウォーキングに励んでおりますが、所要時間は同じでも距離短く歩数少なく、体調そのものが以前の水準に戻りません。年齢からして、戻そうというのが無理な相談かもしれません。

耳が聞こえなくなりました。補聴器を使っても、使わないよりまし、といったタ

チの悪い耳です。会話が億劫になり、息子たちとも必要最低限の口しかきません。サツキへ水をやっている最中、通りすがりの人に話しかけられるのが恐ろしくてならない始末。

母を見ていた六十代のころは、まだ自分の「死」まで考えませんでした。いよいよ「番」が廻って来まして、心構えはもとより、見苦しい最期にならないだろうか、息子たちの荷物になりはしないかと、苦にしています。とりあえず、残しといってもゴミにされるようなものの廃棄をと、心掛ける次第であります。

つい愚痴めいてしまいました。ご容赦願います。

ご健康第一にお過ごしくださいますよう。

5/13 依田茂夫

前略

先日、同人誌「琅」を送っていただきありがとうございます。続々アイ・

ラブ・パリ」を興味深く拝見しました。トイレが近くなっている我々にとつて大問題ですが、ベルサイユでも、パリでも、プロバンスでも困った記憶がありません。早め早めに対処してしまいうせいでしょうか。ぜひ続けて送ってくださいようお願いいたします。

5/20 奥野 正義

宗内敦先生

この度は、記念すべき『琅』三十号を惠贈くださいますありがとうございます。た。御礼が大変遅くなりましたが無礼を、心よりお詫び申し上げます。今号は3度ほど繰り返し拝読いたしました。

特に松村先生の「文部科学省にもの申す」は興味深く拝読しました。「いじめが存在するはずはない。あつてはならない」という考え方がはびこっている、あるいはそのようなプレッシャーがあるからこそ、悲しい事件が起こる度に、慌てて「いじめ

の実態調査”を行うような事態になるのでしょうかね。

私の中学校時代は「絶対に戻りたくない」3年間でした。1クラス45〜50人、1学年9クラスという人数の多さだったからでしょうか、生徒の顔を覚えられず、授業中の指名は出席簿を見ながらという多数の教師、学級がだらしないのは学級委員（私）のせいだと言って殴る教師、勉強はできるのに描く絵はこの程度かと鼻で笑う教師……。嫌な思い出の教師は中学校に集中しています。教師間のいじめも存在しました。また、部活動（テニス部でした）での上下関係も厳しく、（先輩には）3回お辞儀をしてからボールを渡すべきところを2回しかしなかったという理由で集中的にボールをぶつけられたり、学級委員の仕事で部活動に遅刻すると、狭い部室に連れいかれて先輩たちに囲まれ次々と暴言を吐かれたり……。（今思い返すと滑稽ですが当時は）いろいろ辛いことはありませんし

たが、相談したいと思えた中学の先生は誰ひとりいませんでした。教師間の連携（中連携）がうまく機能すれば、現在中学校が抱える問題の、解決の希望が見えてくるようにも思います。

「続々 アイ・ラブ・パリ」とても楽しかったです。「ヴェルサイユ ダーティコナー」をすぐに検索しましたし、いろいろ調べましてパリのトイレ事情にも少し詳しくなりました。また、シルクハットや日傘のルーツも初めて知りました。今号には、上野先生のエッセイにもモネが登場しましたので、睡蓮の池の写真を拝見しながら、先生方のエッセイを行ったり来たりして楽しく拝読しました。

『琅』二十九号への手紙で、私の拙い「小説」を掲載していただきまして、大変感謝しております。当時の赤羽さんのことを先生にお知らせしたくメールでお送りさせて頂きました。あまりの拙文に、身の縮む思いではありますが、赤羽さんのこと

を、宗内先生とご一緒に話題にできますことを嬉しく思います。

4月、長男が小学校に入学しました。年度の乱視のため幼稚園のときからメガネを着用しているのですが、入学後にかかわれないか案じておりました。ところが入学式の日に、担任の先生がメガネに関するあだ名を長男につけたそうで、息子は入学式初日からクラスの子にかかわれてしまいました。毎日帰宅しては「学校に行きたくない」と泣く息子。これからの人生でメガネをからかわれることは、まだまだあり得ること、あだ名をつけたのは先生であること、良かれと思っただけで下さったことであろうことから、担任の先生には相談しづらく、どうしたものか悩んでおりました。ですがあまりに続くので、思い切って相談しました。先生は自分の軽率さを詫び、すぐに対応してくれました。先生の指導が良かったのか、1年生という素直さが幸いしたのか、からかいはその日で収まりました。

おかげで、最近やつと落ち着いた毎日を過ごせるようになりました。

長男を産んだとき「子どもが0歳なら親も0歳」という言葉に励まされて子育てしてきました。今はまさに「子どもが1年生なら親も1年生」ですね。長男は新生活に慣れ、毎朝笑顔で登校しています。親としての未熟さを痛感しながら、まぶしい背中を見送る日々です。

『琅』20号のお祝いを申し上げたのがついこの間のようです。『琅』30号、誠にめでとうございます。武蔵丸の次は、稀勢の里が先生の「愛弟子」になりそうですね。

暑さが厳しい季節となりましたが、果樹園にいらっしゃる先生のお元気なお姿が目に見えるようです。そして、「はかなく考えている」とおっしゃっていましたが、私は先生の小説を心待ちにしております。これからのますますのご活躍をお祈りいたしております。

7/6 蓬田澄子

宗内 敦様

地震、災害と不安な日々ですが 先生におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申しあげます。

『琅』30号を賜り有難うございます。すぐにお礼を申し上げるべきところを、大変遅くなり申し訳ありません。

いつもいつも あたにかいお心遣い、心よりお礼申し上げます。

『琅』を拝受いたします少し前に、都留文大時、私は「方言学研究会」というサークルに在籍しておりました。このたび、故稲垣正幸先生の御子息様、金田一春彦記念図書館のご協力を得て全県地域別言語地図を完成したとの連絡を受け、HPを開きました。・・・

む む 難しい 私が卒業できたのは奇跡！と痛感しました。卒業以来の連絡（大学時、同時に在籍していない先輩です）（名簿

が残っていたのか）・・・頭が下がる思いです。今、『琅』（たかが川柳されど川柳）モネの睡蓮の池に癒されています。早く『琅』を読みこなせるようにになりたいと思います。

娘は今秋、ハワイで歌を披露することになり相変わらず音楽を続けるために仕事をしている状況です。

息子は東京で 就職内定をいただき、ほっと安心した次第です。

これから盛夏に向かっていくようです。また 先生御夫妻とお会いできる日を楽しみにしています。

どうか ご体調をくずされませんよう、先生、奥様 皆様お元気でお過ごし下さい。

7/10 細川 千恵美

【『琅』・あとがき】

☆これまで本誌発行に関する全ての業務を担っていた主宰者（宗内敦）から、その一部を引き継ぐことになった。すでに、割り付け等に関しては、何度か主宰者宅でコンピュータの前に座り、その手ほどきを受けてきた。今回から、業務をもう少し拡大すべしとのことから、あとがきも担当することになった。

☆そこで、改めて創刊号（一九九二年・平成四年、十月発行）の「あとがき」に目を通してみた。そこには、「金剛石たらずとも、どんな石くれもみな、清しい珠となり、麗しい玉となることができる」との思いから、「珠玉に向けて（中略）いつそうの錬成をはかるための場」として同人誌を企てたとある。お気づきの方もおいでになると思われるが、主宰者は、第二十八号の「あとがき」に、創刊号のあとがきの一節を引用した後、「美しい玉となるには麗しい文を書かねばならぬ。麗しい文を書くには清しい心を持たねばならぬ。その清しい心は、美しい心を持つ人々が集う世の中からもたらされる・・・」と続けている。

☆業務の引き継ぎは、当初、原稿収集・編集・割り付けという、どちらかという技術的な側面のことと受け止めていたが、こうして「あとがき」を読んでみると、託されているのは、技術的と言うよりは精神的なことのように思えてくる。「麗しい文章」も「清しい心」も、まだまだ心許ない新編集者としては、「美しい心をもつ人々」すなわち、同人諸氏及び読者の皆様のご支援・ご鞭撻を仰がざるをえないところである。

☆本稿構想中に、米国大統領の選挙があった。一緒にテレビを見ていた孫（小学二年生！）が、トランプブリードの途中経過を聞いて、「これは大変だ。戦争になると、テレビで言っているとの返事であった。戦争云々はともかく、結果についてのおおよその受け止めは私も孫と同程度で、マスコミではこの結果を、「世紀の大逆転」「想定外のこと」と評していた。後になって、今回の選

挙結果を正しく予想していた人もいたことを知ったが、そうした人は例外的で、少なくとも、私や孫の知るところではなかった。☆しかしながら、「想定外」という表現は、五年半前に、為政者も自治体も企業も科学者も、封印したのではなかったか。それにも拘わらず、今回再び、大方のマスコミや評論家は、自分たちの取材力・想像力の貧困さを、「想定外」の一言で片付けて涼しい顔をしているように見える。結果論と言ってしまうまでもだが、今回の選挙前の報道は、ミスリードの誹りを免れないのではないか。

☆業務を引き継ぎ、丁寧な仕事とと思っていた矢先、体調不良に陥り発行が一月以上も遅れてしまった。これを想定外のことだったなどと言いつつも思いはしない。生身の人間には思わぬことが起きる。そうしたことも想定し、新たな編集体制を考えて行きたいと思う。皆様の、ご理解ご協力を賜りたい。（松村茂治）

（評壇・執筆者紹介）

・牛村 圭（うしむら けい） 国際日本文化研究センター教授。専攻は比較文学・比較文化。著書『「文明の裁き」をこえてー対日戦犯裁判読解の試み』（中央公論新社〔中公叢書〕、二〇〇一年 第十回山本七平賞を受賞）。『「戦争責任」論の真実（PHP研究所）、『東京裁判を正しく読む』（共著 文春新書）

（次号原稿締め切り日） 二〇一七年三月末日

『琅』三十一号 二〇一六年十一月発行
編集・松村茂治 発行・宗内敦
発行所 19310821 東京都八王子市川町 一二八―二〇二
『琅の会』・Ⅷ（〇四二―六五―一二二七）
印刷所 株式会社ポプルス